史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡19

－南館部分の調査（1）－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1175集

2012

福岡市教育委員会

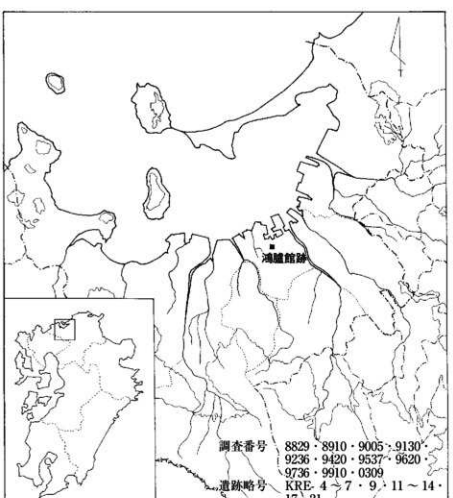
史跡 鴻臚館跡 鴻臚館跡19 －南館部分の調査（1）－ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一七五集 二〇一二 福岡市教育委員会

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡 19

－南館部分の調査（1）－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1175 集



2012

福岡市教育委員会

鴻臚館跡 史跡指定地区内調査区全景（デジタル合成）（上方が北）

巻頭図版 2

1. 第4次調査区全景（上方が北）

2. 第5次調査区全景（上方が北）

巻頭図版 3

1.第6・7次調査区全景（上方が北）

2.第9次調査区全景（南から）

巻頭図版 4

1. 第17次調査区全景（上方が北）

2. 第21次調査区全景（北東から）

序

鴻臚館は、飛鳥・奈良・平安時代の約400年間にわたり、中国や朝鮮の外交使節、及び商人などの宿泊・供応のほか、我が国の外交使節である遣唐使・遣新羅使、留学僧・留学生の送迎にも使用されました。鴻臚館は京都・平安京や大阪・難波にも設けられましたが、その遺構が確認されたのは、筑紫の鴻臚館跡だけです。

鴻臚館跡は、九州帝国大学医学部教授であった中山平次郎博士が、大正年間に万葉集の古歌等をヒントに現在の位置に比定しており、昭和62年（1987）に平和台野球場外野席の改修工事に伴う発掘調査により、その存在が証明されました。

以後、福岡市では、学識経験者からなる「鴻臚館跡調査研究指導委員会」の助言を受けつつ、計画的に発掘調査を行ってきました。発掘調査により、中央の谷を挟んで南と北に相似形の施設が存在すること、東向きに建てられていたことなどが確認されましたが、これらは文献記録からは全く窺うことができなかった事実です。

現在、平和台野球場跡北半を対象とする発掘調査を行っていますが、平成25年度を目途に調査終了の見込みであり、その後は史跡公園として整備する予定となっています。

整備に先立ち、鴻臚館跡の詳細についての本報告書を刊行していますが、発掘により蓄積された情報が膨大な量にのぼるため、谷部分、南館部分など、数冊に分けて作成しており、本書は南館部分の建物遺構についてまとめたものです。

調査に際し、「鴻臚館跡調査研究指導委員会」をはじめ文化庁、福岡県、財務省福岡財務支局等の関係機関にご協力を頂き、調査を円滑に進めることができましたことを厚くお礼申し上げます。

調査に関わられた全ての方々に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、鴻臚館跡の保存・活用の理解を深める一助とならんことを願います。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会

教育長　酒井　龍彦

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が行った、国指定史跡 鴻臚館跡の発掘調査報告書である。
2．鴻臚館跡の発掘調査報告書は、平成２（1990）年度から継続して刊行しており、本書が19冊めであるが、『鴻臚館跡Ⅱ』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集）、及び『鴻臚館跡18』（同第1022集）を除き概要報告書である。従って、本書は３冊めの本報告書となる。
3．本報告書の刊行計画については本文４ページに記載した通りであるが、調査が長期にわたり相当の分量があるため分割刊行を予定しており、遺構の性格により区分した「谷部分」、「南館（仮称）部分」、「北館部分」の順に刊行する。（鴻臚館跡調査では、谷の北側施設を文献に見える「鴻臚北館」と推定し、相対する南側施設を「南館」と仮称している。）
4．上記のうち、本書は「南館部分」の第１分冊であり、南館の建物関係遺構についてまとめたものである。
5．鴻臚館跡の発掘調査、及び本書の作成は、国庫補助事業として実施した。
6．本書に使用した遺構実測図の作製は、各年度の調査担当者、及び調査員・作業員が行った。
7．本書に使用した遺物実測図の作製は、大庭康時・田中克子・富永静子・安田美哉が行った。
8．本書に使用した写真は各年度の調査担当者、及び吉武　学が撮影した。
9．本書に使用した図の製図は大庭・吉武・田中・安田・柴田志乃が行った。
10．本書に用いた座標系は、平面直角座標系第Ⅱ座標系（日本測地系）である。図に使用した方位は全て座標北（Ｙ軸）を示し、この地域では真北より0°19′西偏し、磁北より6°02′東偏する。
11．本書の執筆は、大庭康時、吉武　学、田中克子が行い、文末に文責を記した。
12．文中の軒瓦の型式は、「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」九州歴史資料館2000に拠る。
13．図中の瓦分類番号は「鴻臚館跡16」福岡市教育委員会2006の叩き文様分類に拠るが、追加資料については、次回報告時に一覧表を掲載する予定である。
14．本書の編集は吉武が行った。
15．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

本書に所収の調査一覧（各調査の詳細は本文７ページの Tab. 5 参照）

鴻臚館跡第４～７・９・11～14・17・21次調査

（福岡城跡第10・13・15・17・20・27・31・35・39・43・50次調査）

遺跡調査番号	8829・8910・9005・9130・9236・9420・9537・9620・9736・9910・0309		
遺跡略号	ＫＲＥ（鴻臚館跡）、ＦＵＥ（福岡城跡）		
所在地	中央区城内１－１	分布地図番号	６０－０１９２
調査対象面積	48,027㎡（国史跡指定面積）	調査面積	計11,715㎡（詳細は Tab.5 参照）
調査期間	（Tab. 5 参照）		

目　次

第一章　はじめに…… 1
　1．調査の経緯と経過…… 1
　2．調査体制…… 2
　3．調査計画…… 3
　4．報告書の作成…… 4
第二章　調査の概要…… 5
　1．遺跡の位置と周辺遺跡…… 5
　2．周辺地形…… 6
　3．これまでの調査概要…… 7
　4．鴻臚館跡検出遺構の概要と時期区分（案）…… 8
第三章　南館部分の建物関係遺構と出土遺物…… 10
　1．南館部分の調査区と地形…… 10
　2．第Ⅰ期の遺構と出土遺物（SB320～324）…… 11
　3．第Ⅱ期の遺構と出土遺物…… 14
　　1）布掘り塀（SA15・150・301～303・1059・15012）…… 16
　　2）東門（SB300）…… 24
　　3）布掘り状遺構（SX865）…… 27
　　4）地下地業（SK140）…… 27
　　5）トイレ遺構（SK57・69・70）…… 29
　4．第Ⅲ期の遺構と出土遺物…… 47
　　1）礎石建物（SB31・32・330・50）…… 48
　　2）その他の遺構（SK1076）…… 73
　5．第Ⅳ・Ⅴ期の遺構と出土遺物…… 74
　　1）土坑・溝・柱穴（SK351～355、SD357、SK358、SD864・866・884、SX895、SK1042・1069）… 74
　　2）第Ⅴ期の区画溝（SD15052・15098）…… 104
　6．詳細時期不明の古代遺構と出土遺物…… 123
　　1）道路状遺構（SF272）…… 123
　　2）建物・柱列・柱穴（SA273・316、SP824～830、SB1070、SK1034・1071・1075・1079）… 123
　　3）基壇的役割の斜面（SX1037）…… 131
　　4）推定南門地区の遺構と出土遺物（SK63、SX64、SD65）…… 132
第四章　おわりに…… 135

挿図目次

Fig. 1　国史跡鴻臚館跡位置図（1/50,000）…… 1
Fig. 2　鴻臚館跡発掘調査計画図（平成24年3月現在）…… 3
Fig. 3　周辺遺跡分布図（1/200,000）…… 5
Fig. 4　鴻臚館跡周辺地盤地形推定等深線図（1/5,000）…… 6
Fig. 5　鴻臚館跡の建物遺構の概略図（1/1,000）…… 9
Fig. 6　南東隅落ち際土層断面図（1/60）…… 10
Fig. 7　南館部分検出遺構配置図（1/500）……（折り込み）
Fig. 8　南館部分の第Ⅰ期建物配置図（1/500）…… 11
Fig. 9　建物遺構 SB320・321実測図（1/100）…… 12
Fig.10　建物遺構 SB322・323実測図（1/100）…… 13
Fig.11　建物遺構 SB324実測図（1/80）…… 14
Fig.12　南館部分の第Ⅱ期建物配置図（1/500）…… 15
Fig.13　布掘り掘立柱列西辺SA303、東辺SA301・302実測図（平面図1/150・断面図1/60）…… 17
Fig.14　布掘り掘立柱列南辺SA150実測図（平面図1/150・断面図1/60）…… 18
Fig.15　布掘り掘立柱列北辺西半SA1059実測図（平面図1/150・断面図1/60）…… 19
Fig.16　布掘り掘立柱列北東角SA15012実測図（平面図1/150・断面図1/40・1/80）…… 20
Fig.17　SA150出土遺物実測図1（1～2は1/3、他は1/4）…… 21
Fig.18　SA150出土遺物実測図2（1/4）…… 22
Fig.19　SA1059出土遺物実測図（1/4）…… 22
Fig.20　SA15012出土遺物実測図（1/3）…… 23
Fig.21　門遺構 SB300平面図（1/60）…… 24
Fig.22　SB300土層断面図（1/60）…… 25
Fig.23　SB300出土遺物実測図（1～3は1/3、他は1/4）…… 25
Fig.24　布掘り状遺構 SX865実測図（位置図1/200・拡大図1/40）…… 26
Fig.25　SX865出土遺物実測図（1/3）…… 27
Fig.26　地下地業SK140実測図（平面図1/100・土層断面図1/40）…… 27
Fig.27　SK140出土遺物実測図（1～4は1/3、他は1/4）…… 28
Fig.28　トイレ遺構 SK57実測図（1/40）…… 29
Fig.29　SK57出土遺物実測図1（1/3）…… 31
Fig.30　SK57出土遺物実測図2（1/3）…… 32
Fig.31　SK57出土遺物実測図3（1/4）…… 33
Fig.32　SK57出土遺物実測図4（1/4）…… 34
Fig.33　SK57出土遺物実測図5（1/3）…… 36
Fig.34　SK57出土遺物実測図6（1/3）（61・80はSK69出土）…… 37
Fig.35　SK57出土遺物実測図7（1/3）（90・108・110・113・114はSK69出土）…… 38
Fig.36　SK57出土遺物実測図8（1/3）…… 39
Fig.37　SK57出土遺物実測図9（1/3）（138はSK69、139・140はSK70出土）…… 40
Fig.38　トイレ遺構 SK69実測図（1/40）…… 41

Fig.39　SK69出土遺物実測図1（23～25は1/4、他は1/3）…… 42
Fig.40　SK69出土遺物実測図2（1/4）…… 43
Fig.41　トイレ遺構SK70実測図（1/40）…… 44
Fig.42　SK70出土遺物実測図1（1/3）…… 45
Fig.43　SK70出土遺物実測図2（13は1/3、他は1/4）…… 46
Fig.44　南館部分の第Ⅲ期建物配置図（1/500）…… 47
Fig.45　礎石建物SB31・32・330・50平面図、SB31断面図（1/150）……（折り込み）
Fig.46　SB31礎石及び礎石据付け穴実測図1（1/40）…… 49
Fig.47　SB31礎石及び礎石据付け穴実測図2（1/40）…… 50
Fig.48　SB31出土遺物実測図1（1/3）…… 51
Fig.49　SB31出土遺物実測図2（1/3）…… 52
Fig.50　SB31出土遺物実測図3（1/3）…… 53
Fig.51　SB31出土遺物実測図4（1/4）…… 54
Fig.52　SB31出土遺物実測図5（122は1/4、123は1/2）…… 55
Fig.53　礎石建物SB32・330実測図（1/150）…… 57
Fig.54　SB32・330礎石及び礎石据付け穴実測図1（1/40）…… 58
Fig.55　SB32・330礎石及び礎石据付け穴実測図2（1/40）…… 59
Fig.56　SB32・330馬道実測図（1/60）…… 60
Fig.57　SB32出土遺物実測図1（1/3）…… 61
Fig.58　SB32出土遺物実測図2（1/3）…… 62
Fig.59　SB32出土遺物実測図3（1/3）…… 63
Fig.60　SB32出土遺物実測図4（1/4）…… 64
Fig.61　SB330出土遺物実測図1（1/3）…… 65
Fig.62　SB330出土遺物実測図2（1/4）…… 66
Fig.63　礎石建物SB50実測図（1/150）…… 68
Fig.64　SB50礎石及び礎石据付け穴実測図1（1/40）…… 69
Fig.65　SB50排水溝実測図（1/80）…… 70
Fig.66　SB50出土遺物実測図1（1～34は1/3、他は1/4）…… 71
Fig.67　SB50出土遺物実測図2（1/3）…… 72
Fig.68　SD235出土遺物実測図（1/4）…… 73
Fig.69　SK1076実測図（1/20）…… 73
Fig.70　SK1076出土遺物実測図（1/4）…… 74
Fig.71　溝SK351～355・SD357・SK358実測図（土層図は1/40、他は1/100）…… 75
Fig.72　SK351出土遺物実測図1（1/3）…… 77
Fig.73　SK351出土遺物実測図2（31～34は1/3、他は1/4）…… 78
Fig.74　SK351出土遺物実測図3（1/4）…… 79
Fig.75　SK352出土遺物実測図1（1～14は1/3、他は1/4）…… 80
Fig.76　SK352出土遺物実測図2（1/4）…… 81
Fig.77　SK352出土遺物実測図3（1/4）…… 82
Fig.78　SK353出土遺物実測図（1～7は1/3、8は1/2、他は1/4）…… 83

Fig.79　SK354出土遺物実測図1（1～7は1/3、他は1/4）…… 84
Fig.80　SK354出土遺物実測図2（1/4）…… 85
Fig.81　SK355出土遺物実測図1（1～2は1/3、他は1/4）…… 85
Fig.82　SK355出土遺物実測図2（1/4）…… 86
Fig.83　SD357出土遺物実測図1（1/3）…… 87
Fig.84　SD357出土遺物実測図2（1/3）…… 88
Fig.85　SD357出土遺物実測図3（75は1/4、他は1/3）…… 89
Fig.86　SD357出土遺物実測図4（1/4）…… 90
Fig.87　SD357出土遺物実測図5（1/4）…… 91
Fig.88　SD357出土遺物実測図6（1/4）…… 92
Fig.89　SK358出土遺物実測図1（1/3）…… 93
Fig.90　SK358出土遺物実測図2（1/4）…… 94
Fig.91　SK358出土遺物実測図3（1/4）…… 95
Fig.92　SK358出土遺物実測図4（1/4）…… 96
Fig.93　溝 SD864・866・884、一段高い地山 SX895（1/160）…… 97
Fig.94　SD864・866出土遺物実測図（12は1/4、他は1/3）…… 98
Fig.95　SK1042実測図（1/20）…… 98
Fig.96　SK1042出土遺物実測図1（1～11は1/3、他は1/4）…… 99
Fig.97　SK1042出土遺物実測図2（28は1/6、他は1/4）…… 100
Fig.98　SK1069実測図（1/20）…… 101
Fig.99　SK1069出土遺物実測図1（1/3）…… 102
Fig.100　SK1069出土遺物実測図2（1/4）…… 103
Fig.101　SD15052・15098実測図（1/200）…… 104
Fig.102　SD15052土層図（1/50）…… 105
Fig.103　SD15052出土遺物実測図1（1/3）…… 106
Fig.104　SD15052出土遺物実測図2（1/3）…… 107
Fig.105　SD15052出土遺物実測図3（1/3）…… 108
Fig.106　SD15052出土遺物実測図4（1/3）…… 109
Fig.107　SD15052出土遺物実測図5（1/3）…… 110
Fig.108　SD15052出土遺物実測図6（1/3）…… 111
Fig.109　SD15052出土遺物実測図7（1/4）…… 113
Fig.110　SD15052出土遺物実測図8（1/4）…… 114
Fig.111　SD15052出土遺物実測図9（1/4）…… 115
Fig.112　SD15052出土遺物実測図10（1/4）…… 116
Fig.113　SD15052出土遺物実測図11（185・186は1/2、187・188は1/3）…… 117
Fig.114　SD15098土層図（1/40）…… 118
Fig.115　SD15098出土遺物実測図1（1/3）…… 119
Fig.116　SD15098出土遺物実測図2（30は1/4、他は1/3）…… 120
Fig.117　SD15098出土遺物実測図3（1/4）…… 121
Fig.118　SD15098出土遺物実測図4（1/4）…… 122

Fig.119 SF272実測図(1/80) …… 123
Fig.120 SA273・316実測図(1/80) …… 123
Fig.121 SA273・316出土遺物実測図(1/4) …… 123
Fig.122 建物遺構 SP822・824・828・829・830実測図(1/80) …… 124
Fig.123 SP824・829出土遺物実測図(1～3は1/3、他は1/4) …… 125
Fig.124 SP822・830出土遺物実測図(1～3は1/3、他は1/4) …… 125
Fig.125 掘立柱建物 SB1070実測図(1/80) …… 126
Fig.126 SB1070出土遺物実測図(1/3) …… 126
Fig.127 柱穴 SK1034実測図(1/20) …… 127
Fig.128 SK1034出土遺物実測図(1・2は1/3、他は1/4) …… 127
Fig.129 柱穴 SK1071・1075実測図(1/20) …… 128
Fig.130 SK1071・1075出土遺物実測図(1/4) …… 128
Fig.131 土坑 SK1079実測図(1/20) …… 129
Fig.132 SK1079出土遺物実測図(1～3は1/3、他は1/4) …… 130
Fig.133 基壇的役割の斜面 SX1037(= SB11)実測図(1/100) …… 131
Fig.134 SX1037出土遺物実測図(1～14は1/3、他は1/4) …… 132
Fig.135 推定南門地区遺構実測図(配置図は1/500、他は1/100) …… 133
Fig.136 推定南門地区出土遺物実測図(1/3) …… 134
Fig.137 第Ⅱ期布掘り塀の中軸線から折り返した第Ⅲ期建物(1/1,000) …… 138
Fig.138 第Ⅲ期建物復元案(1/1,000) …… 139
Fig.139 第Ⅲ期建物復元案と中世遺構配置図(1/1,000) …… 140

図版目次

巻頭図版1　鴻臚館跡 史跡指定地内調査区全景(デジタル合成)
巻頭図版2　1.第4次調査区全景(上方が北)　2.第5次調査区全景(上方が北)
巻頭図版3　1.第6・7次調査区全景(上方が北)　2.第9次調査区全景(南から)
巻頭図版4　1.第17次調査区全景(上方が北)　2.第21次調査区全景(北東から)

Ph. 1　SK57遺物出土状況(29頁)　Ph. 2　SK69漆器膜出土状況(41頁)
Ph. 3　「二坊」(41頁)　Ph. 4　SK70完掘状況(南から)(44頁)

PL. 1　1．掘立柱建物 SB322・323(南から)　2．建物 SB324、SP824・828・829ほか(南から)
PL. 2　1．布掘り塀 SA150・301・302(上が北)　2．布掘り塀 SA150(西から)
PL. 3　1．布掘り塀 SA301土層断面 B-B′(南から)　2．布掘り塀 SA301土層断面 C-C′(西から)
　　3．布掘り塀 SA150土層断面 C-C′(西から)
PL. 4　1．布掘り塀 SA1059(西から)　2．布掘り塀 SA15012(南西から)
PL. 5　1．SA1059柱穴0土層断面(東から)　2．SA1059柱穴5土層断面(東から)
　　3．SA1059柱穴6土層断面(東から)　4．SA1059柱穴8土層断面(東から)
　　5．SA1059柱穴11土層断面(東から)　6．SA1059柱穴12土層断面(東から)

PL. 6　1．東門 SB300（上方が北）　2．東門 SB300（南から）
PL. 7　1．東門 SB300（東から）　2．SB300の柱穴 SP702・703断面（東から）
3．SB300の柱穴 SP704・705断面（西から）
PL. 8　1．布掘り状遺構 SX865検出状況（東から）　2．布掘り状遺構 SX865（南東から）
PL. 9　1．地下地業 SK140土層断面（南から）　2．トイレ遺構 SK57（南から）
PL.10　1．SK57遺物出土状況　2．SK57遺物出土状況
3．トイレ遺構 SK69（南から）
PL.11　1．礎石建物 SB31・32・330（西から）　2．SB31西側雨落ち溝検出状況（北から）
PL.12　1．礎石建物 SB50（南から）　2．SB50礎石群（南から）
PL.13　1．SB31西側雨落ち溝南端部（南から）　2．SB330西側と SB50北側の雨落ち溝の角（南東から）
3．SB31・50・330と続く雨落ち溝（西から）　4．SB50暗渠排水溝 SD270（西から）
5．SB50暗渠排水溝 SD270（西から）　6．SK1076（北から）
PL.14　1．土坑 SK351～356・358、溝 SD357（南から）　2．SK352遺物出土状況（南から）
3．SD357南壁土層（北から）　4．SK1042（西から）
5．土坑 SK1069（南東から）
PL.15　1．SD15052・SD15098分布状況（北東から）　2．SD15052（南から）
3．SD15052土層断面（北から）
PL.16　1．SD15098東端（東から）（右は谷斜面）　2．SD15098 1トレンチ－2トレンチ間（東から）
3．SD15098土層断面（東から）　4．SD15098瓦片出土状況（西から）
5．SD15098土層断面２トレンチ（西から）　6．SD15098 1トレンチ-2トレンチ間土層断面（西から）
PL.17　1．道路状遺構 SF272（東から）　2．SF272の瓦（北から）
3．柱列 SA316（西から）　4．掘立柱建物 SB1070（東から）
5．SK1034（北から）　6．SK1071（東から）
PL.18　1．SK1075（北から）　2．SK1079（北から）
3．推定南門南東調査区（南から）　4．推定南門南東調査区（西から）
5．推定南門北東調査区（北から）　6．推定南門北東調査区（東から）
PL.19　SK57・70 出土遺物（縮尺不同）　PL.20　SB31・32・330・SK351 出土遺物（縮尺不同）
PL.21　SK351・SD357・SK358出土遺物（縮尺不同）　PL.22　SK57 出土木製品（縮尺不同）
PL.23　SD15052出土遺物①（縮尺不同）　PL.24　SD15052出土遺物②・SD15098出土遺物（縮尺不同）

表目次

Tab. 1　鴻臚館跡調査研究指導委員会　歴代委員名簿…… 2
Tab. 2　調査計画表（平成24年３月現在）…… 3
Tab. 3　鴻臚館跡関係調査報告書一覧…… 4
Tab. 4　鴻臚館跡調査報告書刊行計画表…… 4
Tab. 5　鴻臚館跡調査一覧（平成24年３月現在）…… 7
Tab. 6　鴻臚館跡検出遺構の時期区分（案）…… 8
Tab. 7　第Ⅱ期布掘り塀角（芯）の座標値（第Ⅱ系）…… 16

第一章　はじめに

1．調査の経緯と経過

昭和62年（1987）、福岡市中央区城内の平和台野球場外野席の改修工事に伴い、福岡市教育委員会による試掘調査が12月24日に始まった。鴻臚館跡第３次調査として行ったこの試掘調査により、遺構の残りが想定外に良いことが判明するとともに、土坑から出土した多量の中国陶磁器やイスラムガラス等により、この遺跡が鴻臚館跡である可能性が極めて高いことが明らかとなった。鴻臚館の発見はマスコミに大々的に報じられ、現地説明会には7,500名もの市民が詰めかけた。福岡市では、この遺跡が重要な市民の財産であること、遺跡の保存を図ること、確認調査を継続して行うこと、平和台野球場については将来移転すること等を市民に公表した。

教育委員会では翌昭和63年度に、学識経験者からなる「鴻臚館跡調査研究指導委員会」を設置するとともに、担当職員２名を配置し７月27日に確認調査を開始した。この段階では、鴻臚館跡の遺構の残存状態や広がりが全く不明であり、平和台野球場の周りに３ヶ所のトレンチを設定し、うち遺構の残存状態が比較的良好であった野球場南側緑地部分の調査を重点的に進めていった。調査の結果、大型の礎石建物２棟や中国陶磁器を多量廃棄した土坑を確認する等の大きな成果があったため、この部分に覆屋をかけて鴻臚館跡展示館とし、市政100周年記念事業であるアジア太平洋博覧会「よかトピア」のミニパビリオンとして市民や観光客に公開した。博覧会は約半年の会期であったが、来館者が10万人に達したため、会期後も展示館を継続公開することとなった。この昭和63年の遺構確認とその後の公開事業が、その後の鴻臚館跡確認調査の道を開いたともいえよう。

その後、調査は緑地部分の南側テニスコート（第Ⅰ期調査）やその周囲の福岡城土塁下部（第Ⅲ期調査）に及び、平成５年度には中期調査計画を策定した。平成10年からは、撤去された平和台野球場跡地内の調査に着手し、現在はその北半部を調査中である。また、平成16年度に鴻臚館跡が国史跡の指定を受けたことに伴い、文化庁の指導により平成18年度に『鴻臚館跡調査計画』を策定している。

平成７年には、急造であった鴻臚館跡展示館の建て替え工事を行うとともに、第Ⅰ・Ⅲ期調査地に対して暫定整備を行い、市民に公開している。また、平成９年の発掘10周年、平成19年の同20周年には福岡市博物館で記念展を開催するとともに、シンポジウム等を実施している。

Fig.1　国史跡鴻臚館跡位置図（1/50,000）

2．調査体制

土地は国（財務支局）の所有であり、福岡市（住宅都市局）が「舞鶴公園」用地として管理を行っている。現在は、遺跡として整備された区画と発掘区域を教育委員会が、それ以外を住宅都市局が管理している。調査にあたっては、史跡の現状変更許可申請を文化庁長官に対して行い、占有許可申請を管理者である住宅都市局に提出している。

調査は福岡市教育委員会が主体となって行っており、担当課は埋蔵文化財課、鴻臚館跡調査担当副主幹、文化財整備課、鴻臚館跡調査担当課長、文化財整備課と名称変更されているが、実際の調査担当機関は同一である。平成20年度までの組織の詳細は『鴻臚館跡18』に掲載している。以後、本書の作成にかかる平成23年度までの組織体制の変更は以下の通りである。

調査主体　福岡市教育委員会教育長　山田裕嗣（～ H22年度）、酒井龍彦（H23年度）
〃　教育次長　中島淳一郎（H21～22年度）、中沢浩（H23年度）
調査総括　文化財部長　宮川秋雄（H21～22年度）、藤尾浩（H23年度）
文化財整備課長　井澤洋一（H21年度）、秋吉誠（H22年度）、有川由美（H23年度）
調査担当　文化財整備課整備第２係長　吉武　学（H21～22年度）
文化財整備課文化財
行政企画担当主査　常松幹雄（H23年度）
調査庶務　文化財整備課管理係　井上幸江（H21年度）
文化財整備課運用係　中島悠葵（H22～23年度）
整理協力　田中克子（技能員）、石田晴美、後藤富美、徳田裕子、富永静子、安田美哉、吉本久美子
（五十音順、敬省略）

鴻臚館跡調査研究指導委員会　Tab. 1

1987年末の鴻臚館跡遺構発見を受けて確認調査を始めるにあたり、文化庁の指導等により1988年に学識経験者等からなる「鴻臚館跡調査研究指導委員会」を設置した。以後、現在に至るまでの委員会委員の交代等については以下の表の通りである。

Tab.1　鴻臚館跡調査研究指導委員会　歴代委員名簿（敬称略）　　印は現職（◎委員長、●副委員長、○委員）

専門	氏名	就任時の所属（就任期間／退任時の役職）	氏名	就任時の所属（就任期間／退任時の役職）
国史学	平野邦雄	東京女子大学教授（S.63～H.8/ 委員長）	田村圓澄	九州歴史資料館館長（S.63～ H.4）
	川添昭二	九州大学教授（S.63～ H.16）	○　八木　充	山口大学教授（S.63～）
	笹山晴生	東京大学教授（S.63～ H.16/ 委員長）	○　狩野　久	岡山大学教授（H.4～）
	●　佐藤　信	東京大学助教授（H.6～）	○　服部英雄	九州大学教授（H.16～）
考古学	坪井清足	大阪文化財センター理事長（S.63～ H.22）	横山浩一	九州大学教授（S.63～ H.16/ 委員長）
	◎　小田富士雄	福岡大学教授（S.63～）	○　西谷　正	九州大学教授（S.63～）
	田中　琢	奈良国立文化財研究所所長（H.6～10）	町田　章	奈良国立文化財研究所所長（H.11～16）
	田辺征夫	奈良文化財研究所所長（H.17～22）	○　松村恵司	奈良文化財研究所所長（H.23～）
	○　河原純之	川村学園女子大学教授（H.14～）	○　高島忠平	佐賀女子短期大学学長（H.16～）
	渡辺正気	県文化財保護審議会委員（S.63～ H.8）	石松好雄	九州歴史資料館副館長（H.4～8）
建築史学	○　鈴木嘉吉	奈良国立文化財研究所所長（S.63～）	澤村　仁	九州芸術工科大学教授（S.63～ H.16）
	上野邦一	奈良女子大学教授（H.16～19）	島田敏男	奈良文化財研究所（H.19～23）
	○　林　良彦	奈良文化財研究所（H.23～）		
造園学	中村　一	京都大学教授（S.63～ H.20）	○　杉本正美	九州芸術工科大学教授（S.63～）
	安原啓二	元文化庁調査官（H.16～22）	○　田中哲雄	前東北芸術工科大学教授（H.22～）
都市工学	○　渡辺定夫	東京大学教授（S.63～）		

3．調査計画　Fig. 2、Tab. 2

平成５年度に策定した鴻臚館跡発掘調査中期計画では、福岡城跡三ノ丸地区を対象とした５地点を調査対象地とし、各５年程度の調査を実施することとし、昭和63年度から実施していた調査区を第Ⅰ期調査区と後付けた。以後の発掘調査は、この計画に基づいて実施しており、計画期間については実情にあわせてその都度見直している。また、平成18年度に定めた『鴻臚館跡調査計画書』は、国史跡である鴻臚館跡の「保存管理計画」に代わるものと位置付けられており、上記指導委員会に諮り、文化庁と協議して策定した。計画書の趣旨は以下の通り。

- 平成５年度作成の中期調査計画と地区区分を改めて設定。
- 鴻臚館跡指定地外でも計画的調査を進め、遺構が確認された場合は追加指定を前提とする。
- 史跡福岡城跡と重複するため、まず福岡城遺構の確認調査を行って内容・性格を検討し、調査の目的と必要性を勘案し、福岡城遺構を破壊しないことを大前提としながら、遺構の掘削が避けられない場合は必要かつ最小限に留めるとともに、十分な検討を行って調査方法を定める。

Tab.2　調査計画表（アミ部は調査終了）　　　平成24年３月現在

長期計画	調査対象地	調査面積	実施及び計画期間	調査目的
第Ⅰ期	平和台野球場南側	6,456㎡	昭和63～平成4年度	鴻臚館跡の遺構の有無と範囲の確認
第Ⅱ期	舞鶴公園西広場	1,410㎡	平成5～6年度	鴻臚館跡の範囲確認、及び福岡城築城時旧地形の復元と藩主邸の確認
第Ⅲ期	平和台野球場南側土塁ほか	2,114㎡	平成7～10年度	平和台野球場南側土塁下の遺構確認・平和台野球場解体工事立会・試掘
第Ⅳ期	平和台野球場跡南半分	15,095㎡	平成11～17年度	鴻臚館跡の史跡指定に向けての範囲確認・鴻臚館時代の地形復元
第Ⅴ期	平和台野球場跡北半分	対象面積16,000㎡	平成18～25年度	鴻臚北館の構造確認と北側汀線の確認、外郭施設の検出
第Ⅵ期	舞鶴球技場とその周辺	対象面積12,000㎡	平成26～30年度	鴻臚館客館部分（第Ⅰ期～第Ⅴ期調査区）に隣接する諸施設の確認
第Ⅶ期	福岡高等裁判所とその周辺	対象面積12,000㎡	平成31～39年度	鴻臚中島館の可能性が指摘されており、その確認

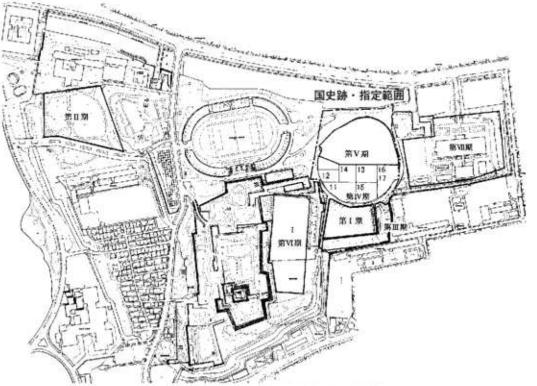


Fig.2　鴻臚館跡発掘調査計画図（平成24年３月現在）

4．報告書の作成　Tab. 3・4

鴻臚館跡の発掘調査報告書は、平成２(1990)年度から順次刊行を行っているが、『鴻臚館跡Ⅱ』(平和台野球場外野席の試掘調査報告)を除き概要報告であり、指導委員会や文化庁等からも正式報告書の早期刊行が求められている。鴻臚館跡の史跡整備と活用を行うためにも、検出遺構と出土遺物の詳細な検討、及び総括を行う正式報告書が不可欠である。鴻臚館跡では、発掘調査により自然地形を利用した谷(堀)を挟んで南北に相似形の施設があったことが判明し、北の施設を文献に見える「鴻臚北館」と推定し、相対する南の施設を「南館」と仮称している。発掘調査は「南館」が先行し、平成15年度に終了しており、「谷(堀)」部分は平成17年度に調査終了、「北館」についても平成25年度を目処に調査終了予定である。よって、調査が終了した谷部分・南館部分の整理・報告を先行し、北館の整理・報告は発掘調査終了後に行うものとして、平成20(2008)年度に第１弾として『鴻臚館跡18－谷(堀)部分の調査－』を刊行した。今後はTab. 4のスケジュールに従って、順次刊行を行っていく予定である。

Tab.3　鴻臚館跡関係調査報告書一覧

No	発行	報告書名		刊行年
1	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」	福岡県文化財調査報告書第34集	1964
2	高野孤鹿	『平和台の考古史料』	橋本	1972
3	福岡市教育委員会	「福岡城址－内堀外壁石積の調査－」	福岡市第101集	1983
4	池崎謙二・森本朗子	「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」	福岡市第101集	1983
5	弓場知紀	「出光美術館の高野コレクション」	福岡市第101集	1983
6	田崎博之・矢野佳代子	「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」	福岡市第101集	1983
7	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅰ発掘調査概報」	福岡市第270集	1991
8	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅱ」	福岡市第315集	1992
9	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅲ」	福岡市第355集	1993
10	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡４　平成４年度発掘調査概要報告」	福岡市第372集	1994
11	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡５　平成５年度発掘調査概報」	福岡市第416集	1995
12	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡６　平成６年度発掘調査概要報告」	福岡市第486集	1996
13	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡７　－鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告－」	福岡市第487集	1996
14	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡８　－平成７・８年度発掘調査概要報告－」	福岡市第545集	1997
15	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡９　平成９年度発掘調査概要報告」	福岡市第586集	1998
16	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡10　平成10年度発掘調査概要報告」	福岡市第620集	1999
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡11　平成11年度発掘調査報告」	福岡市第695集	2001
18	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡12　平成12年度発掘調査報告」	福岡市第733集	2002
19	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡13　平成13年度発掘調査報告」	福岡市第745集	2003
20	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡14」	福岡市第783集	2004
21	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡15　平成14年度発掘調査報告書」	福岡市第838集	2005
22	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡16　平成15年度発掘調査報告書」	福岡市第875集	2006
23	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡17　平成16・17年度発掘調査報告書」	福岡市第968集	2007
24	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡18　谷(堀)部分の調査」	福岡市第1022集	2009
25	**福岡市教育委員会**	**「鴻臚館跡19　南館部分の調査(1)」**	**福岡市第1175集(本書)**	**2012**

(福岡市第…集は、福岡市埋蔵文化財調査報告書第…集の略)

Tab.4　鴻臚館跡調査報告書刊行計画表

区分＼年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
谷	←―――	報告書18	―――→						
南　館		←―――			**報告書19**	報告書20	報告書21		
北　館	←―――								報告書22

第二章　調査の概要

1．遺跡の位置と周辺遺跡　Fig. 3

博多湾は湾口に点在する志賀島・能古島・玄海島や、海の中道の砂州によって外海から護られた天然の良港として、古くから対外交流の窓口となってきた。鴻臚館は、この博多湾のほぼ中央部に突き出した福崎丘陵の先端部に位置し、舟運や古代官道により大宰府等の国内拠点と結ばれていた。

鴻臚館は、「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府のもと、外国からの賓客の饗応・帰化入国を担う施設であり、後には中国商人らによる滞在場所・交易の場と変容し、また我が国から中国・朝鮮に派遣された遣唐使・遣新羅使、あるいは留学僧・留学生の船出の待機所としても用いられた。

古代の博多湾周辺には、他にも大宰府直轄の施設として、さまざまな施設が設置されていたと考えられる。これまでの発掘調査によって確認された遺構・遺物や地形により、「鴻臚中島館」を博多遺跡群または福岡城内の高等裁判所に、食料の供給をした「津厨」を海の中道遺跡に、舟の修理などを行う主船司を西区周船寺周辺に比定する説があり、外敵に備える「警固所」については福岡城本丸にかつて「警固大明神」の祠があったことから候補地の一つと考えられている。また、大宰府等と連絡する官道や駅が整備され、官道沿いには「三宅廃寺」等の寺院が配置されていた。この他、鴻臚館の屋根瓦を供給したとみられる瓦窯が、西区の元岡、女原、斜ヶ浦で確認されている。

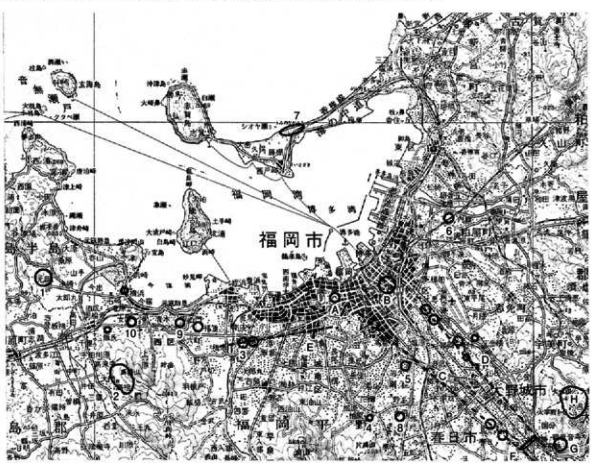


Fig.3　周辺遺跡分布図 (1/200,000)

A　鴻臚館跡　B　博多遺跡群　C・D・E　官道　F　水城　G　大宰府政庁跡　H　大野城跡
1　元岡・桑原遺跡群　2　怡土城跡　3　有田遺跡群（早良郡寺跡）　4　柏原M遺跡（「郡長」墨書）　5　三宅廃寺跡
6　多々良込田遺跡　7　海の中道遺跡　8　老司瓦窯跡　9　斜ヶ浦瓦窯跡　10　女原瓦窯跡

2．周辺地形　Fig. 4

鴻臚館跡調査の一環として、平成元～10年度に福岡城内を対象とする計画的なボーリング調査を８回実施している。文献資料や発掘調査で得られた地形データとあわせると、以下のような古代の旧地形を推定することができる。

南の大休山（現動植物園）から博多湾に伸びる丘陵の先端が鴻臚館跡の立地する「福崎」であり、この丘陵は南東～北西方向に伸び、福岡城天守台と本丸北部、御鷹屋敷の３箇所に丘陵の頂部があり、最も高い頂部は御鷹屋敷にあった。丘陵西側は入江（草香江）で、対岸（西岸）から荒津山に向かって砂洲が伸びていた。荒津山の直下は水深のある海で、古代には大型船の停泊地になっていたとみられる。天守台～御鷹屋敷に伸びる丘陵から枝別れした２筋の小枝丘が東へと伸びており、この枝丘を古代に削平造成して二つの平坦地を造り、鴻臚館（筑紫館）を建設している。鴻臚館の東は谷部を経て小さな丘陵（現：高等裁判所）があり、この周辺には陸地化して間もない沖積地が広がっていたと推定される。枝丘陵の北辺には海浜砂丘が形成され、砂丘は海へ向かって浅く窪んだのち一度高まり、遠浅の海へと続いていた。一方、枝丘陵の南辺は鴻臚館の南から福岡城本丸中央に向かって深い谷が食い込んでいた。

鴻臚館は自然の谷をそのまま４m以上の深い堀として取り込み、周囲も同程度の高さの崖面ないし斜面とした台地上の平坦地に築造されていた。客館とはいえ隔離性の強い構造をなし、新羅海賊などへの備えのためか防御性も高く、かつ眺望がよく、逆に周囲からも良く見え、監視しやすいという地形的な特徴を備えていたと言える。中世後期には寺院が設置されたと考えられ、また近世初期には黒田長政により福岡城が築城されたが、このような地形的特徴を活かして土地利用された可能性が強い。

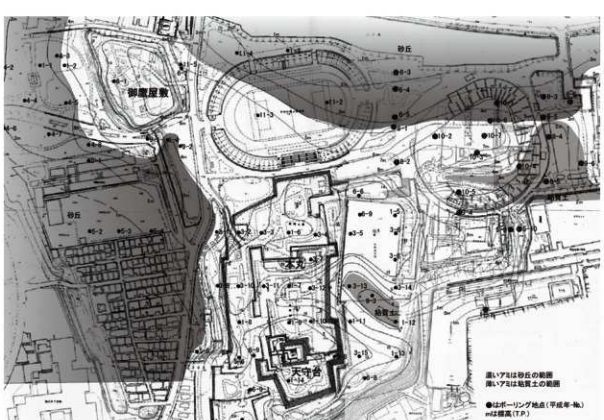


Fig.4　鴻臚館跡周辺地盤地形推定等深線図 (1/5,000)

3．これまでの調査概要　Fig. 5、Tab. 5

平成17年度までの鴻臚館跡の発掘調査の概要については『鴻臚館跡18』に詳しいため、刊行後に行った調査の概要について補足する。

平成18年度の第24次調査以降は、平和台野球場跡地北半を対象とする第Ⅴ期調査として、北館の地形、東門入り口部分の造作、海岸へ至る景観等の解明を目的とした調査を行っている。トレンチ２（H18～19）では、北へ落ちる崖の落ち際と、北側低地の砂丘上に鴻臚館の瓦が広がる状況等を確認した。トレンチ３の調査（H19～21）では、台地上において第Ⅰ期柱列を検出し、柱列の東辺に門遺構が取り付くことや、第Ⅱ期布掘り塀の北東角、第Ⅲ期建物に伴うとみられる礎石一つ等を確認した。崖下砂丘上においては、平安時代の粘土整地層等を検出したが、調査範囲が狭いことからこれが築地塀か否かについては今後新たにトレンチを設けて追加調査することとなった。トレンチ４の調査（H21～22）では、鴻臚館の北東角の状況を確認し、東側（正面側）が雛壇状に高くなる構造であったことが判明した。またトレンチ５の調査（H22～）では、第Ⅰ期東門に付属する施設のあること等を確認している。今後は、引き続きトレンチ５で東門前の状況を確認し、さらに築地塀の確認、鴻臚館北西角の確認を行っていく。

Tab.5 鴻臚館跡調査一覧　※アミは本書に関係する調査　　平成24年３月現在

年度	調査番号	鴻臚館跡調査次数	福岡城跡調査次数	調査地	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者
S.26	5102	1		三の丸中央部	ﾃﾆｽｺｰﾄ建設		5108（３日間）	九州文化総合研究所
S.38	6301	2	1	三の丸東郭	裁判所建設	596	631007～631105 640327～640331	福岡県教育委員会
S.62	8747	3	9	三の丸中央部	野球場改修	650	871225～880120	山崎純男・吉武学
S.63	**8829**	**4**	**10**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**856**	**880727～881210**	**山崎純男・吉武学**
H.1	**8910**	**5**	**13**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**1,200**	**890420～891207**	**山崎純男・吉武学**
H.2	**9005**	**6**	**15**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**1,300**	**900409～910131**	**山崎純男・吉武学**
H.3	**9130**	**7**	**17**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**1,000**	**910501～920331**	**山崎純男・盧本正志**
H.4	9218	8	19	三の丸中央部	範囲確認	1,670	920615～921030	山崎純男・盧本正志
	9236	**9**	**20**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**430**	**920910～930331**	**山崎純男・盧本正志**
H.5	9326	10	22	三の丸西郭	範囲確認	450	930816～940228	田中壽夫・盧本正志
H.6	**9420**	**11**	**27**	**三の丸中央部**	**史跡整備**	**50**	**940606～940731**	**田中壽夫・盧本正志**
	9432	11	28	三の丸西郭	範囲確認	850	940801～950320	田中壽夫・盧本正志
	9463	11	30	三の丸東郭土塁	範囲確認	60	950201～950217	田中壽夫・盧本正志
H.7	**9537**	**12**	**31**	**三の丸西郭・中央部**	**範囲確認**	**300**	**951101～960329**	**田中壽夫**
H.8	**9620**	**13**	**35**	**三ノ丸中央郭**	**範囲確認**	**450**	**960704～961204**	**田中壽夫**
H.9	**9736**	**14**	**39**	**三ノ丸中央郭**	**範囲確認**	**204**	**970818～980131**	**田中壽夫**
H.10	9807	15	41	野球場解体	公園整備	230	980410～980416	田中壽夫・池崎譲二
	9831	16	42	野球場跡全体	試掘	930	980922～990120	塩屋勝利・池崎譲二
H.11	**9910**	**17**	**43**	**野球場跡南半**	**範囲確認**	**3,500**	**990422～000315**	**塩屋勝利・池崎譲二**
H.12	0008	18	44	野球場跡南半	範囲確認	1,750	000425～010316	塩屋勝利・池崎譲二
H.13	0109	19	47	野球場跡南半	範囲確認	2,000	010521～020329	折尾学・池崎譲二
H.14	0218	20	49	野球場跡南半	範囲確認	1,200	020513～030331	折尾学・大庭康時
H.15	**0309**	**21**	**50**	**野球場跡南半**	**範囲確認**	**2,425**	**030506～040331**	**折尾学・大庭康時**
H.16	0415	22	51	野球場跡南半	範囲確認	2,110	040401～050331	折尾学・大庭康時
H.17	0502	23	52	野球場跡南半	範囲確認	2,110	050404～060331	横山邦継・大庭康時
H.18	0617	24	57	野球場跡北半	範囲確認	820	060401～070331	大庭康時・中村啓太郎
H.19	0706	25	59	野球場跡北半	範囲確認	504	070401～080331	吉武学・中村啓太郎
H.20	0821	26	60	野球場跡北半	範囲確認	860	080701～090331	吉武学・中村啓太郎
H.21	0906	27	61	野球場跡北半	範囲確認	900	090401～100331	吉武学・中村啓太郎
H.22	1013	28	62	野球場跡北半	範囲確認	970	100602～110331	吉武学・久住猛雄
H.23	1116	29	65	野球場跡北半	範囲確認	500	110601～111222	堂伝幹雄・吉武学

4．鴻臚館跡検出遺構の概要と時期区分（案）　Fig. 5、Tab. 6

これまでの調査で確認した鴻臚館関連遺構は５期に区分している。その年代観は下表に示した通りであるが、暫定的なもの（谷部分は確定）であり、今後正式報告書をまとめて行く中で検討を加えて詳細時期を確定させていく必要がある。各時期の建物の概要については以下の通りである。

第Ⅰ期（７世紀後半）には掘立柱建物が営まれる。南館ではＬ字形に配された南北棟２棟・東西棟２棟と、その内側に建物１棟を確認した。北館では「ロ」字形に囲む柱列とその内部の南北棟１棟を確認した。柱列の東辺に門及び門外に付属する柱穴があり、南～南東には柱列と平行する石垣遺構が伴う。第Ⅰ期では、南館と北館の建物主軸や構成が全く異なる。

第Ⅱ期（８世紀前半）には、布掘り掘立柱列（塀）が設けられる。柱芯間で東西約74m、南北約56mの東西に長い長方形区画の塀で、東門が付く。区画内に建物柱穴は確認できず、礎石が削平で失われたと推測される。第Ⅱ期は南と北の施設が同一主軸、同一規模の相似形をなす。この他、南館区画内の南西隅に掘り込み地下地業があり、南館と北館の南西区画外には３基と２基のトイレ遺構がある。トイレ遺構は第Ⅱ期のみ存在する。第Ⅱ期に先立つ埋立てで谷幅は狭くなり、北館側には高さ4.2mの石垣を築く。また、谷の最奥部を陸橋により切り離して池とし、陸橋北側にも池を設ける。

第Ⅲ期（８世紀後半～９世紀前半）には大型礎石建物が設けられる。削平のため遺構の残りが悪いが、南館の南西部で平行する南北棟２棟と直交する東西棟１棟、北館の南東部で東西棟１棟を確認した。南館南側では門基壇と推定される地山整形を検出したが、一部の確認に留るため不明確である。

第Ⅳ期以後の建物遺構は確認できないが、廃棄土坑の出土遺物から第Ⅳ期（９世紀後半～10世紀前半）と第Ⅴ期（10世紀後半～11世紀前半）に時期区分している。第Ⅳ期の廃棄土壙が第Ⅲ期礎石建物基壇を切っており、第Ⅲ期の下限を示す。また南館北東隅では第Ⅴ期の区画溝を確認した。出土瓦には10～11世紀代の特徴を示すものも多く、瓦葺き建物が存続していたことは間違いない。　（吉武　学）

Tab.6　鴻臚館跡検出遺構の時期区分（案）

時期	区画	主な遺構	年代観	時期比定の根拠・問題点
Ⅰ	南館	掘立柱建物５	不明	主軸方位から最も古く位置づけた。
	北館	土留め石垣１	７世紀後半～	石垣内から７c半ば頃の須恵器が出土することから、直後の７c後半造営と推定。
		掘立柱建物１、柱列１	不明	主軸方位が石垣と同じため第Ⅰ期に比定。第Ⅰ期遺構に先行する遺構がある。
Ⅱ期前	中央谷	大規模な整地、土留め石積み１	Ⅰ期との前後は不明。	遅くとも８c初頭までに複数回の整地を行って、敷地を拡大。盛土には瓦を含む。
Ⅱ	南館	布掘り塀＋東門１、地下地業１、トイレ３	８世紀前半	遺構方位から一連の遺構と推定し、トイレ遺構出土遺物から時期比定。布掘りと地下地業から鴻臚館式軒丸瓦出土。
		布掘り状遺構		遺構の形状・方位・出土遺物から第Ⅱ期に比定。
	中央谷	池２、陸橋、堀＋石垣、土橋（瓦暗渠）	８世紀前半～後半の早い段階	石垣を覆う埋土の出土遺物より、８c後半の早い段階に石垣を埋めたと推定した。土橋は第Ⅲ期より古い。
	北館	布掘り塀＋東門１、トイレ２	８世紀前半～中頃	布掘りに切られる整地層から８c前半～中頃の須恵器出土。布掘り柱抜き穴から白磁（８c半ば以降）、便所から８c中頃の土器が出土し、南館より遅れて廃絶した可能性がある。
Ⅲ	南館	礎石建物３、梵鐘鋳造遺構	８世紀後半～９世紀前半	雨落ち溝等から８c代の遺物が出土し、９c後半の土坑が建物に重複する。礎石抜き穴から陶磁器出土。（礎石建物SB32下に礎石据え付け穴や瓦排水溝があり、建て替えている。）
		推定南門	９世紀？	調査範囲が狭く明確さを欠く。
	中央谷	池１、陸橋、堀、木橋		木橋は土橋を切る。
	北館	礎石建物１	８世紀後半～９世紀前半	布掘りとの重複から早くて８c後半の造営。９c後半には建物に重複して土坑を掘る。
Ⅳ	南館	土坑のみ	９世紀後半～10世紀前半	土坑から瓦が出土しており、建物の存続を示す。
	中央谷	陸橋、堀、溝		
	北館	土坑のみ		
Ⅴ	南館	北東隅を区画する溝２、土坑	10世紀後半～11世紀半ば以前	
	中央谷	陸橋、堀、木樋		堀の北斜面に11c代の瓦が多い→終末期には建物が北に収斂か。
	北館	土坑		
不詳	南館	中央部の基壇状高まりと通路（SF272）、柵列（SA273・316）、基壇的役割を持つ斜面（SX1037）		
	北館	第Ⅱ期東門の東外に掘立柱建物２（主軸方位からみて第Ⅱ～Ⅲ期に伴う）		

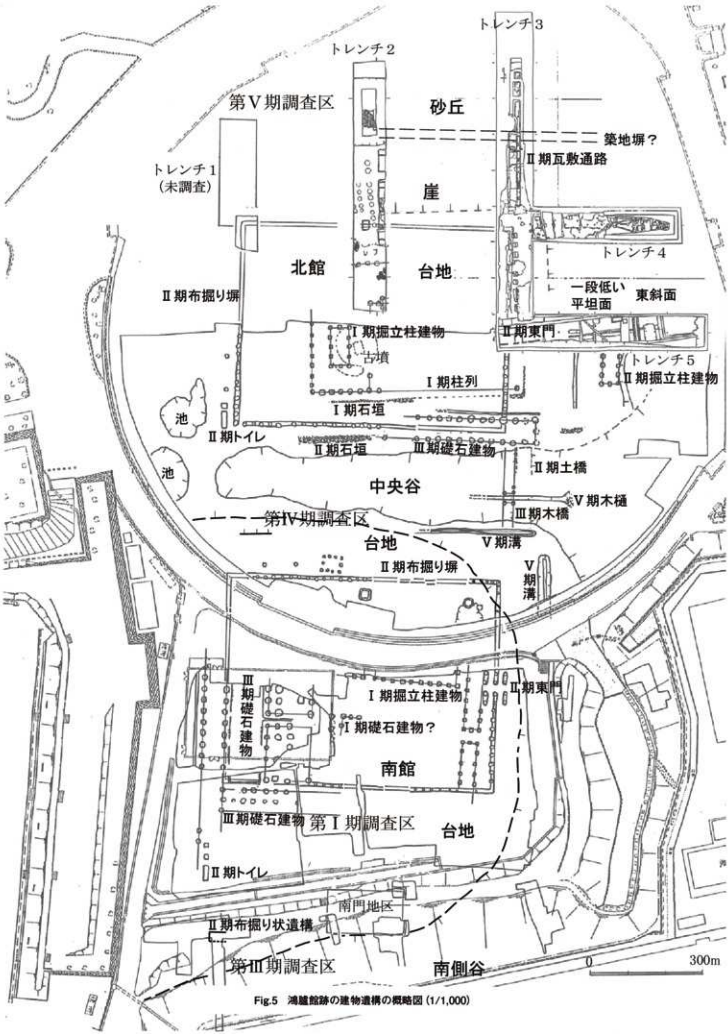


Fig.5　鴻臚館跡の建物遺構の概略図（1/1,000）

第三章　南館部分の建物関係遺構と出土遺物

1．南館部分の調査区と地形　Fig. 5～7

南館部分の調査は以下の調査が該当する。鴻臚館跡第○**次**（福岡城跡第○**次・調査番号**）で表記する。

第Ⅰ期調査：4次（10次・8829）、5次（13次・8910）、6次（15次・9005）、7次（17次・9130）、
9次（20次・9236）。補足調査として第1期整備に伴う調査：11次（27次・9420）。

第Ⅲ期調査：12次（31次・9537）、13次（35次・9620）、14次（39次・9736）。

第Ⅳ期調査：17次（43次・9910）、21次（50次・0309）。

各調査区の調査前の状況と基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ期調査区の調査前の状況はテニスコートとその周辺緑地であり、以前は国体挙闘場、その前は軍隊弾薬庫であった。現代の攪乱土もしくは近世～近代の整地土が表土層となり、遺構面までの深さは40㎝前後で、調査区の大半で風化頁岩の岩盤が露呈する。遺構面の標高は9.1～8.4ｍで東へ下り、南側は弾薬庫建設による近代削平のため深さ約1.5ｍとなる（遺構面標高８ｍ前後）。また、南東部では遺構面が南東に下がって行き、最も低い南東隅で7.6ｍとなる。

第Ⅲ期調査区は福岡城跡土塁盛土下を対象とする。南西部は第Ⅰ期と同一の遺構面（標高8.8ｍ前後）で、南東～東部の調査では古代遺構面まで到達していない。

第Ⅲ期調査区は平和台野球場跡地南半で、遺構面までの深さは約1.2ｍで、遺構面標高は7.2ｍ前後。ただし野球場外野席にあたる部分は削平深度が浅く、遺構面標高8.5～8.0ｍで、多くの遺構が削平を免れている。今回報告する遺構は、この外野席部分において検出している。

南館が立地する台地は、東に伸びる二本の丘陵のうちの南側の丘陵にあたり、造成により大きく削られた平坦面が広がっている。しかし丘陵縁辺部においては造成による盛土が認められる部分があり、敷地の拡大を図っている。造成盛土は調査区の南東隅から東端にかけての範囲に認められる。Fig. 6に南館の南東隅の土層図を掲載したが、この部分は岩盤が緩く南東へ下っていく斜面上に、数回にわたり盛土を行っている状況が認められた。風化頁岩岩盤の直上には旧表土である厚さ数㎝の黒色土が残る部分もあり、この黒色土帯は南館南東部から、弧を描きながら東門SB300の東側を通っている（Fig. 5参照）。

現在調査中の北館では、中央谷の周辺部分で盛土整地が盛んになされており、第Ⅰ～Ⅲ期の間に数度にわたり造成を行って敷地を拡張した痕跡が認められ、第Ⅰ→Ⅲ期の順で建物遺構が台地縁辺により近づいた位置で検出され、建物が拡張している状況が伺える。南館の乗る丘陵は北館に比べるとやや幅が広いが、やはり敷地の拡張が必要だったものと考えられる。

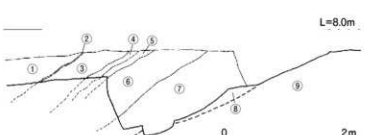


Fig.6　南東隅落ち際土層断面図（1/60）

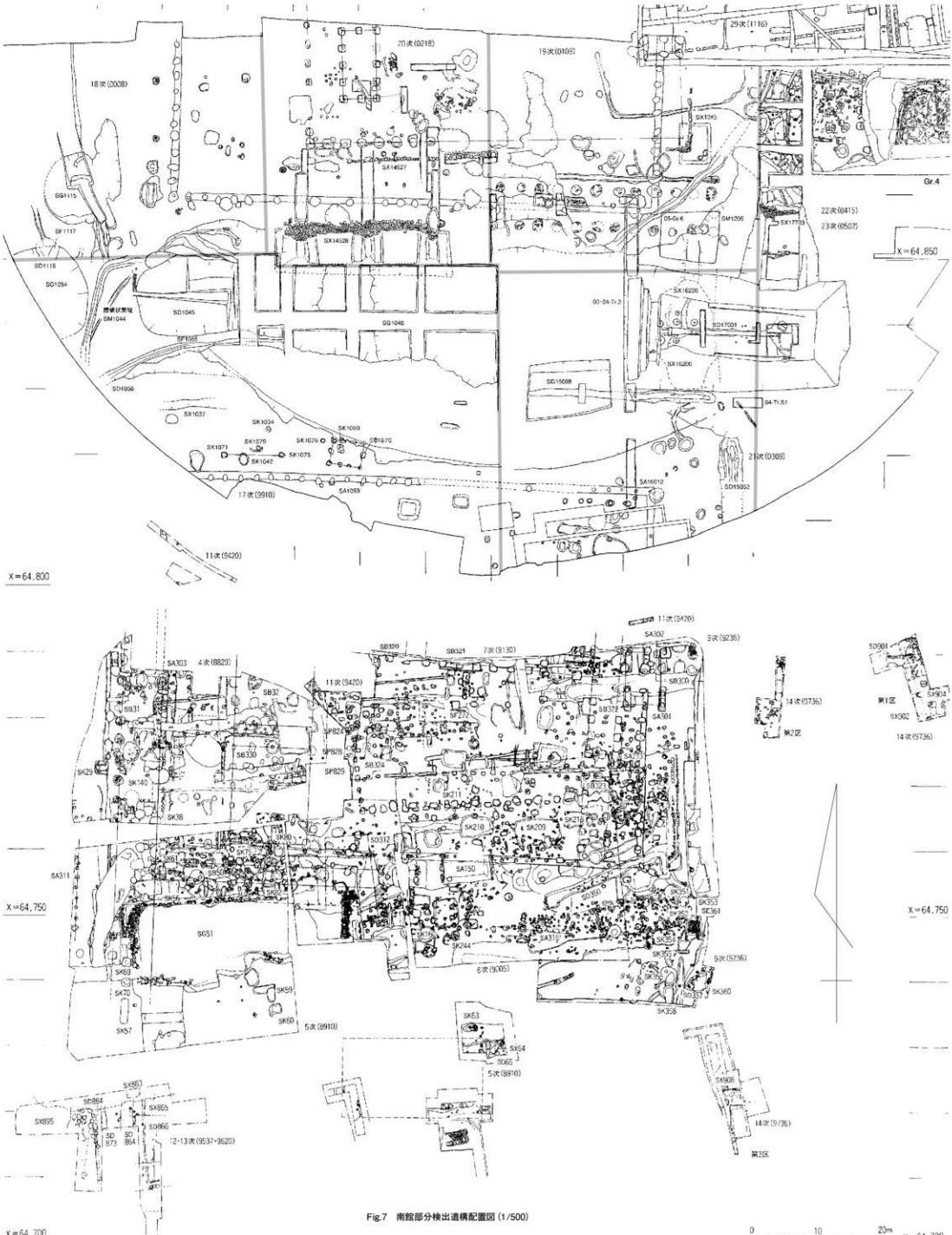


Fig.7　南館部分検出遺構配置図 (1/500)

2．第Ⅰ期の遺構と出土遺物　Fig. 8

南館部分の第Ⅰ期建物は５棟を確認している。いずれの建物も、風化頁岩の岩盤に柱穴が掘り込まれている。

SB320～323は掘立柱建物で、SB320・321は東西棟建物、SB322・323は南北棟建物で、４棟がＬ字形の配置をなし、それぞれが棟筋を揃えた長大な建物であると考えられる。SB324はＬ字形建物の内郭に配置された建物であるが、棟方位や規模等は不明である。

ＳＢ３２０　Fig. 9

第７次調査（9130）で確認した掘立柱建物である。SB321と主軸方位が等しく、東西に並ぶ。調査区北壁際に一部を確認し、現況で柱が東西に二つ並ぶのみである。SB321との柱間が310㎝と他の部分より少し開いており、別の建物と考えられる。主軸方位は座標北から85°西を向く。柱間は250㎝前後。柱穴の平面形は隅丸方形で、東西径105～110㎝。柱穴は深さ5㎝前後と極めて浅く、強い削平を受けたものと考えられる。柱痕跡は認められない。

柱穴から遺物は出土していない。

ＳＢ３２１　Fig. 9

SB320と主軸が等しく、棟を揃えて東西に細長く伸びる掘立柱建物の一部と考えられる。東西９間を数え、南北２間以上。SB321はSB320とともに、SB322・323とＬ字形配置をなすことから、SB322・323と同じ梁間２間の建物である可能性が強い。柱間寸法の平均値は、東西柱間が255㎝、南北柱間が210㎝である。柱穴の平面形は隅丸方形で径90～140㎝で、110㎝前後の規模の柱穴が多い。深さ5㎝未満～35㎝で、SB320と同様に強い削平を受けている。なお、図にアミをかけた東側の柱穴４つは掘り下げを行っていない。柱痕跡は認められない。

柱穴に切り込む近世遺構等から混入したとみられる遺物があるが、柱穴出土遺物はない。

Fig.8　南館部分の第Ⅰ期建物配置図（1/500）

ＳＢ３２２　Fig.10、PL. 1

SB323と柱筋が揃う南北棟建物である。SB323との柱間が337㎝と他より広く、別棟の建物と考えられる。梁行２間、桁行は現状５間で、北側が攪乱や第Ⅱ期東門に切られており、全長は不明である。梁間は210㎝の等間、桁行柱間は北から278、278、271、247、275㎝を測り、平均値は270㎝である。主軸方位は座標北から5°東偏する。柱穴平面形は隅丸方形で、径90～130㎝。SB322は遺構保存のため柱穴を掘り下げておらず、深さは不明であるが、浅い攪乱の部分でも柱穴が消滅していることからみて、SB321同様、柱穴の残りは浅いものと推定される。平面で柱痕跡は確認できない。

柱穴の掘削を行っていないため、この遺構に伴う出土遺物はない。

ＳＢ３２３　Fig.10、PL. 1

SB322と柱筋が揃う南北棟建物である。梁行２間、桁行は現状４間だが途中の柱穴を欠くとと

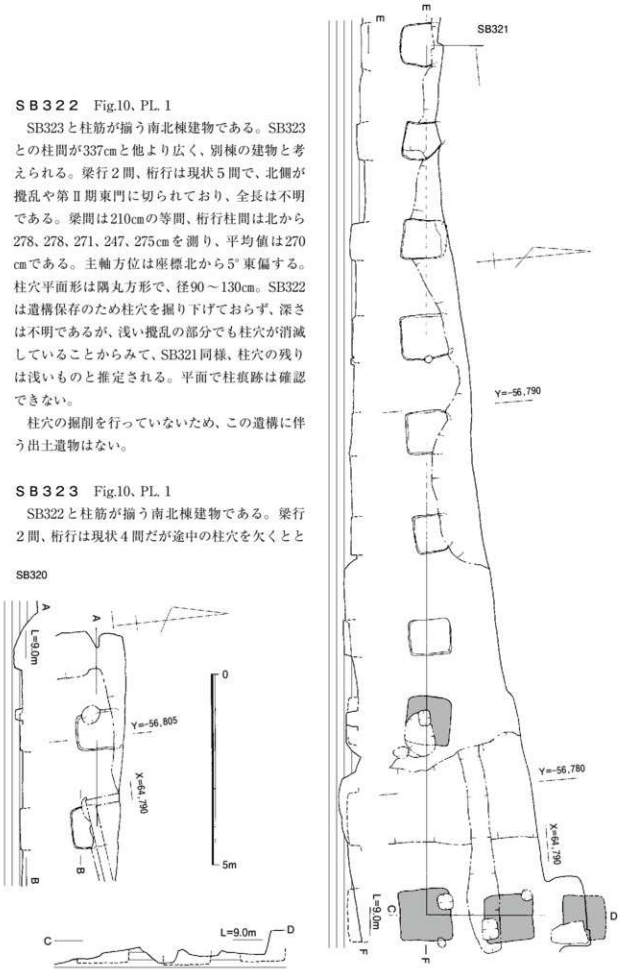


Fig.9　建物遺構 SB320・321 実測図 (1/100)

もに、南側は遺構面の削平が著しく全長は不明。梁間はSB322と同じく210cm。桁行全長は1114cmで、柱間の平均値は278.5cmとSB322に近似する。主軸方位はSB322と等しい。柱穴平面形は隅丸方形で、径80～110cmを測り、SB323と比べると一回り小さい。平面では柱痕跡は確認できない。柱穴は平面プランの検出に留めて掘り下げていないため、柱穴の深さ等は不明である。また、この遺構に伴う出土遺物もない。

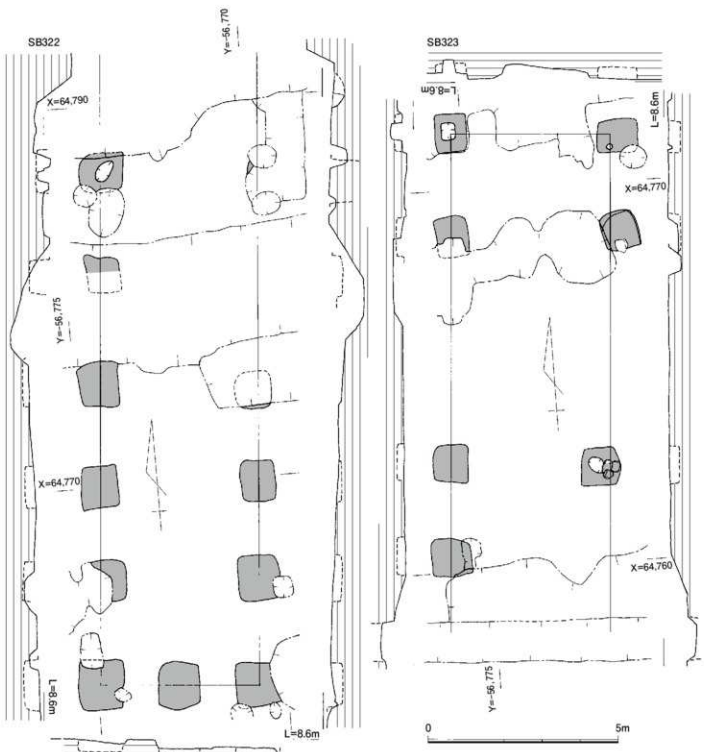


Fig.10　建物遺構 SB322・323実測図（1/100）

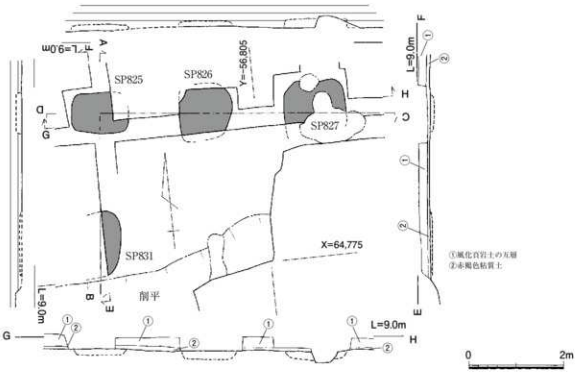


Fig.11　建物遺構 SB324実測図（1/80）

ＳＢ３２４　Fig.11、PL. 1

第４次調査（8829）区の東側にあたる部分に設けた第11次調査区（9420）において検出した建物遺構である。北側に位置するSB320との間は約10ｍを測る。この周辺には、版築状に整地された高まりが分布しており、この整地層の東隣には瓦を側面に立て並べた道路状の遺構（SF272）がある。上層から表土層、風化頁岩土層、赤褐色粘質土層の順に土層が推移し、地山面は標高8.9～8.95ｍの平坦面をなし、人工的な開削を受けて風化頁岩岩盤が露呈する。赤褐色粘質土層はこの地山の直上に約５㎝厚で広がる薄い層である。この上層の風化頁岩土層は厚さ約35㎝で、よく締まった整地土層であり、色調や混入土により微妙に土質が異なっているが、基本的には黄褐色～黄白色の風化頁岩土が５～10㎝ほどの層厚で３～４層にわたり水平に互層をなしている。版築状の整地層とはこの層を指しており、この整地層上面の最高標高は9.31ｍを測る。SB324は地山面から掘り込まれた下層遺構で、赤褐色粘質土と風化頁岩整地層に覆われている。

SB324は４つの柱穴（SP825～827・831）で構成され、現状で東西２間、南北１間である。柱穴は隅丸方形プランで、径0.9～1.3ｍ、深さ10cm以内である。柱痕跡は検出していないが、掘り方の間隔からみて柱間は2.3～2.5ｍ前後と推定される。建物の北辺柱筋はSB320・321と平行し、同じ主軸方位をとる。SB324は各柱穴において掘り方底部の状況が他の礎石建物のそれと類似している。

なお、同一検出面上で別の柱列SP824・828・829を検出している（124ページ参照）。

SP-825・826で瓦が極少量出土した以外、出土遺物はない。いずれも細片のため図示していない。

３．第Ⅱ期の遺構と出土遺物　Fig.12

東西に長い長方形区画をなす布掘り塀１、この塀の東に取り付く門１、塀内の掘り込み地下地業１、塀外のトイレ遺構３、南へ離れて位置する布掘り状遺構１がある。

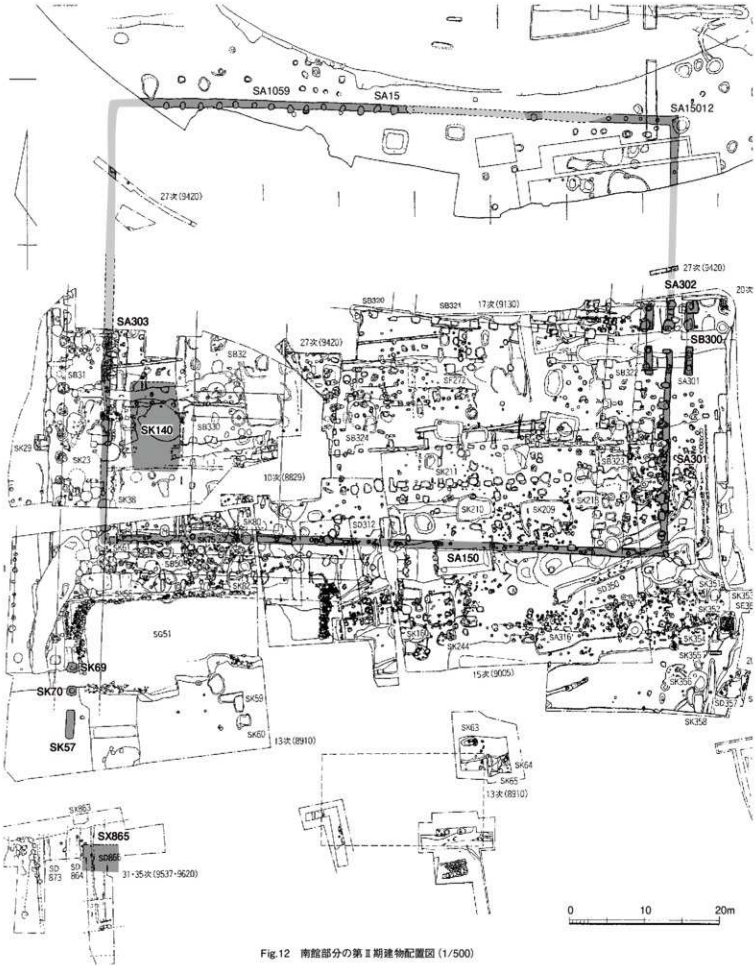


Fig.12　南館部分の第Ⅱ期建物配置図 (1/500)

1）布掘り塀　SA15・150・301・302・303・1059・15012

Fig.12～16、PL.2～5、Tab.7

北館と相似形をなす布掘り掘り方の掘立柱列で、塀と推定される遺構である。全体形は東西に長い長方形プランで、東辺の中央に東門SB300が取り付く。布掘り塀の各角の芯座標値をTab.7に示した。北西角は未調査のため推定値である。心々距離で西辺推定長56.08m、東辺長56.431m、南辺長74.169m、北辺推定長73.85mを測り、東側と南側に僅かに開く区画をなす。北東角及び南東角と東門中心までの距離は北半28.077m、南半28.354mで、ほぼ等しい。主軸方位は座標北より約1°30′東偏し、真北からは1°10′東偏する。掘り方は幅1.2m前後の溝状をなし、最も深い西辺中央で底面まで1.6mを測る。底面レベルは全体的に東辺が50cm前後低いことから、当時の地表面も東へ傾斜していたものと推定される。

ちなみに、北館の布掘り塀遺構は僅かに規模が小さく（50cm以内）、南館と同じく東へ勾配がある。北館と南館の配置をみると、厳密には並行せず、東西両端の南北間距離には約0.8mの差があって僅かに東へ開いて配置されていることが分かる。南館と北館の中軸線の間隔は約100mを測り、布掘り底面レベルを比較すると北館が約1.2m低く、北の海上から眺めた場合には、北館の屋根の上に南館の屋根の甍が連なり重層的な印象を与えたものと思われる。

南館北辺と北館南辺の間の距離は42.5～43.3m、南館南辺と後述の布掘り状遺構SX865との間の距離は43.212mで、3遺構がほぼ等間隔に並んでいる。また、南端の布掘り状遺構SX865から北館北端までの延長距離は約200mを測る。

布掘り塀は、遺構番号を各調査区で付けており、西辺をSA303、南辺をSA150、東辺は東門を境として南側をSA301、北側をSA302とし、北辺は中央をSA15、西半部をSA1509、北東角をSA15012としている。うち、最初に調査したSA15については既に本報告済みである。このうち、SA303は第Ⅲ期礎石建物SB31の東側礎石列と完全に重複する位置にあり、SA150は同じく礎石建物SB50の北側雨落ち溝と重複する位置にある。第Ⅲ期建物への建て替えにあたって、第Ⅱ期布掘り塀の基準線を踏襲したことが明らかである。これらの布掘り塀については、遺構の保存を前提とし、必要最小限の範囲で掘り下げを行っている。調査は柱抜き穴の断ち割りや、要所における深さの確認等に留めており、特に第Ⅲ期礎石建物遺構が重複する部分では平面確認に至っていないところもある。

SA150（Fig.14）は幅1.2m前後、深さ約1.6mで、柱は径50cm前後を測り、柱間は2.3m強のほぼ等間である。掘り方内は版築状に良く突き固められている。

SA301（Fig.13）は10間分を検出した。柱間は2.42～2.46mを測る。柱抜き取り穴の形状から、柱は

Tab.7　第Ⅱ期布掘り塀角（芯）の座標値（第Ⅱ系）

位置		X座標	Y座標	標高（m）		位置	X座標	Y座標	標高（m）	
				遺構面	底面				遺構面	底面
北館	北西角	64,915.083	-56,836.625	7.3	（未掘）	北東角	64,913.544	-56,762.950	7.1	5.6
	南西角	64,859.420	-56,838.330	7.2	6.1	南東角	64,857.500	-56,764.680	7.3	5.5
南館	北西角（推定）	64,816.900	-56,839.450	8.5	7.3	北東角	64,814.170	-56,765.650	8.0	6.5～6.8
	南西角	64,760.845	-56,841.115	9.0	（未掘）	南東角	64,757.755	-56,767.010	8.2	（未掘）

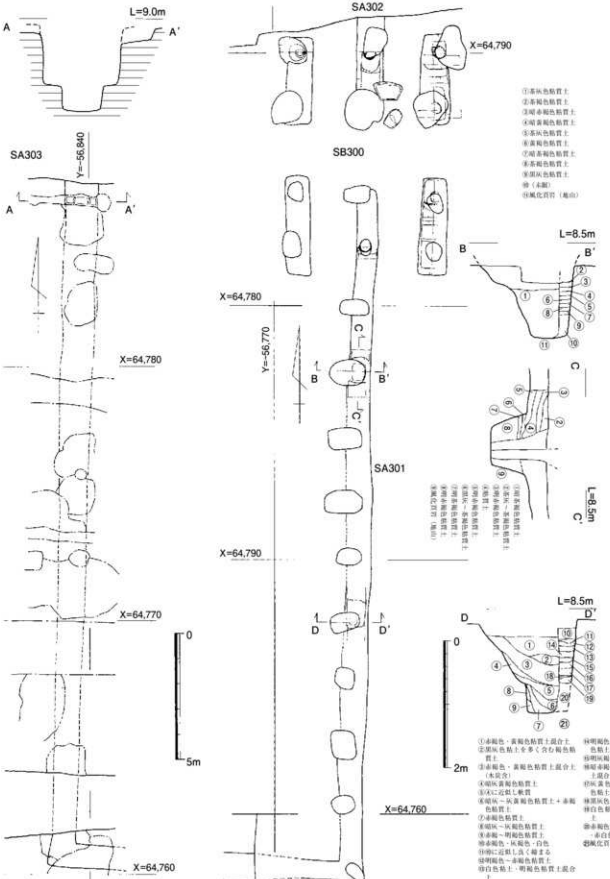


Fig.13　布掘り掘立柱列西辺 SA303、東辺 SA301・302実測図（平面図1/150・断面図1/60）

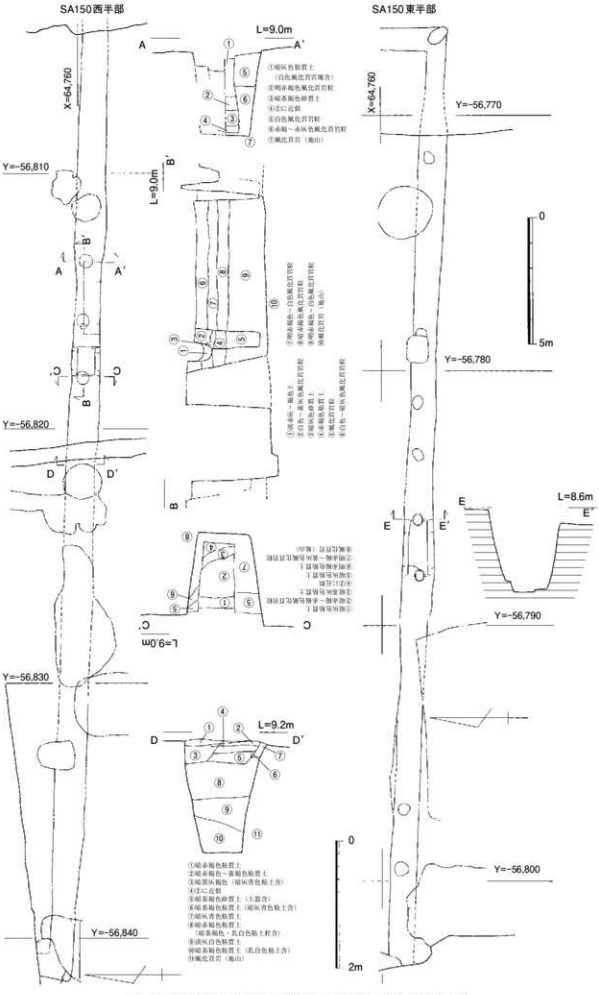


Fig.14　布掘り掘立柱列南辺 SA150実測図（平面図1/150・断面図1/60）

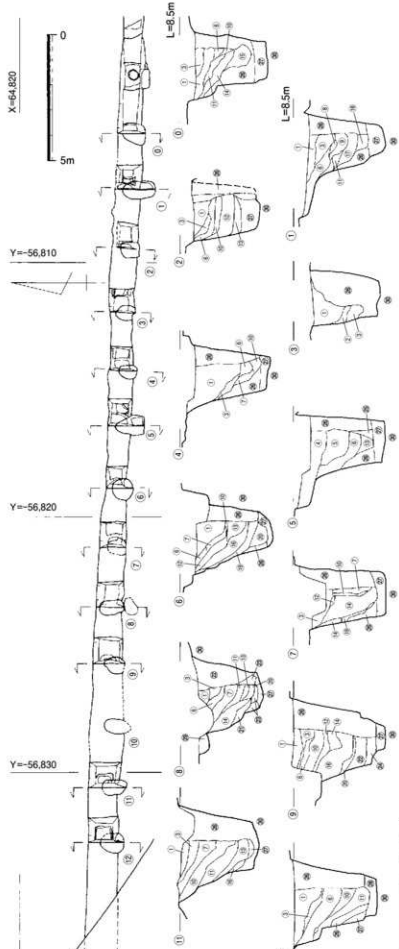


Fig.15　布掘り掘立柱列北辺西半 SA1059実測図（平面図1/150・断面図1/60）

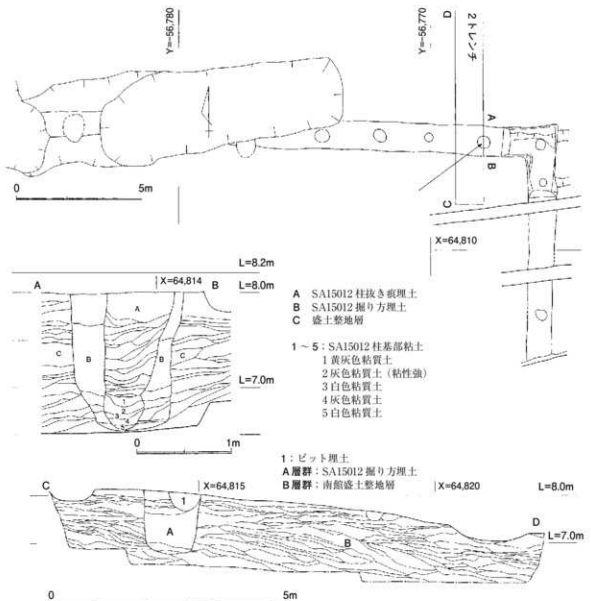


Fig.16　布堀り掘立柱列北東角 SA15012実測図（平面図1/150・断面図1/40・1/80）

全て塀の内側（西側）に倒して抜き取っているが、南東隅の柱だけは外側へ抜き取っている。柱掘り方は、溝状に幅1.2ｍ、深さ0.9ｍ以上を掘り下げた後、底面に径90㎝、深さ60㎝前後の柱穴を平均2.41ｍの柱間をおいて掘っている。柱は数㎝の層厚で周りを突き固めて据え付けている。

SA302（Fig.13）は東門の北に連続する布掘り塀で、一部の確認に留まるが、規模や掘り方はSA301と同じである。SA302は、北側調査区外の平和台野球場外周道路上のトレンチにおいても延長部を一部確認しており、道路地表面から深さ50㎝の標高7.5ｍの遺構面において布掘り塀を検出したが、東辺部は攪乱を受け現存する幅は60㎝であった。

SA303（Fig.13）は礎石建物SB31の東側礎石列や第Ⅳ期以降の土坑群が重複しており、北端部で２間分の柱抜き取り穴を検出したのみである。柱抜き取り穴は平面楕円形で、長径1.1～1.6ｍ、短径0.6ｍ、深さ1.6ｍである。いずれも塀の内側（東側）に柱を倒して抜き取る。柱抜き取り穴の西側には半円形の柱最下部の痕跡が残り、柱径30～40㎝、柱間約2.4ｍであることが分かる。

SA303の北側調査区外では、SA302と同様、平和台野球場外周道路上のトレンチにおいて延長部分

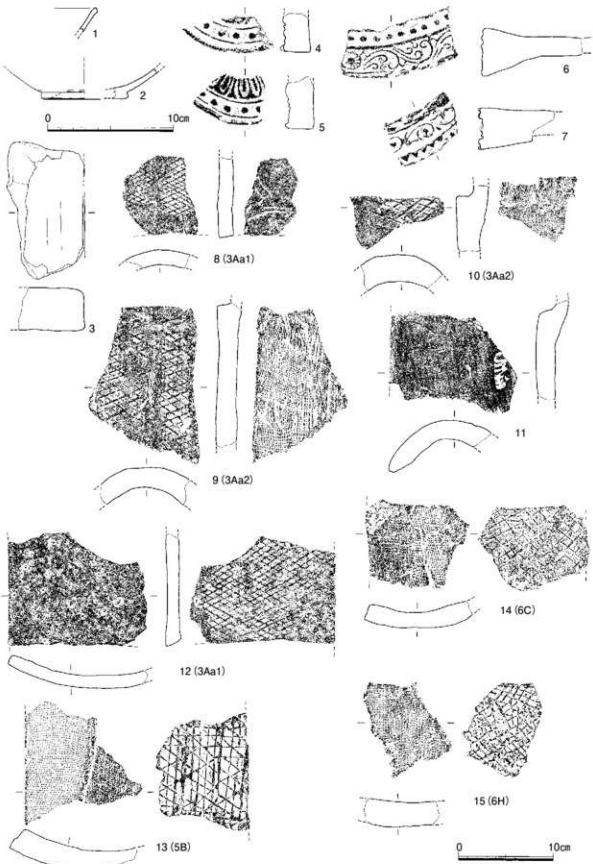


Fig.17　SA150出土遺物実測図1（1～2は1/3、他は1/4）

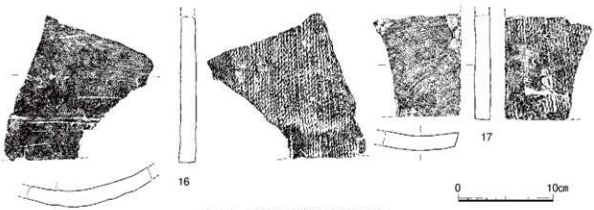


Fig.18　SA150出土遺物実測図2（1/4）

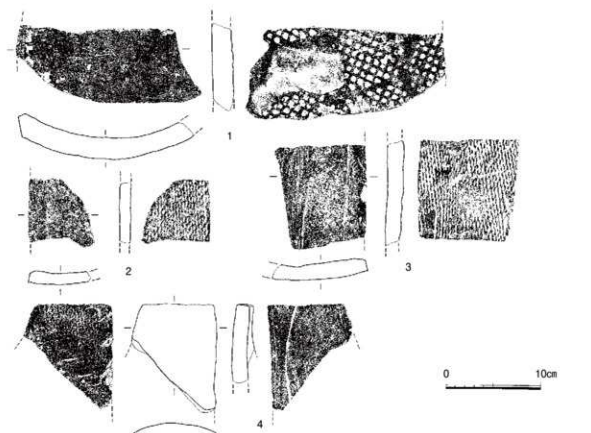


Fig.19　SA1059出土遺物実測図（1/4）

を確認している。道路地表面から深さ35cmの標高7.65ｍの遺構面で布掘り塀と柱抜き取り穴を検出しており、布掘りは幅１ｍ、柱抜き取り穴は0.8×0.6ｍの楕円形をなし、塀の内側（東側）へ柱を倒して抜き取っていることを確認した。

SA1059（Fig.15）は、東端でSA15に連続する。長さ31ｍ、柱間12間分を検出し、SB15を合わせると35ｍ、柱間14間分となる。西側調査区外で南へ直角に折れると考えられる。遺構面はやや削平を受けており、標高8.5ｍを測る。風化頁岩岩盤を幅１ｍ前後、深さ１～1.2ｍの溝状に掘り抜き、掘り方底面に深さ15cm程の掘り込みを設けて柱を据えている。柱間は12間の平均値で2.33ｍとなる。掘り方内は、風化頁岩岩盤の掘削土で埋め戻しており、数cm単位の版築状に突き固めている。柱は全て塀の内側（南側）に抜き取っている。掘り方埋土と柱抜き痕から微量ではあるが瓦小片が出土している。

SA15012（Fig.16）は塀の北東角にあたる部分である。盛土整地層に掘り込まれており、遺構検出面で幅1.1～1.3m、深さ1.5m前後を測る。一部において断ち割り調査を行い、角部分で掘り方底面の形状を探った。角部分は鋭い稜をなして直角に屈折しており、壁面はほぼ直立する。掘り方底面は北辺に沿って小さい段をなすが、全体的に平坦である。底面の形状をみると、北辺と東辺を別々に掘削して連結したのではなく、計画的に一連の掘削を行ったことが分かる。柱痕跡は確認しにくかったが、大きな抜き跡ではなく、柱径よりもやや大きい程度の抜き穴を検出した。柱間は概ね2.4mで揃うものの、北辺の角から3間めと南辺の1間めが狭くなっており、等間に配された柱の端数調整がなされたことが伺える。

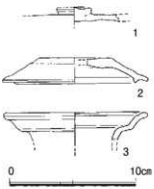


Fig.20　SA15012出土遺物実測図
(1/3)

ＳＡ１５０出土遺物　Fig.17・18

少量の須恵器、中国産陶磁器（邢窯系白磁、越州窯系青磁）、近世染付等の他、瓦が出土した。

1・2は邢窯系白磁碗で、2は畳付けにかかった釉を剥ぎ取る。ともに小片であり、掘り方の上層から出土している。

3は磚である。**4・5は軒丸瓦**で、5は鴻臚館式（223型式）である。**6・7は軒平瓦**で、6は666A型式、7は鴻臚館式（635型式）である。**8～10は丸瓦**で、格子目叩きを施す。**11**は近世の**丸瓦**で凸面に文字を押印する。上層出土。**12～17は平瓦**で、12～15は斜格子目叩き、16・17は縄目叩きでを施す。

邢窯系白磁や越州窯系青磁、斜格子目叩きの瓦、さらには近世の染付や瓦などが含まれており、後世遺構から遺物の混入があったことが明らかである。SA150は、近世武家屋敷の遺構である池状土坑やピットなどによる破壊を多く受けていることから、調査時の遺構の検出漏れなどにより、後世遺構に伴う遺物が混じり込んだものと考えられる。

ＳＡ３０１・３０２・３０３出土遺物

SA301は東門より南側の部分である。柱抜き痕の断ち割り等に留めており、遺物は出土していない。

SA302は、東門を構成する柱穴から遺物が出土したが、SA302としての遺物はない。

SA303は塀の西辺にあたり、北端で断ち割り調査を行ったが、他は平面プランの確認のみであるため出土遺物はない。

ＳＡ１０５９出土遺物　Fig.19

瓦の他、柱穴から数点の土師器、須恵器片が出土したが、細片のため図示できない。

1は平瓦で、正格子叩きを施す。老司式系であろう。**2・3は平瓦**で、縄目叩きを施す。**4は面戸瓦**で、やはり縄目叩きを施す。1は柱抜き穴③、2は同⑧、3は同⑪、4は同⑨から、それぞれ出土した。

ＳＡ１５０１２出土遺物　Fig.20

遺物の出土は極めて少なく、図化できたものは3点である。

1～3は須恵器である。**1・2**は断ち割り調査部分から出土した**蓋**である。1は擬宝珠状つまみが扁平なボタン状に退化したものである。2は小型の坏蓋で、かえり部分は退化している。形態的には1よりも先行する。**3は壷**の口縁で、SA15012が掘り込まれた整地土層から出土した。内外面を横ナデ調整する。この他、瓦片等が出土した。

時期を判断するに充分とはいえないが、1は8世紀前半の特徴を示している。

2）東門

ＳＢ３００　Fig.21・22、PL. 6

布掘り塀東辺の中央に位置する。布掘り塀に連接する、掘立柱式の建物である。

桁行３間、梁行２間の八脚門である。布掘り塀SA301が南に、同SA302が北に取り付く。抜き取り穴が残り、柱は全て抜き取られている。基壇、階段、雨落ち溝等は残存しない。柱間は、梁間2.66ｍ、中央間3.55ｍ、脇間2.07ｍを測る。柱径は柱抜き取り穴に残る痕跡から40㎝前後と推定される。側柱の柱掘り方は脇間の２本の柱を１組とし、幅1.2ｍ、長さ3.6～3.8ｍ、深さ0.8ｍ以上の隅丸長方形の穴を掘り、その底面に深さ60㎝の２基の柱穴を掘る。棟桁筋の柱掘り方は、門に取り付く塀の柱掘り方と一体に掘り、その後に底面に柱穴を個別に掘っている。すなわち溝状の掘り方部分に限れば、南側２本の柱掘り方はSA301の柱掘り方と同一、北側２本の柱掘り方はSA302の柱掘り方と同一である。

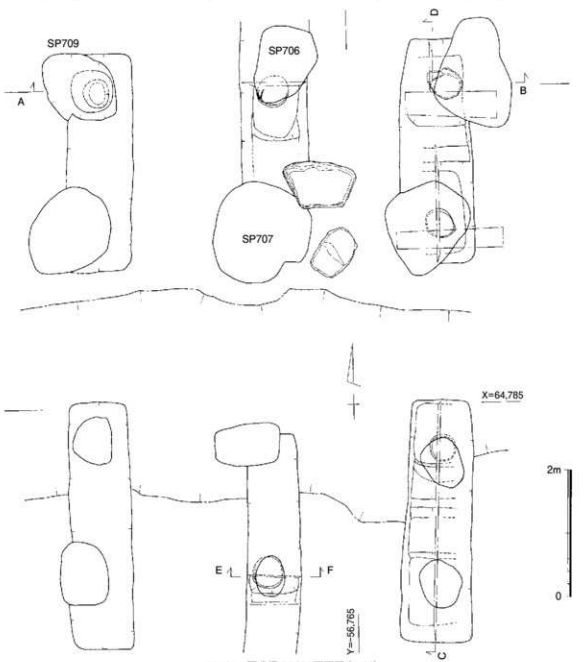


Fig.21　門遺構 SB300平面図 (1/60)

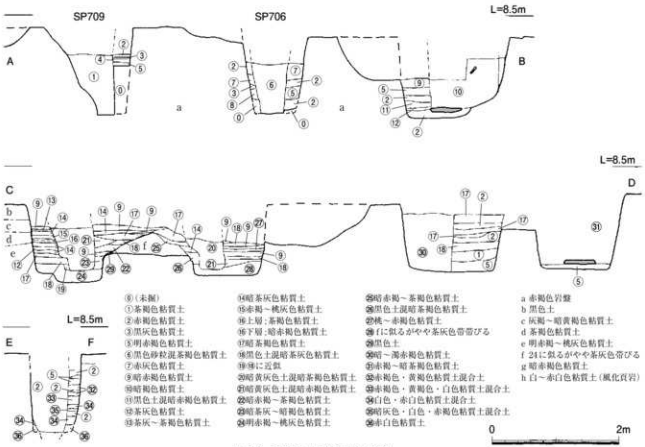


Fig.22　SB300土層断面図 (1/60)

建物棟桁方向は、座標北から東へ約2°偏しており、布掘り塀と同一である。

ＳＢ３００出土遺物　Fig23

掘り方や柱抜き取り痕から須恵器、土師器、瓦がごく少量出土した。

1は**須恵器平瓶**の口縁部である。口縁端部が若干内折する。外面にカキ目を施し、縦方向に2本のヘラ記号が入る。口径4.8㎝を測る。SP706から出土した。**2**は**須恵器壺**である。体外面肩部に回転ヘラ削りを加える。**3**は**土師器坏**であろう。2・3は、SA302と連結する掘り方覆土から出土した。

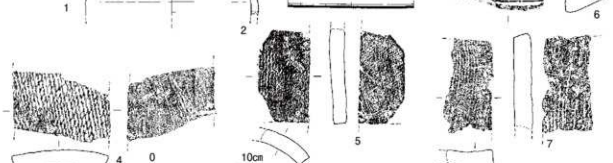


Fig.23　SB300出土遺物実測図 (1～3は1/3、他は1/4)

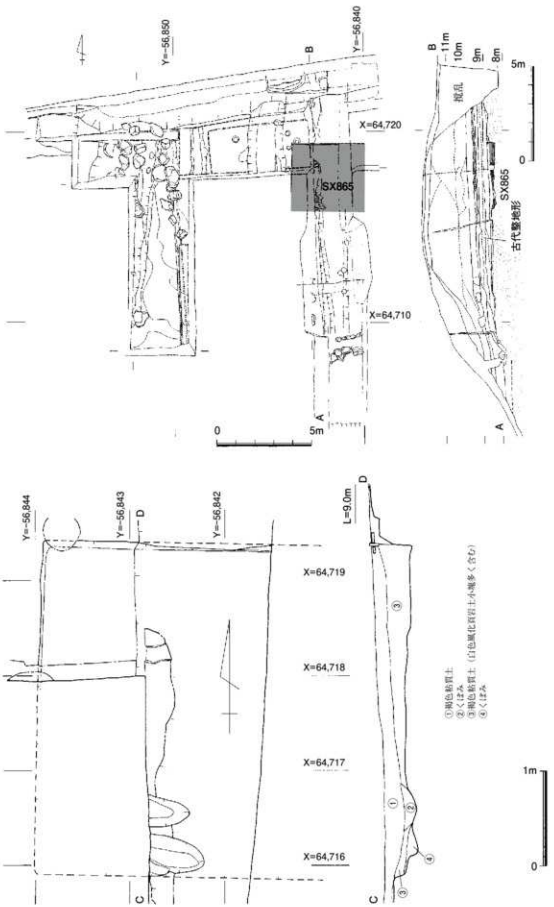


Fig.24　布掘り状遺構 SX865 実測図（位置図1/200・拡大図1/40）

4は**製斗瓦**で、縄目叩きを施す。SP707出土。**5**は**丸瓦**で、縄目叩きを施す。SP706出土。**6**は**軒平瓦**で老司式（560Ba'型式）。SB300に伴うが、出土ピットは不明。**7**は**平瓦**で、縄目叩きを施す。SP709出土。

布掘り塀と同時期の遺構である。

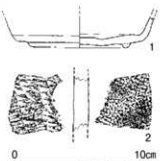
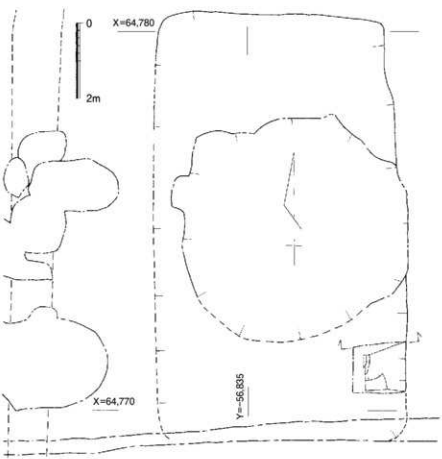


Fig.25　SX865出土遺物実測図（1/3）

3）布掘り状遺構

ＳＸ８６５　Fig.24、PL. 8

鴻臚館跡12次（福岡城跡第31次）（9537）調査で福岡城土塁下に検出した遺構である。東西に長い長方形プランの土坑様の遺構で、北壁と西壁が垂直に立ち上がり、東側はSD866により削平されている。壁の最も高い部分で45cmが残るが、本来70cm以上はあったと考えられる。掘り方の埋土の状況が布掘り塀と類似しており、遺構の主軸方位も等しい。埋土は明褐色粘質土で、地山との間で容易に区分でき、壁ではめくれるように埋土が剥がれ、鋤先状のやや丸みのある掘削痕が所々残る。南壁は確認できないが、土層断面の観察により、北壁から約3.4ｍ南の位置で僅かに地山が立ち上がる箇所が南壁の痕跡と考えられる。



ＳＸ８６５出土遺物　Fig25

須恵器片３点と縄目叩き瓦細片が極く少量出土した。

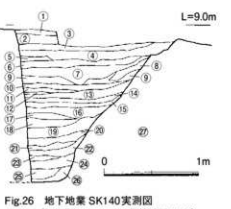
1は**須恵器高台付坏**で、高台は低く、体部との境よりかなり内側に付く。**2**は**須恵器甕**である。

須恵器坏の特徴から、８世紀前半を大きく下ることはなく、第Ⅱ期の遺構と考えられる。

4）地下地業

ＳＫ１４０　Fig.26、PL. 9

布掘り塀区画内の南西隅に位置する遺構である。東西約６ｍ、南北約12ｍの隅丸長方形の範囲を掘り下げて、版築



①淡灰黄褐色粘質土
②明黄褐色砂質土（風化真岩粒多量含、固く締まる）
③明黄褐色砂質土（細い粘質土混合）
④明黄褐色砂質土（風化真岩粒多量含）
⑤明黄褐色砂質土（細い粘質土混合）
⑥明黄褐色砂質土（木炭片若干含）
⑦明黄褐色砂質土（風化真岩粒・瓦多量含）
⑧暗褐色砂質土（腐植土・木炭含）
⑨明褐色砂質土（白色風化真岩粒含）
⑩明褐色砂質土（橙色風化真岩粒多量含）
⑪明褐色砂質土（明白色風化真岩粒・炭含）
⑫明褐色粘質土
⑬明褐色砂質土（褐色粘土多量含）
⑭暗～茶褐色土（風化真岩粒多量含）
⑮～⑱明褐色砂質土（明白～黄白色風化真岩粒多量含）
⑲褐色砂質土
⑳～㉓明黄褐色砂質土（明白色風化真岩粒多量含）
㉔褐色砂質土
㉕明褐色砂質土（粘土粒多量含）
㉖褐色砂質土
㉗風化真岩（地山）
Fig.26　地下地業 SK140実測図
（平面図1/100・土層断面図1/40）

状の地下地業を行った遺構である。ただし、この遺構の上面では建物遺構を確認することができない。南東隅の一部を掘り下げて底の確認と土層観察を行っている。東側の壁は直線的に傾斜するのに対し、南側は途中にテラス状の平坦面が認められる。遺構面から底面までの深さは2.6mで、底面標高6.4mである。土層は版築状に層厚5cm前後の薄い層が重なっている。底面から1.7m上の層から鴻臚館式軒丸瓦が出土した。

第Ⅱ期東門SB300中軸線を基準に、SK140を北へ折り返した対称位置で確認調査を行ったが、類似遺構は検出できなかった。対称位置の遺構面標高は8mで、SK140底面は6.4mであることから、削平によって消滅した可能性は低く、本来存在しなかったと考えられる。SK140は礎石建物の基礎地業とも考えられるが、鴻臚館跡調査では他に類例がなく、遺構の性格については不明瞭である。

ＳＫ１４０出土遺物　Fig.27

出土遺物は少量の須恵器と朝鮮半島産陶器の他は、全て瓦である。

1は**須恵器壷**で、外面に調整具小口の押圧痕が残る。口径20.4cm。**2**も**須恵器壷**で、外面の叩きにカキ目調整を加える。**3**は**須恵器甕**の小片である。**4**は**新羅陶器瓶**で、外面に印花文を施す。

5～**8**は**軒丸瓦**で、5･6は鴻臚館式（223a型式）である。**9**･**10**は**軒平瓦**で鴻臚館式（635型式）である。**11**は**平瓦**で、縄目叩きを施す。

出土遺物から8世紀前半頃（第Ⅱ期）の遺構と考えられる。

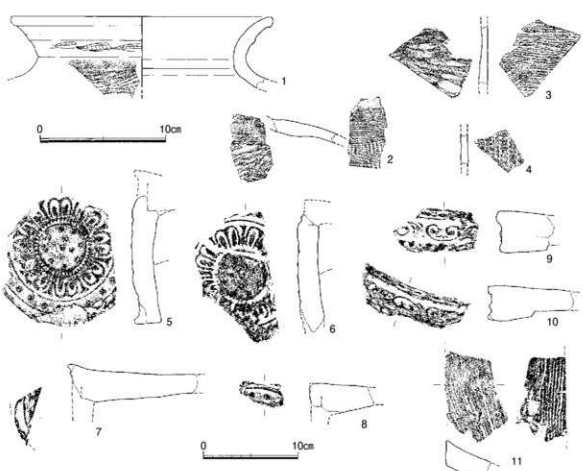
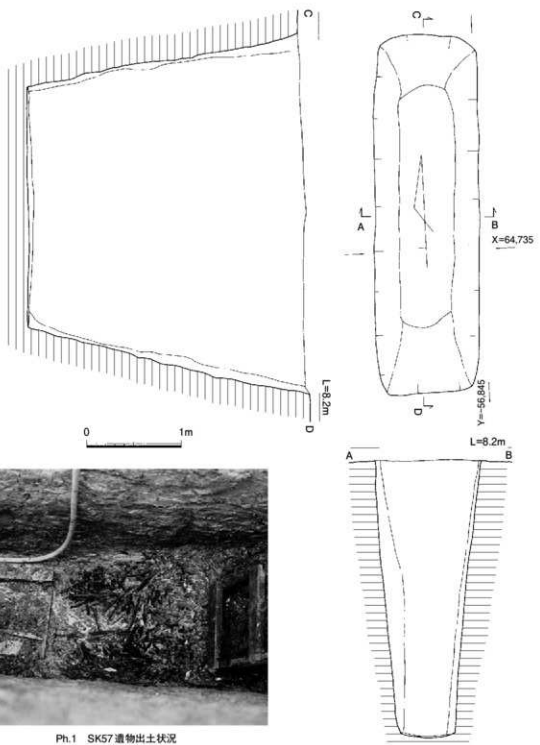


Fig.27　SK140出土遺物実測図（1～4は1/3、他は1/4）

5）トイレ遺構

布掘り塀 SA150 と布掘り状遺構 SX865 のほぼ中間に位置し、南北に一直線に配置されている。いずれも形状が類似し、深さが等しく、埋没状況や出土遺物も同じであり、同一の機能を持つ遺構群と捉え得る。また、埋土から多量の瓦が出土することから、瓦屋根があったと推定される。いずれも近世～近代に上部が 1 mほど削平されている。



Ph.1　SK57 遺物出土状況

Fig.28　トイレ遺構 SK57 実測図 (1/40)

トイレ遺構ＳＫ５７　Fig.28、PL.９・10

最も南に位置する。北隣のSK70と約1.8ｍ離れる。遺構検出面は近世～近代に約１ｍの削平を受けている。

主軸方位は座標北から2°～2° 30′東偏し、布掘り塀とほぼ等しい。平面プランは隅丸長方形を呈し、南北長3.8ｍ、東西幅1.1ｍを測る。風化頁岩岩盤に掘り込まれており、長辺壁は85°、短辺壁は76～80°の急傾斜をなす。底面までの深さは2.9ｍだが、本来は４ｍ前後の深さがあったと考えられる。底面は隅丸長方形をなし、南北2.55ｍ、東西0.6ｍである。風化頁岩岩盤を掘り抜いて砂層まで達するが、砂層から湧水があったような痕跡は認められない。

埋土の状態は、遺構検出面から深さ1.4ｍ付近までは自然に流れ込んだレンズ状の堆積である。下半の下層は水平に同一土層が堆積した状態で埋まっている。土層の状態は、第１層：黄褐色粘質土で炭、炭化材、焼土を多量に含み、炉跡等を破壊して窪みに投げ込んだ状況を示す。第２層：黄褐色土と灰色粘質土の混在土。第３～５層：壁付近のみ堆積する層で、第３層は灰色砂質土、第４層は黄褐色粘質土、第５層は黒色粘質土である。第６層は水平に堆積する漆黒色粘質土層で、厚さ155cmである。上下２層にわたってウリの種を多く含む層がある。また、第６層には多量の木製品が含まれている。最下層には若干の砂層があり、木の削り屑が僅かに出土した。

ＳＫ５７出土遺物　Fig.29～37、PL.19・22

須恵器、土師器、中国産陶磁器（越州窯系青磁・緑釉）、朝鮮半島産陶器の他、多量の瓦、多量の木製品（木簡・籌木等）が出土した。

1は**須恵器蓋**で、外面天井部はヘラ切離しのまま未調整。口径16.8cm。**2**は**須恵器高台付坏**。**3**は**須恵器皿**で、外底はヘラ切離しのまま未調整で、「城」の墨書がある。口径20.4cm、器高3.0cm。**4**は**須恵器横瓶**で、SK69出土の破片と接合した。外方から粘土円盤を張り付けて塞ぎ、外面は閉塞部にのみカキ目を施した後、平行叩きを加える。閉塞部内面には指抑え、その他の内面には当て具痕が残る。**5**は大形の**須恵器甕**で、底部は小さな平底をなす。外面は平行叩きの上から工具ナデ調整し、内面は当て具痕の上から工具ナデ調整を施す。

6は**土師器坏**で、口径14.6cm。**7**も**土師器坏**で、外底はヘラ切り離しである。**8**は**土師器皿**で、外底から体部下半にかけて回転ヘラ削りを施す。口径16.2cm、器高1.6cm。**9**は**土師器蓋**で、端部は開き気味に短く折れる。外面は回転ヘラミガキであろう。**10**も**土師器蓋**で、口縁端部は退化する。内外面とも全体に丁寧な回転ヘラミガキを施す。口径21.4cm。**11**は**土師器高坏**である。坏部に比べて脚部が小さい。坏部内外面に回転ヘラミガキを施す。口径22.8cm、器高7.5cm、底径9.6cm。**12**は**土師器甕**で、口縁が「く」字形に開き、体部との境は明瞭である。外面から口縁内面に刷毛目、胴部内面にヘラ削りを施す。口径16.6cm、器高15.3cm。**13**も**土師器甕**で、口縁は緩く外反する。外面から口縁内面に刷毛目、胴部内面にヘラ削りを施す。口径21.6cmを測る。

14～**17**は**越州窯系青磁**である。**14**・**15**は**碗**で、15は釉下に白化粧が認められる。福建産。**16**は**蓋**で、口縁端部に目痕が残る。**17**は**四耳壺**で、体部下半から外底に回転ヘラ削りを施し、露胎となる。図に示したように、内底に小さな目痕があり、焼成時に小さな器を入れて重ね焼きしたものと思われる。口径16.0cm、器高35.0cm、底径11.7cm。

18～**24**は**朝鮮半島産陶器**である。**18**は**樽形瓶**で統一新羅時代のものである。体部を筒状に成形し、一孔を開けて口縁部を取り付ける。体部中央とそれを挟んだ左右の計３ヶ所に沈線をらせん状に巡らせる。側面には繊維の圧痕が残る。口径6.6cm、器高21.7cm。**19**～**24**は**統一新羅**～**高麗時代**の**壺**または**甕**の破片と思われる。いずれも内面はナデ調整。外面の調整は、20～22が格子目叩きで、他は横ナデ。

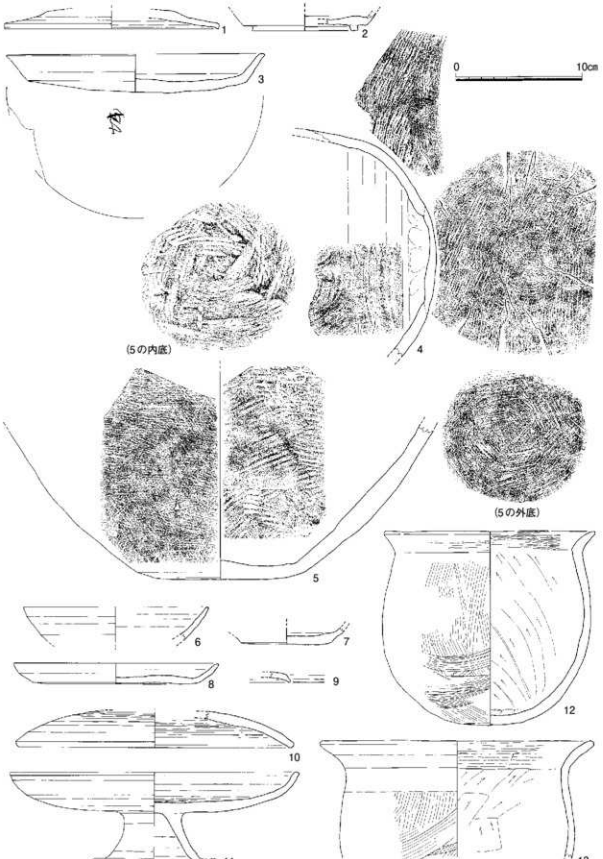


Fig.29　SK57出土遺物実測図1 (1/3)

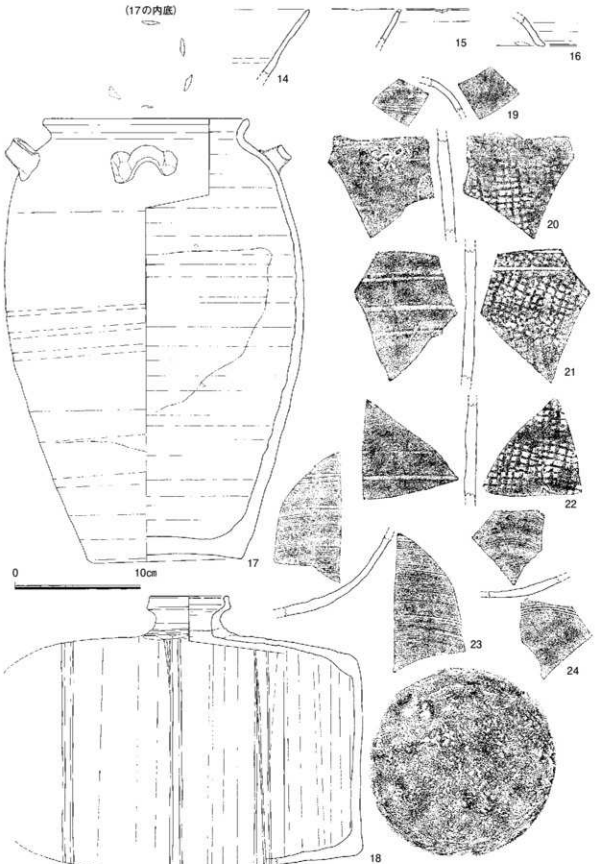


Fig.30　SK57出土遺物実測図2 (1/3)

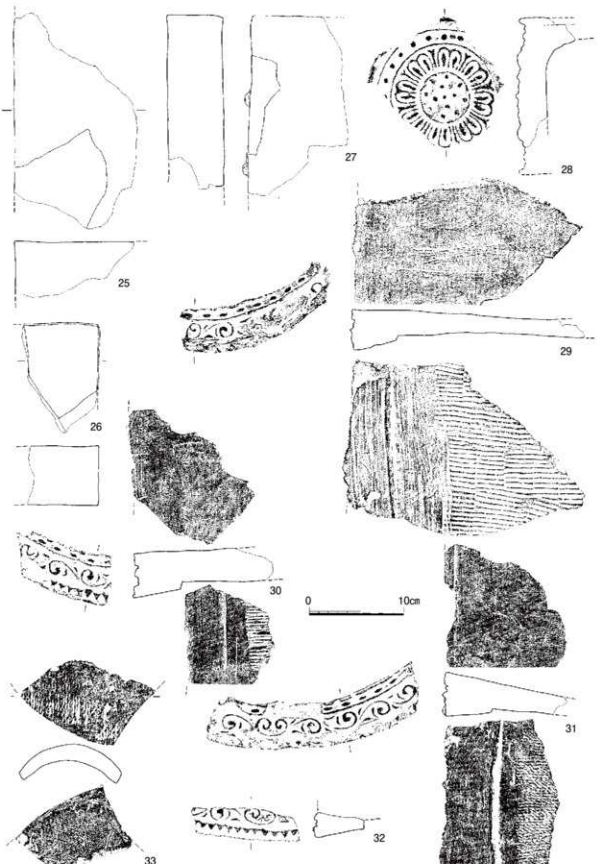
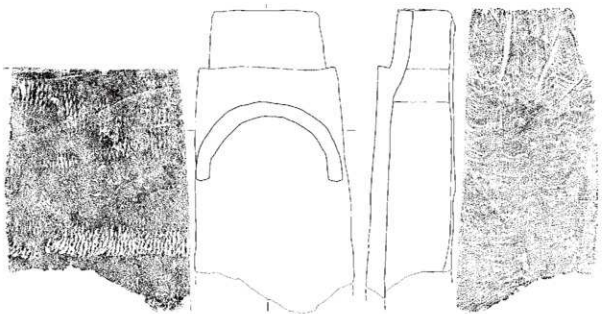
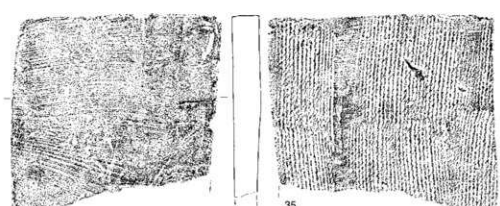


Fig.31　SK57出土遺物実測図3 (1/4)





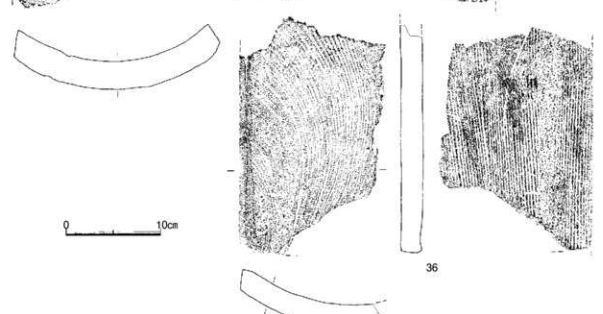


Fig.32　SK57出土遺物実測図4 (1/4)

23は破片の上端部に小さな突帯が巡り、21と24は沈圏線が巡る。

25～27は**素文磚**である。**28**は**軒丸瓦**で鴻臚館式（223a型式）。**29～32**は**軒平瓦**で鴻臚館式（635型式）。29・30は凸面に平行叩き、31は縄目叩きの痕が残る。いずれも叩きの後、瓦当を取り付ける。**33**は**面戸瓦**で、凸面は縄目叩き。**34**は**丸瓦**で、玉縁が付く。縄目叩きをスリ消し調整する。**35・36**は**平瓦**で、縄目叩きを施す。SK57出土瓦については、今回は整理報告することができなかったので、次年度以降の報告で欠を補いたい。

37～114は**木簡**等である。うち、墨痕が認められるものは、Fig.33に示した22点のうち55・58（物差し）を除く20点である。SK57出土の木簡については『鴻臚館跡Ⅰ』（第270集）で一部を報告したが、その後釈文についての疑義があったため鴻臚館跡調査研究指導委員会で釈文確定を行った（検討部会は笹山晴生、八木充、狩野久、佐藤信の4氏）。確定作業にあたって福岡市博物館の協力を得た。図の脇に確定した釈文、木簡学会の木簡型式、鴻臚館木簡番号を付した。新たに文字が判読でき、52は題籤軸木簡である可能性も指摘された。図のうち、61・80・90・108・110・113・114はSK69出土。

37（No.12）は「・京都郡庸米六斗」「・□[illegible]ヵ　□□□月」。186×21×8㎜。**38**（№48）は完存し「鹿脯乾」。186×24×7㎜。**39**（№11）は木簡中最長で、五文字分の墨痕があるが判読不能。228×26×7㎜。**40**（No.7）は「魚鮨廿九斤」。97×24×4㎜。**41**（No.8）は樹皮を残す。「・京都郡庸[illegible]ヵ六」「・□□□□□」。110×21×5㎜。**42**（No.63）は赤外線撮影により「鞍手郡米五」と判読。130×27×9㎜。**43**（No.26）は「・□[illegible]ヵ□米□斗」で、裏に四文字分の墨痕があるが判読不能。134×18×3㎜。**44**（No.25）は「發綱最上」。98×24×7㎜。**45**（№1）は「肥後國天草郡志記里□」。155×31×5㎜。**46**（No.62）は頭部残欠で「高□」。51×26×6㎜。**47**（No.23）は縦に3片に割れ2片が残る。「庇羅郷伊支須一斗」に釈文が変わった。156×17×4㎜。**48**（№38・55）は2点が接合し「賛伎國三木郡干□六斗」。213×21×4㎜。**49**（No.42）は9文字分程度の墨痕が認められるが判読不能。209×16×4㎜。**50**（No.64）は表裏に6文字分と7文字分の墨痕があるが判読不能。154×29×7㎜。**51**（No.24）は文字の一部が削られており、「・目大夫所十四隻□□□」「・□各十隻」。表裏で別筆の可能性がある。152×20×5㎜。**52**（No.69）は題籤軸木簡か。図の面に「・□[illegible]ヵ□」、裏面に「・[illegible]ヵ□□□」の墨痕がある。59×17×6㎜。**53**（No.70）は再加工され細い。「二物大虫」。73×11×4㎜。**54**（No.66）も再加工されており、「□□五斗二升五十人別日二合」。181×12×9㎜。**56**（No.9）は3文字と2文字の墨痕が各々の面にあるが判読不能。152×24×4㎜。**57**（No.69）は削屑で「□天寒□□□」。146×11㎜。

55（№65）は墨痕が認められないため木簡から除外。**58**は**物差し**の残欠とみられ、目盛とみられる細線の墨痕が3ヶ所にあり、間隔は3.1㎝と3.2㎝でバラつく。**59**（№4）は墨痕が認められない。147×19×3㎜。**105**（№15）は竹簡で、もう1例ある。墨痕は認められず、節がある。193×17×4㎜。

115～135は**籌木**である。棒状をなすもので占められる。丁寧に長方形に整形したもの（115～127）と、枝状の自然木の表面を面取りしたもの（128～135）の2種類がある。前者は木簡等を割った転用品と思われる。

136は**刀子の柄**である。保存処理の影響で曲がっている。**137**はシャベルの先端のような形状をなす**木製品**で、基部を窪ませ、窪みの両端に先端に向けた穿孔を施す。円柱等に紐等で固定して用いた道具であろうか。**138**は**SK69**、**139・140**は**SK70**の出土遺物の項でそれぞれ説明している。

遺構の上層に堆積した第1層には、炭、炭化材、焼土、炉壁等が含まれ、窪みに廃棄物を投げ入れた状況を示している。同様の状況は北館のトイレ遺構でもみられ、トイレ廃止後もかなり長期にわたり窪みのまま放置されていた状況が想定されている。9世紀代の遺物の存在は、窪みが完全に埋められた時期を示すものと考えられる。

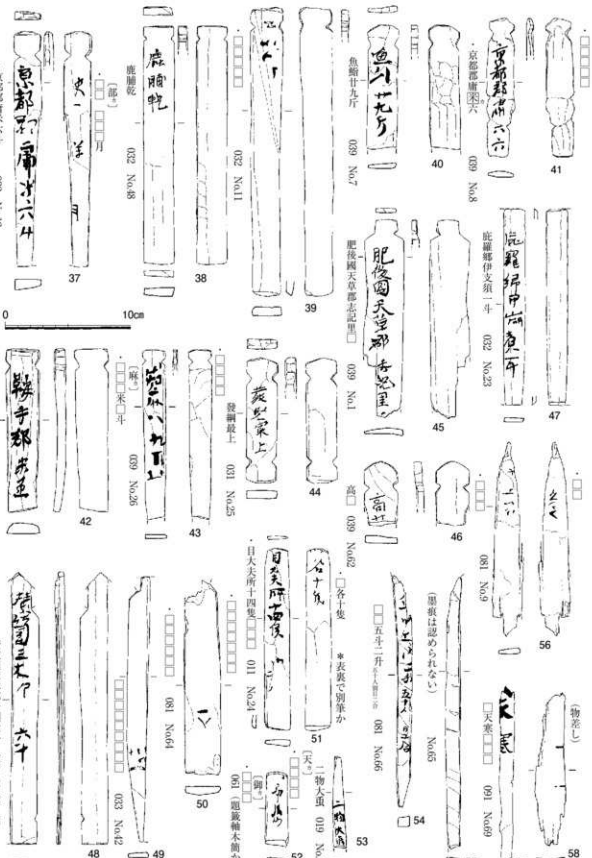


Fig.33　SK57出土遺物実測図5 (1/3)

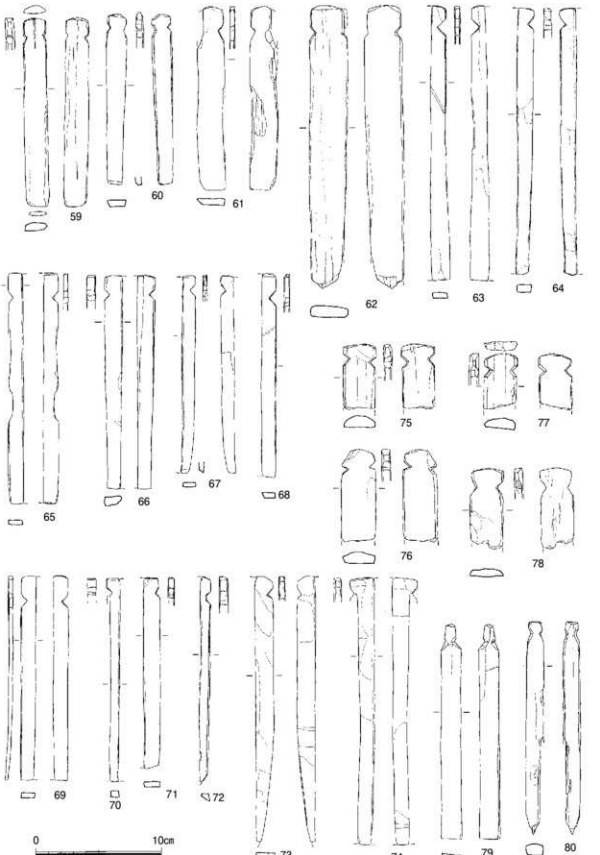


Fig.34　SK57出土遺物実測図6 (1/3) (61・80はSK69出土)

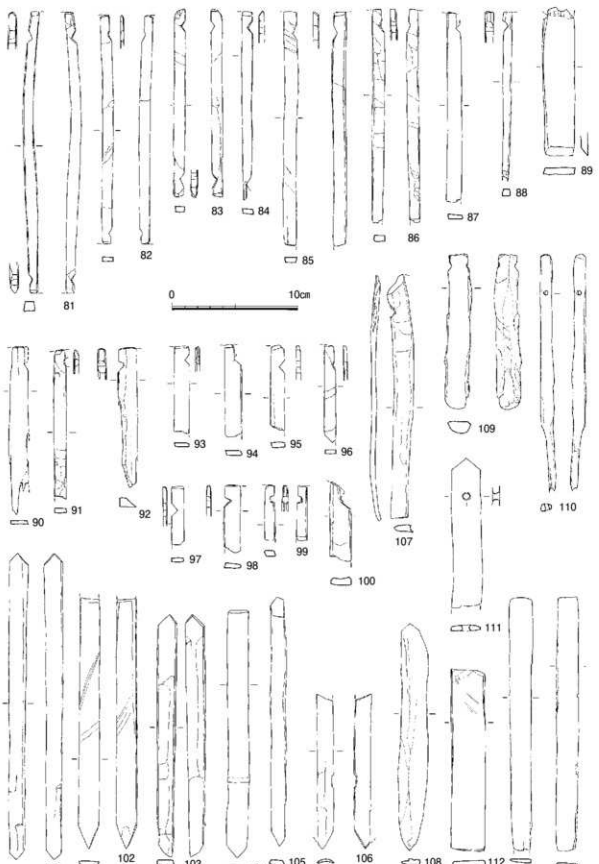


Fig.35　SK57出土遺物実測図7 (1/3) (90・108・110・113・114はSK69出土)

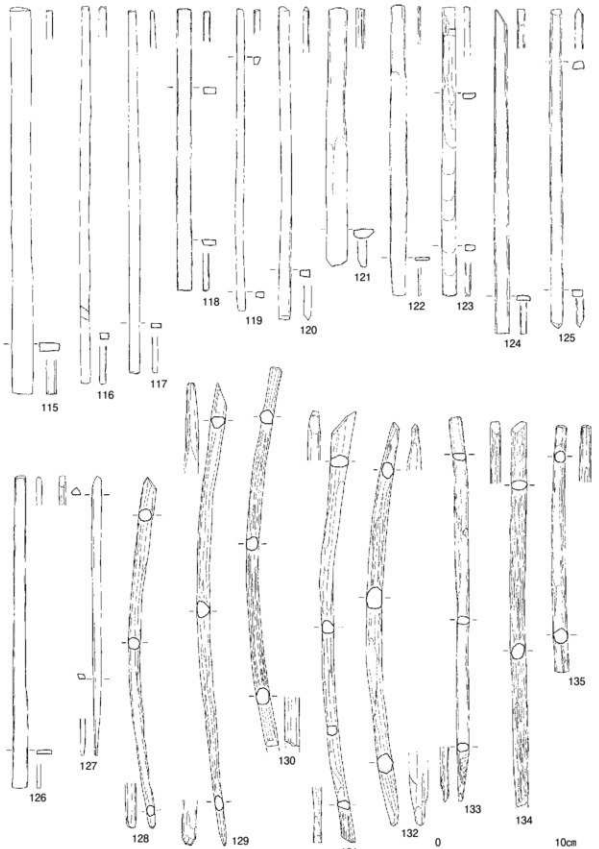


Fig.36　SK57出土遺物実測図8 (1/3)

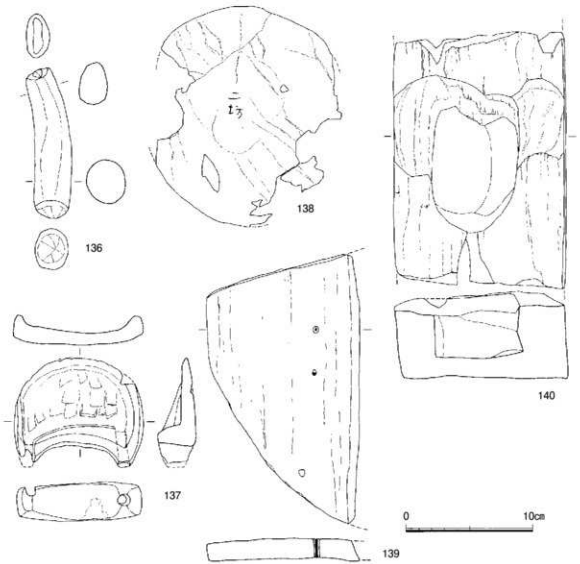


Fig.37　SK57出土遺物実測図9（1/3）（138はSK69、139・140はSK70出土）

トイレ遺構ＳＫ６９　Fig.38、PL.10

３基のうち、最も北に位置する。南側のSK70とは1.8ｍ離れる。近代の削平により上部が破壊され、西壁のみが遺存している。隅丸方形プランで、東西1.4ｍ、南北1.3ｍ、深さ４ｍ。底面は楕円形を呈し、東西0.6ｍ、南北0.5ｍで、平坦である。壁は83～85°の角度で立つ。SK57と同様、風化頁岩岩盤を掘り抜き砂層まで達する。井戸様をなすが湧水の痕跡は認められない。

土層の堆積状況はSK57に類似しており、下層から同様に多量の木製品が出土した。木製品には木簡状の板材が非常に多いが、墨痕が認められるものはない。また、上層から皮膜のみが残った漆器盤が出土した。「二坊」と刻みがある。

ＳＫ６９出土遺物　Fig.34・35・37・39・40

須恵器、土師器、中国陶磁器（邢窯系白磁、越州窯系青磁）、朝鮮半島産陶器、瓦、漆器、多量の木製品等が出土した。

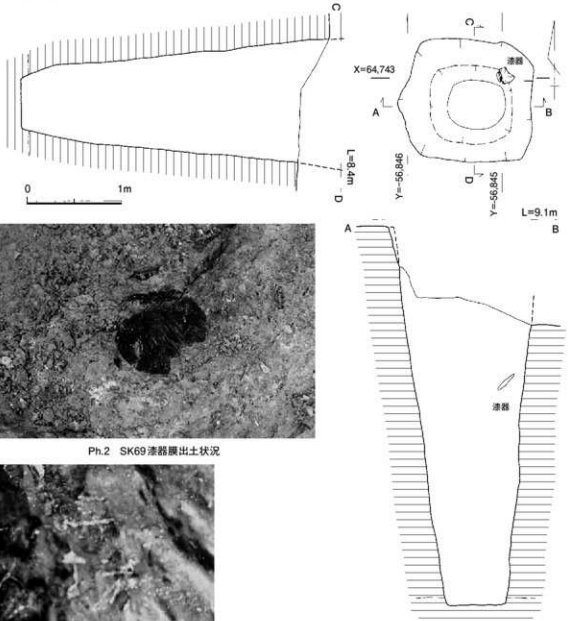
１～３は須恵器蓋。１は器高が高く、外面は底部ヘラ切離しのまま未調整。口径14.5cm。２は口径17.4cm。３は鈕が付き、天井部外面ヘラ切り後、回転ヘラ削り。口径19.3cm、器高3.6cm。**４･５は須恵器坏**で、

4は高台が付き、外底ヘラ切りの後、回転ヘラ削り。口径16.3cm、器高6.3cm。

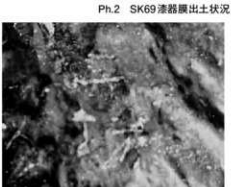
6・7は**土師器蓋**で鍔が付く。6は天井部外面回転ヘラ削り。7は内外面に丁寧な回転ヘラミガキを施す。口径21.8cm、器高3.0cm。**8**は**土師器皿**で、外底から体部下半に回転ヘラ削り。口径23.8cm、器高3.6cm。**9・10**は**土師器坏**で口縁等に油煙が付着する。9は底部ヘラ切で、体部との境は不明瞭。口径12.4cm、器高3.4cm。10は口径12.8cm。**11**は**黒色土器A類小形壺**で、内面のみヘラミガキを施す。

12・13は**邢窯系白磁碗**で、13は釉下に白化粧を施す。**14～16**は**越州窯系青磁**である。**14**は蛇の目高台の**碗**で全釉。**15**は**平底碗**で、体外面下半から外底は露胎で、内底に白土目が残る。**16**は**福建懐安窯褐彩水注**である。

17～22は**朝鮮半島産陶器**である。**17**は**壺**で、統一新羅時代のものと思われる。頸部に沈圏線が巡る。口径9.6cm。**18～22**は**統一新羅～高麗時代の壺**、ないしは**甕**であろう。18･19は外面に格子目叩き、22は平行叩きを施す。



Ph.2　SK69漆器膜出土状況



Ph.3 「二坊」

Fig.38　トイレ遺構 SK69実測図 (1/40)

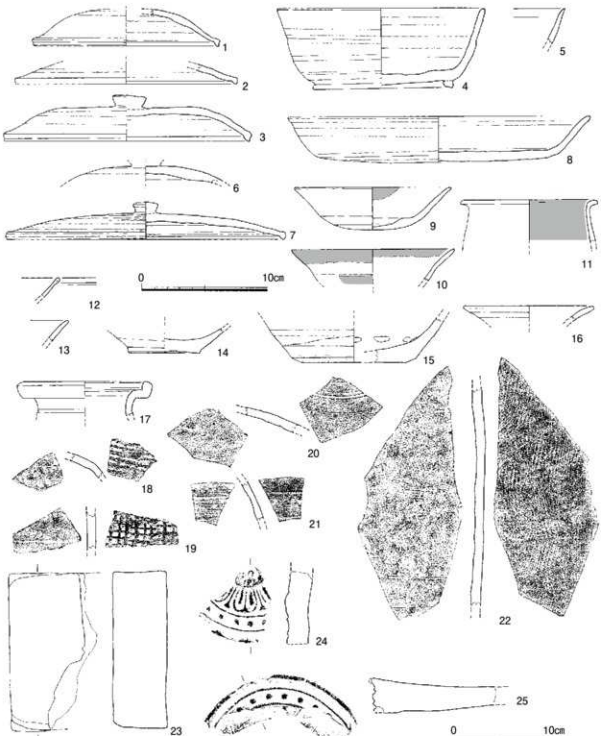


Fig.39　SK69出土遺物実測図1（23～25は1/4、他は1/3）

23は**磚**である。**24・25**は**軒丸瓦**で、24は鴻臚館式（223型式）であろう。**26・27**は**平瓦**で、凸面に縄目叩きを施す。

この他、Fig.34・35に示した木簡のうち**61・80・90・108・110・113・114**、及びFig.37の**138**がSK69の出土である。**138**は**漆の被膜**のみが残存したもので、中央に「**二坊**」と文字を刻む。

SK57同様、SK69も上層に炉壁等の廃棄が認められ、やや時期の下る遺物が含まれている。

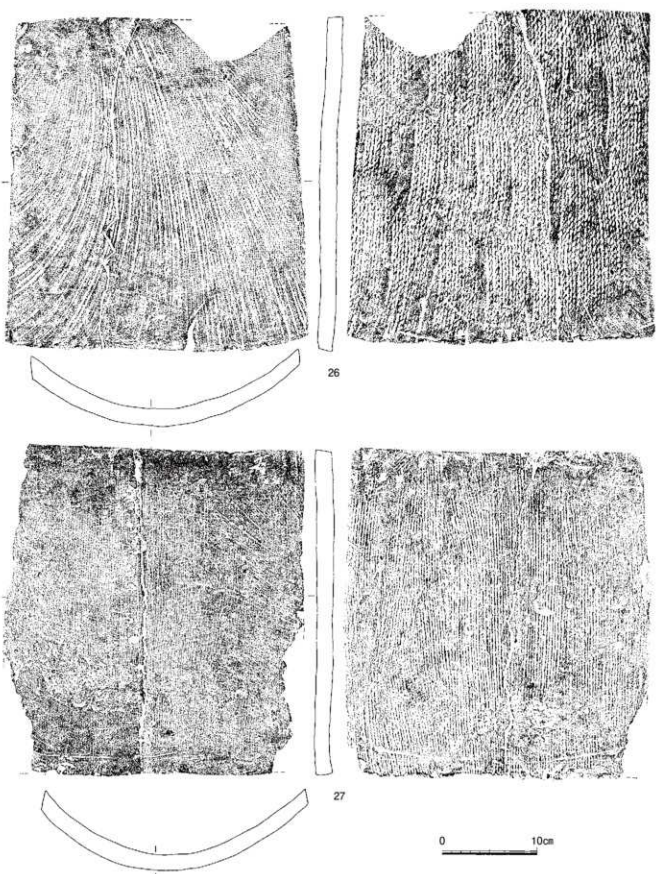


Fig.40　SK69出土遺物実測図2 (1/4)

トイレ遺構ＳＫ７０　Fig.41

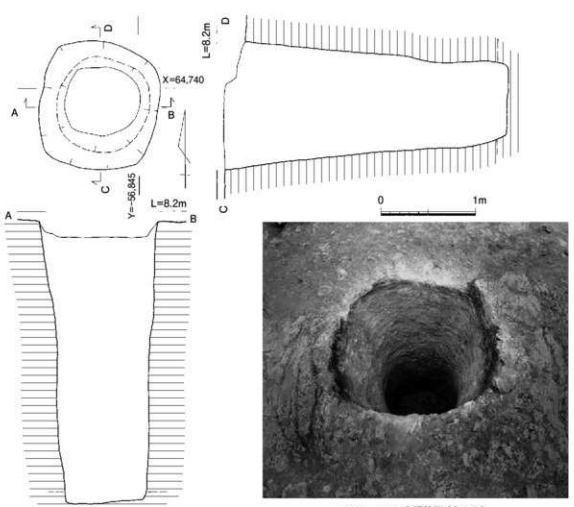
3基の中央に位置する。円形に近い隅丸方形プランで、東西1.25ｍ、南北1.35ｍを測る。深さ3ｍだが、本来は4ｍ前後の深さがあったと考えられる。底面は楕円形の平坦面で、東西0.8ｍ、南北0.73ｍである。壁は84～87°の傾斜をなす。他と同様、頁岩岩盤下の砂層まで達しているが、湧水の痕跡はない。土層堆積状況もSK57・69と同様であり、下層から多量の木製品が出土している。

ＳＫ７０出土遺物　Fig.37・42・43、PL.19

須恵器、土師器、朝鮮半島産陶器、瓦、木製品が出土した。土器類はいずれも上層出土である。

1～3は須恵器蓋で、口縁端部が小さな三角形をなす。1・2は天井部外面回転ヘラ削りで、1は口径15.0cm。**4は須恵器坏**で口径15.6cm。**5は須恵器双耳壺**で肩に縦耳が付く。外底に当て具痕が残る。胴部外面に格子目叩きの後、肩部以下に回転ヘラ削りを加える。内面は当て具痕が残り、内底は指押えの後、ナデ調整を加える。底径16.4cm。全体に焼成が甘く、かなり軟質である。

6～8は土師器坏で、8は高台が付く。6・7は底部ヘラ切りで、体部との境は明瞭。口径と器高は6が13.2cm・3.9cm、7が14.2cm・4.1cm。**9は黒色土器Ａ類高台付坏**で、内面に丁寧なヘラミガキ、外面に回転ヘラ削りを施し、外底にはヘラ切り痕が残る。口径14.8cm、器高5.1cm。**10・11は土師器甕**で、体部と口縁の境は明瞭。体外面と口縁内面を刷毛目、内面をヘラ削り。**12の土師器甕**は『鴻臚館跡Ⅰ』で誤ってSK69出土とした。下膨れ状を呈す。体部外面刷毛目、内面ヘラ削り。外面に煤が付着する。



Ph.4　SK70完掘状況（南から）

Fig.41　トイレ遺構SK70実測図（1/40）

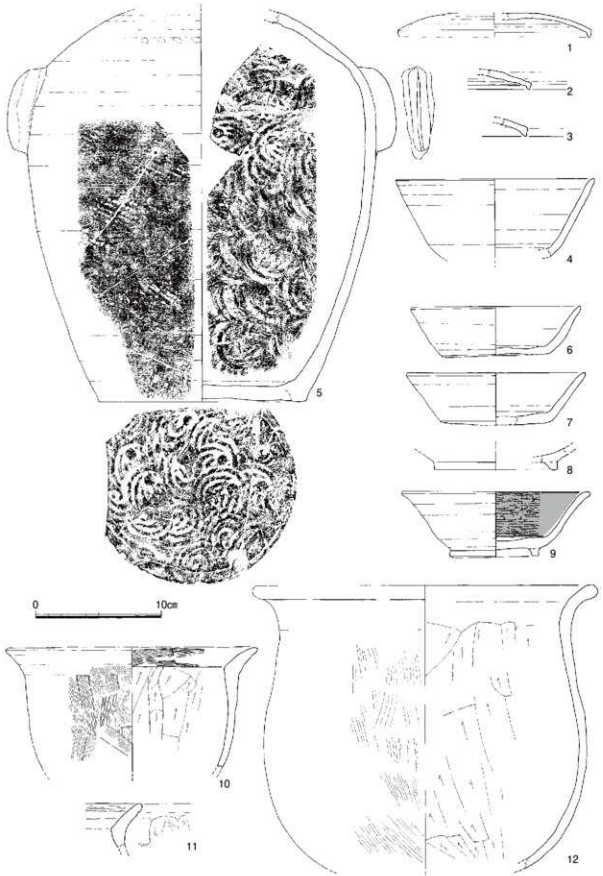


Fig.42　SK70出土遺物実測図1 (1/3)

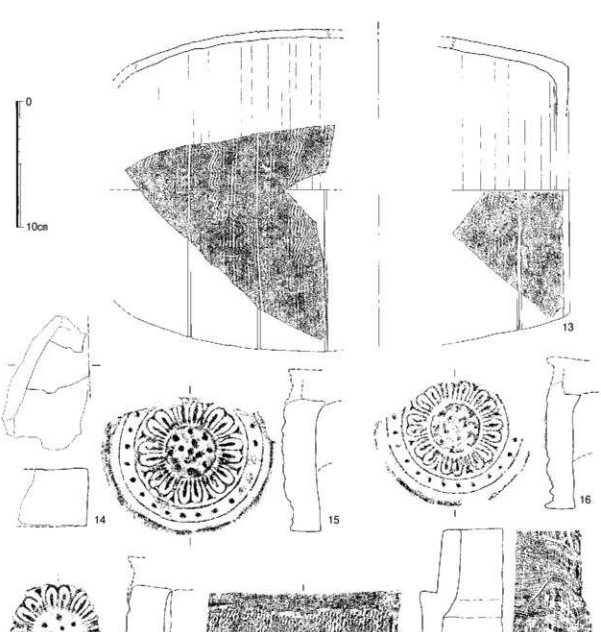


Fig.43　SK70出土遺物実測図２(13は1/3、他は1/4)

13は**統一新羅時代陶器**の**樽形瓶**か。接合しないが、同一個体とみられる２破片がある。外面に平行叩き後、ナデ調整を加え、沈線と波状文を施す。

14は**磚**である。15～17は鴻臚館式**軒丸瓦**(223a型式)。18は**丸瓦**で玉縁が付き、縄目叩き。

この他、木製品はFig37の139・140がある。139は板状の**木製品**で、３ヶ所の小さな釘孔があり、孔中に木製の釘が残る。用途不明。140は**建築材**か。中央に楕円形の窪みがあるが貫通しない。

SK57同様、SK70も上層の窪みに炉壁等を廃棄した痕跡があり、やや時期の下る遺物が含まれる。

4．第Ⅲ期の遺構と出土遺物　Fig.44

南館部分では、3棟の大型の礎石建物を確認した。東西に並行する南北棟建物 **SB31・32・330**、及び東西棟建物 **SB50** である。SB32と330は馬道を挟んで棟続きの建物である。他に、礎石据付け穴とみられる **SK1076** がある。

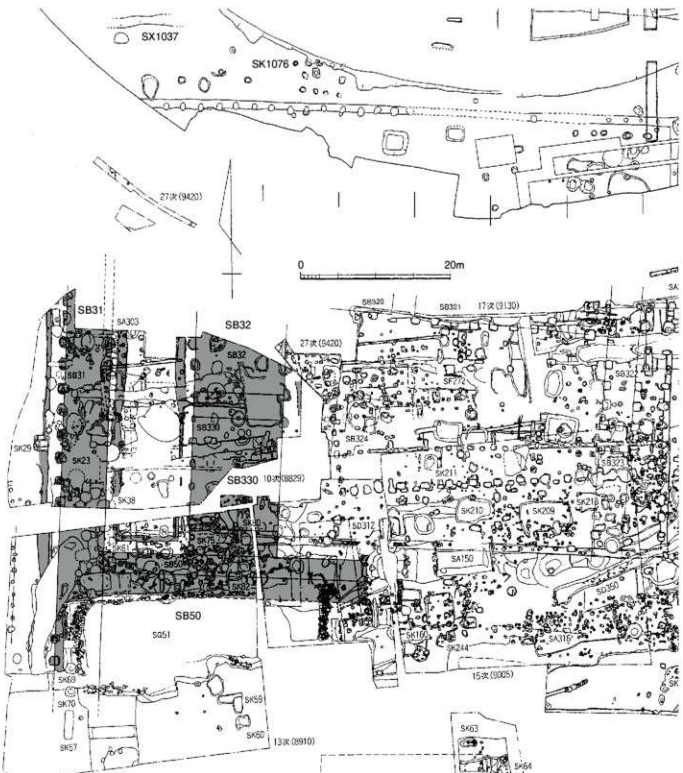


Fig.44　南館部分の第Ⅲ期建物配置図（1/500）

1）礎石建物

礎石建物ＳＢ３１　Fig.45～47、PL.11・13

第4・5次調査（8829・8910）で確認した、最も西に位置する礎石建物である。

南北棟で、乱石積みの基壇を持ち、両側に雨落ち溝がある。基壇幅は9m（30尺）で、梁行2間（6m＝20尺）、桁行16間以上（48m以上）を確認した。北側は調査区外に伸びていき、南端部分は近世～近代に破壊を受けて消滅しており、全長は不明である。昭和26年の第1次調査（図版扉の写真）において、礎石列が確認されていた遺構に相当するが、写真では少なくとも5個が残るように見える列状の礎石が、今回調査時までに1個に減じていた。ただし、この礎石列に該当すると考えられるSB31の西側柱列では、礎石自体は失われているものの、その下部の据付け穴は良好に残っていた。一方の東側柱列については、既に古代～中世に土坑等に破壊されてしまっており、礎石が一つ確認できたものの、他の据付け穴の残りは悪い。礎石据付け穴は、径1.4m前後の隅丸方形～円形プランをなし、内部に花崗岩・玄武岩・砂岩の根固め石が良く残るものが多い。柱列間の2ヶ所に束柱があり、少なくとも3部屋以上に間仕切りされていたと推定される。間仕切られた部分の中央の柱間が3.3mと広く、この東に方形の石列が基壇から張り出す部分があり、瓦敷きであることから出入り口の可能性があるが、石列の逆の面が揃うなど不自然な点もあり確定できない。基壇の石積みには花崗岩・砂岩を用いている。石積みは東辺の5カ所に数個ずつが残るのみだが、礎石の高さからみて2段に積まれていたものと想定される。基壇の東西両側には雨落ち溝があり、西溝は幅60～90cm、深さ10cm、東溝は幅1.2m、深さは基壇石積み天端から30cmを測る。ともに断面はU字形をなす。また、東溝はSB50と接合する部分で東にL字形に折れるが、折れた南の延長部分には幅10cmの狭い排水溝が伸びている（SB50の項参照）。雨落ち溝には瓦が多量に落ち込んでいる。主軸方位は、座標北から1°30′東に偏する。

ＳＢ３１出土遺物　Fig.48～52、PL.20

SB31に伴う礎石据付け穴と雨落ち溝から、コンテナ56箱の遺物が出土した。土師器（ヘラ切り・糸切り）、須恵器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器、瓦、明代竜泉窯系青磁・青花、近世の土師器・陶磁器少量がある。

1～23は須恵器である。**1～7は蓋**で、2は鍔が付く。4が天井部に回転ヘラ削りを加える以外は、ヘラ切り離しのまま未調整である。**8～15は坏身**で、10～13は高台付。外底はヘラ切り離しのまま未調整である。法量（口径－器高）は、8が13.6cm-4.0cm、9が13.0cm-4.0cm、10が17.6cm-5.5cm、11が16.0cm-5.4cmである。**16～20は壷、21は鉢、22は脚、23は盤口壷**とみられるが、小片で不明確。

24～46は土師器である。**24・25は蓋**で、25は鍔が付く。**26～34は坏**で、28～34は高台が付く。26・27は底部ヘラ切りで、体部との境は明瞭である。26は口径13.4cm、器高4.0cm。27は口径12.6cm、器高3.3cm。28は高台が外底のやや内寄りに低く付き、体部が直線的に開く器形で、8世紀代の須恵器の模倣品であろう。**35は椀**で、高台が撥形に開く。**36・37は皿**で、底部ヘラ切り。36は口径15.4cm、器高2.1cm、37は口径17.0cm、器高2.0cm。**38～45は甕**で、いずれも体部と口縁の境は明瞭である。**46は甑**の把手である。

47～84は中国産陶磁器である。**47～49は邢窯系白磁碗**で、48は釉下に白化粧を施す。49は蛇の目高台で、高台から外底にかけては露胎である。**50～55は北宋早期景徳鎮窯白磁**である。**50～54は碗**で、高台付近まで施釉する。53・54は施釉時に使用した鉗子痕が高台脇に残る。**55は平底皿**で、全面施釉後、外底の釉を掻き取る。**56～83は越州窯系青磁**で、56～79は浙江省産である。**56～69は碗、70～72は皿、73～75は平底小碗、76は小壷、77～79は水注**で、全て全釉である。60・77～79は片切り彫りによる施文があり、北宋早期の製品である。77は肩部と頸部の境に小さな縦耳が付く。78はSK33

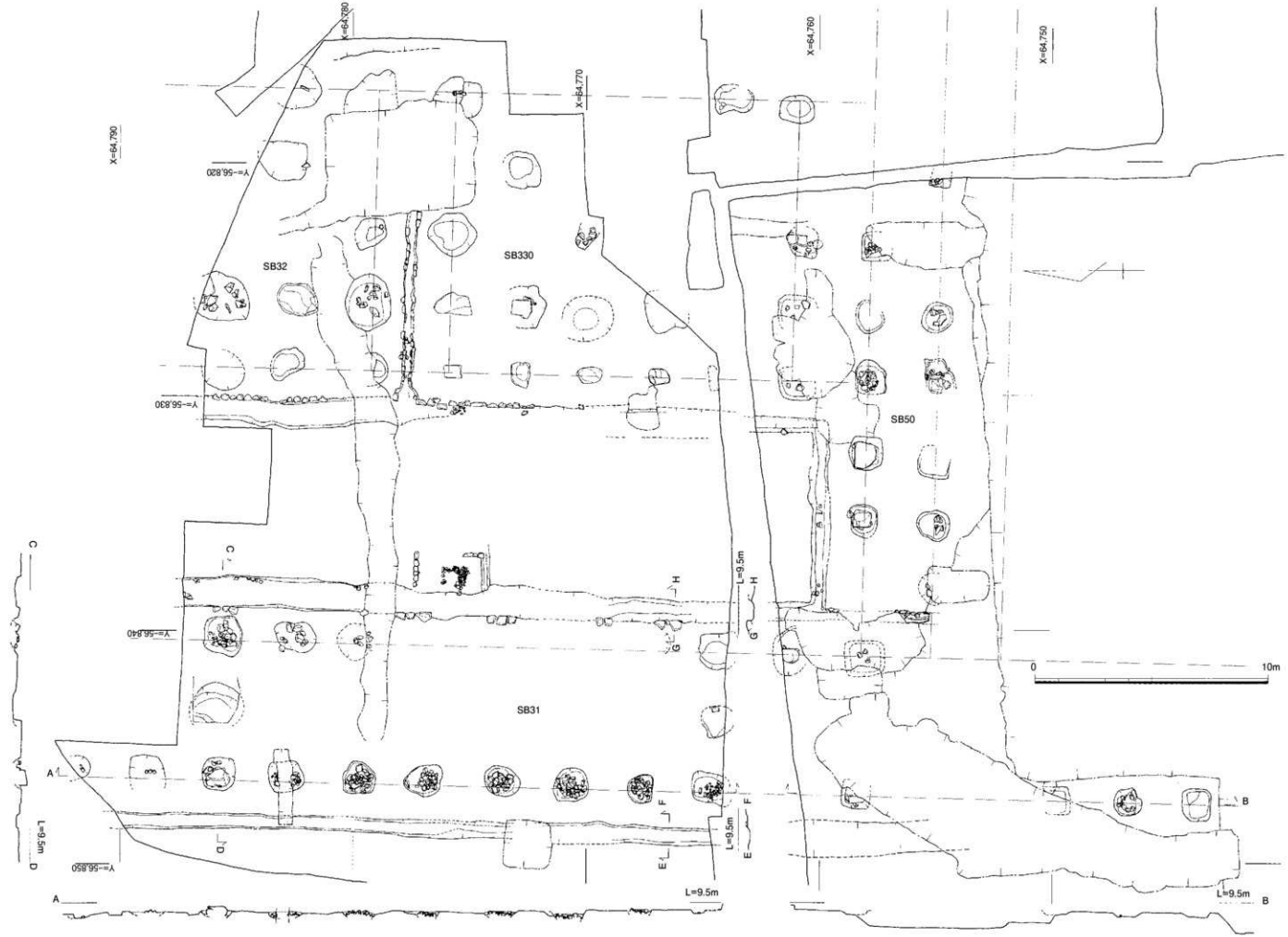


Fig.45　礎石建物 SB31・32・330・50 平面図、SB31 断面図 (1/150)

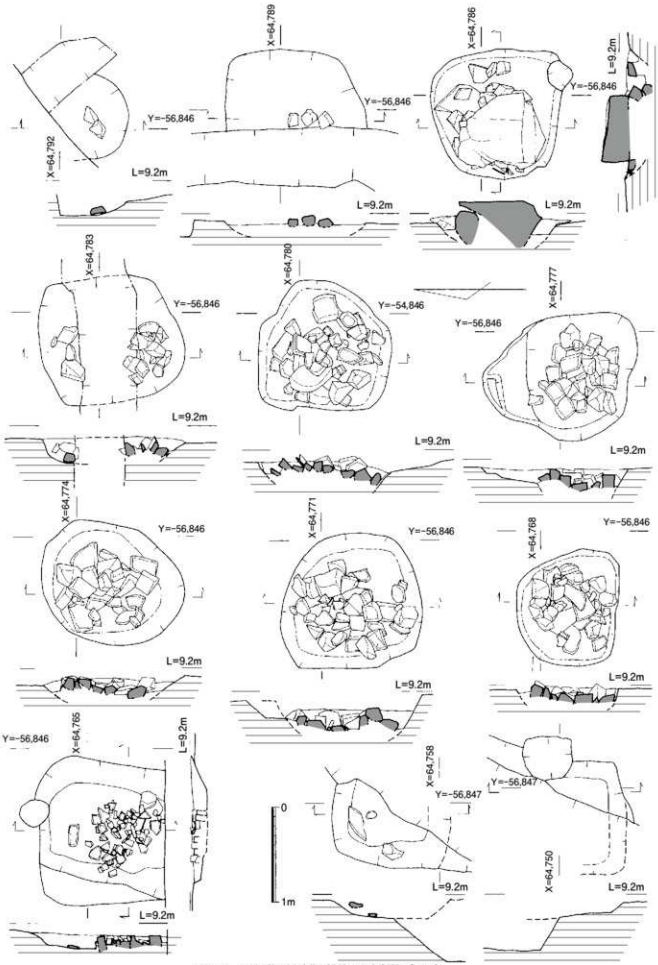


Fig.46　SB31 礎石及び礎石据付け穴実測図 1 (1/40)

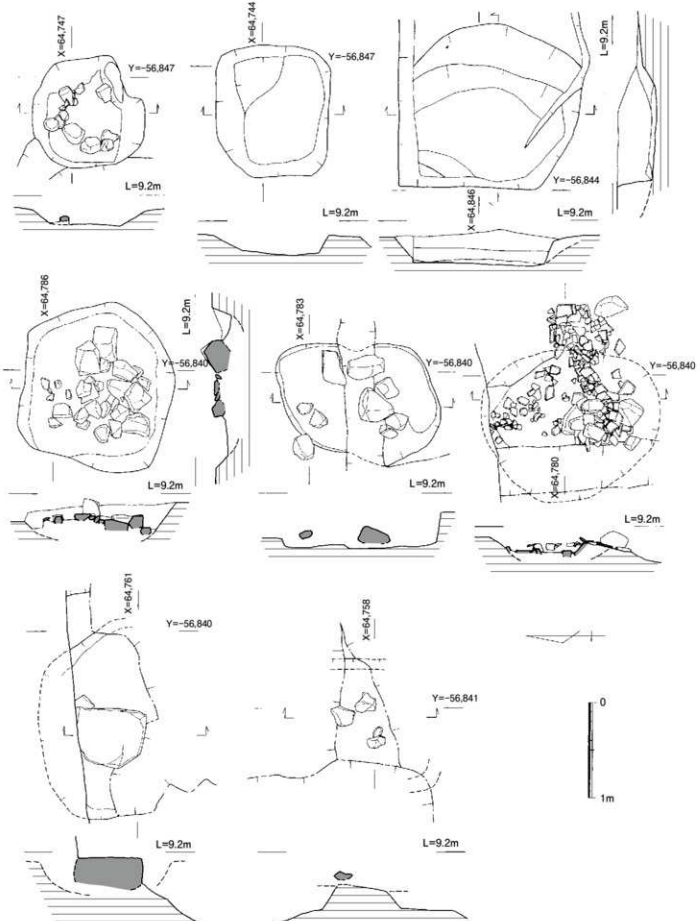


Fig.47　SB31 礎石及び礎石据付け穴実測図 2 (1/40)

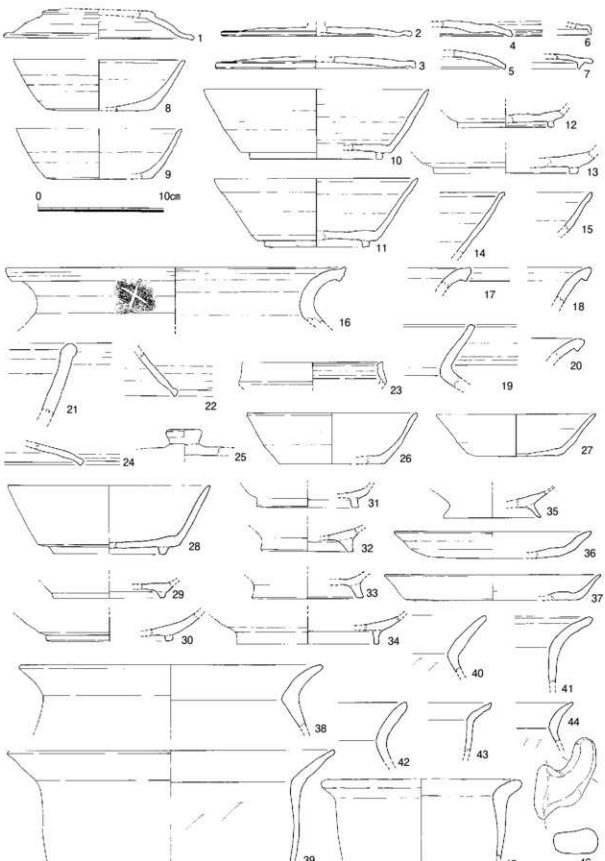


Fig.48　SB31 出土遺物実測図 1 (1/3)

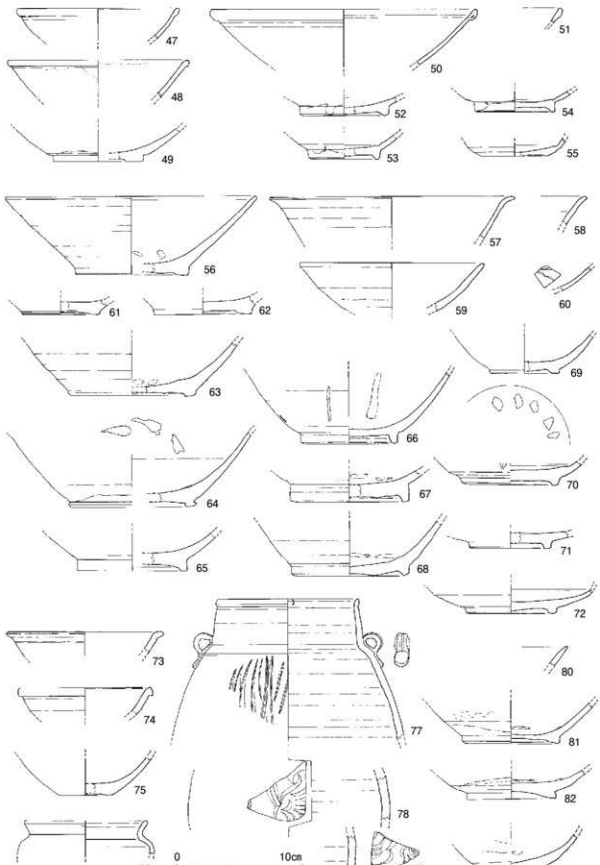


Fig.49　SB31出土遺物実測図2 (1/3)

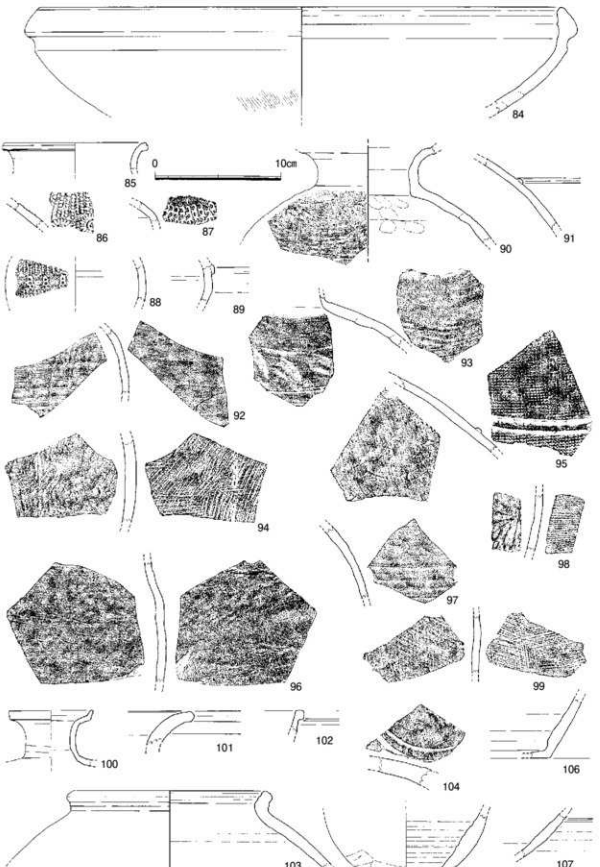


Fig.50　SB31出土遺物実測図3 (1/3)

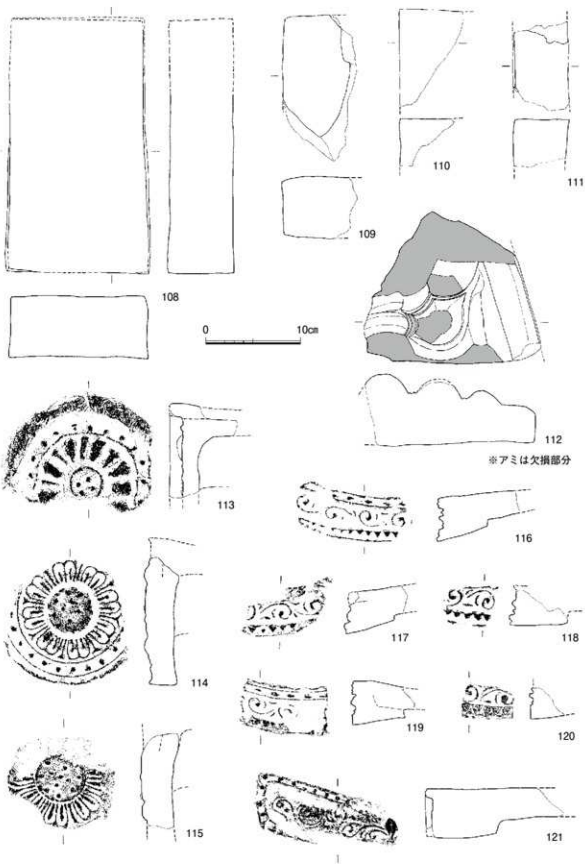


Fig.51　SB31 出土遺物実測図 4 (1/4)

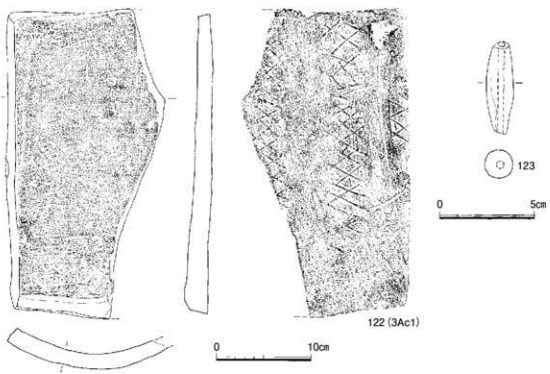


Fig.52　SB31出土遺物実測図5 (122は1/4、123は1/2)

出土品であるが79と同一個体と考えられ、接合しないが合わせて図示した。**81～83**は福建省**懐安窯**の**碗**で、体外面下半は露胎で釉下に白化粧を施す。**84**は福建省**洪塘窯**の**無釉陶器捏ね鉢**である。

85～107は**朝鮮半島産**とみられる**陶器**である。**85～89**は**統一新羅時代**の**壺**で、86～88の外面には印花文を施す。**90～107**は**統一新羅～高麗時代**のものとみられる**壺**、または**甕**であるが、100～107については国産須恵器の可能性もある。90・93は胴部外面平行叩き、94・98・99は細かい平行叩き、95は格子目叩きを施す。内面は当て具痕をナデ消すものが多い。89・91・95は外面に小さい突帯を貼り付け、104は沈線を弧状に巡らす。

108～111は**塼文磚**で、108は推定長27.0cm、幅15.0cm、厚さ7.0cm。**112**は**鬼面文鬼瓦**で、鼻と目の一部が残る。**113～115**は**軒丸瓦**で、114・115は鴻臚館式（223型式）。**116～121**は**軒平瓦**で、116～120は鴻臚館式（635型式）、121は662Ab型式か。**122**は**平瓦**で、粗い斜格子目叩きである。側面に截面と押し割りによる破面があり、桶作りであろう。**123**は**土錘**である。長さ4.9cm、最大径1.4cm、重さ8.3g。

以上の遺物のうち1・22・23・61・62・67・70・74・115・117は雨落ち溝上層の整地層、4・10・17・38・41・42・46・57・64・100・121は礎石据付け穴、他は全て東西の雨落ち溝から出土した。

SB31は昭和26年までは多数の礎石が残っていたが、その後の工事によって礎石が抜かれており、その際に中世や近世の遺物が混入した可能性がある。雨落ち溝出土の国産土器は概ね8世紀後半～9世紀中頃までに収まり、中国産陶磁器の主体もこの時期にあることから、これをSB31の所属時期とする。また、SB31は多数の土坑に切られており、土坑の出土遺物の検討によって、SB31の下限時期を知りうる可能性があるが、これについては次年度報告の課題としておきたい。

礎石建物ＳＢ３２・３３０　Fig.53～56、PL.11・13

第4・5次調査（8829・8910）で確認した。SB31の東側に9ｍ（30尺）離れて、これと並列する南北棟の大型礎石建物である。北側は調査区外に更に伸展していき、南は後述の SB50に連接するが、SB50を越えて更に南へ伸びるか否かは近世池に破壊されているため不明である。

乱石積み基壇を持ち、基壇幅は15ｍ（50尺）を測る。基壇の石積みには花崗岩・砂岩を使用しており、西辺の数カ所に一段の石列が残るが、他は残りが悪い。SB31と比べて礎石上面のレベルが15cmほど低いため、基壇の石積みは1段であった可能性がある。基壇の東西両側に雨落ち溝を持つが、東側溝は残りが悪く明瞭でない。西側溝は幅1.0ｍで、深さは石積み天端から約30cmを測り、断面は浅いU字形をなす。西側溝は SB50との接点部分で西に曲がって SB50の雨落ち溝となり、さらに SB31の東側溝と連結して「コ」字形の平面形をなす。溝内には瓦が多量に存在し、僅かに須恵器や中国陶磁器、新羅陶器が混在する。

SB32・330は、身舎が2間で、東西に廂が付く建物である。梁行4間（12.0ｍ＝40尺）、桁行9間以上（27ｍ以上）を確認した。礎石の残りが良く、7個が現存していた。礎石には花崗岩と玄武岩の自然石が利用されており、SB31の礎石と比べて上面のレベルが約15cm低い。礎石が抜かれた据付け穴では、下部の根固め石まで抜かれたものが多い。据付け穴の掘り方は、ほぼ径1.5ｍ前後の円形プランをなすが、企画性に乏しい印象を受ける。束柱を相対する2ヶ所に検出し、その間は柱間が3.3ｍと他（3ｍ等間）よりやや開いており、この部分に建物を横断する東西方向の排水溝が造られ、馬道となっている（Fig.56）。排水溝は礎石の高さからみて蓋石がなく開渠であった可能性が強い。排水溝の下層には瓦を立てた別の溝が確認でき、石組み溝以前の古い溝と考えられる。馬道から南を SB330として区別しており、仮に SB50に接する部分で建物が収束するとすれば、SB330は桁行5間となる。主軸方位は、SB31と等しく、座標北から1°30′東に偏する。

この他、SB330では追加調査を行っている。東庇側柱の北端にあたる位置では、径1.2ｍの礎石据付穴2基が重複して検出され、1基は SB330に伴うが、他の1基は別の礎石建物に伴うものとみられる。また、SB330の棟柱筋にあたる位置にも礎石据付け穴が検出でき、SB330が総柱の建物であった可能性もあるが、先の馬道排水溝下層の遺構や、重複する据付け穴の存在を考慮すると、SB330に先行する礎石建物に伴う遺構である可能性が考えられる。

ＳＢ３２出土遺物　Fig.57～60、PL.20

SB32に伴う礎石据付け穴と雨落ち溝・排水溝から出土した遺物は、コンテナ約52箱である。土師器（ヘラ切）、須恵器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯・長沙窯系青磁、緑釉、陶器）、朝鮮半島産陶器、瓦の他、明代竜泉窯系青磁、近世の土師器・陶磁器を少量含む。

1は**須恵器高台付坏**で、高台は細く高めである。**2～4**は**須恵器甕**で、外面に平行叩き、内面に粗いナデ調整を加える。

5は**土師器蓋**で、外面天井部はヘラ切離しのまま未調整である。**6～11**は**土師器坏**で、底部ヘラ切り離し。6・7は体部と底部の境が明瞭である。8は高台が付く。6は口径13.8cm、器高3.7cm。9～11は時期的にやや新しいタイプの坏で、体部と底部の境が丸味を帯び、口縁は緩く外反する。9は口径12.0cm、器高3.5cm、10は口径12.8cm、器高3.6cm。**12・13**は**土師器皿**で、底部ヘラ切り離し。12は口径11.6cm、器高1.3cm。13は口径15.6cm、器高1.6cmである。**14～17**は**高台付土師器皿**で、高台は細く高い。底部はヘラ切り離しである。14は口径14.2cm、皿部分の器高は1.1cmである。15は口径14.9cm、皿部分の器高3.3cmである。**18**は**土師器器台**である。口縁部が花弁状をなす。

19～74は**中国産陶磁器**である。

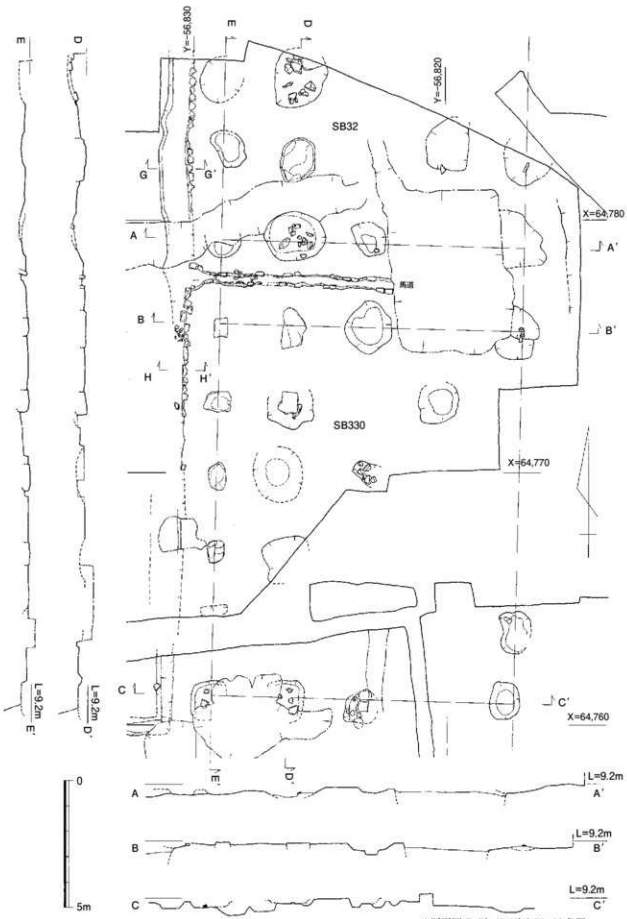


Fig.53　礎石建物 SB32・330 実測図 (1/150)

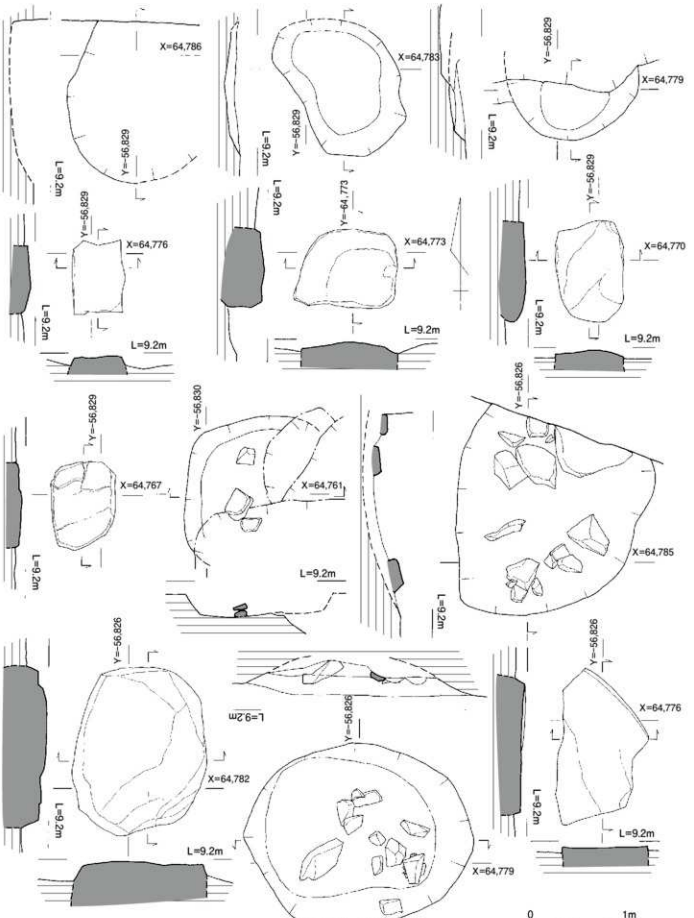


Fig.54　SB32・330礎石及び礎石掘付け穴実測図1 (1/40)

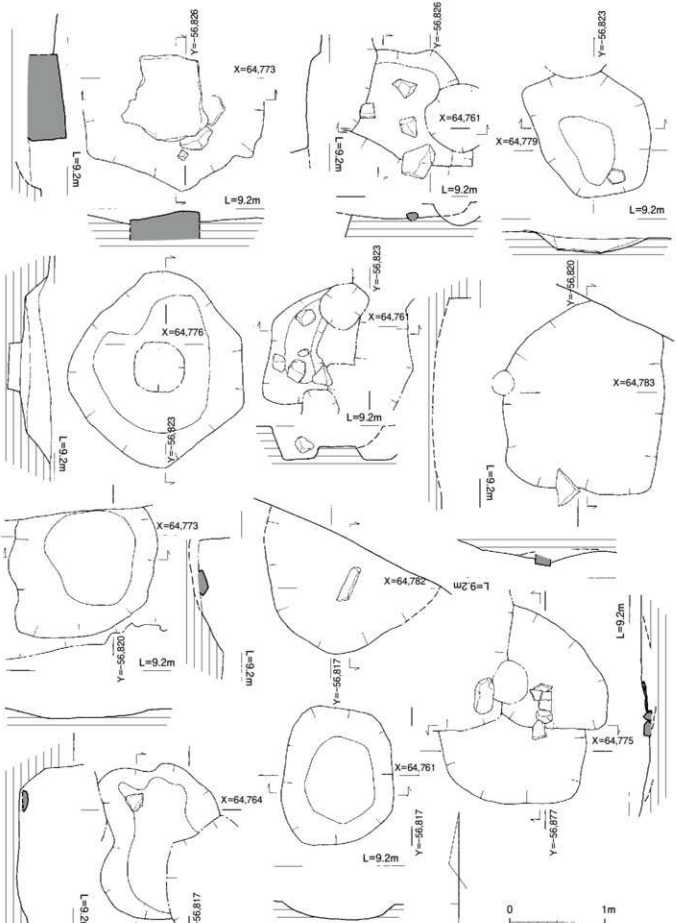


Fig.55　SB32・330礎石及び礎石据付け穴実測図2 (1/40)

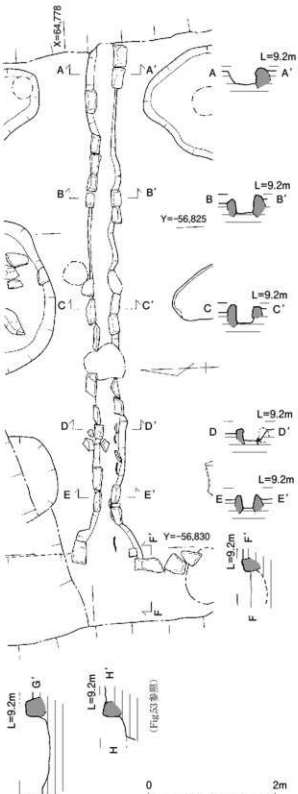


Fig.56　SB32・330馬道実測図（1/60）

19～45は**邢窯系白磁碗**で、19～35・41～44は小さな玉縁口縁と蛇の目高台を有する碗である。高台脇あたりまで施釉するもの（20・22・42）と、全面施釉後、畳付を手持ちヘラ削りにより釉剥ぎするもの（19・41・43・44）がある。36～40は僅かに内湾気味の直口縁碗で、37は釉下に白化粧を施す。45は低く太い角高台で、高台内まで施釉する。**46～51**は北宋早期**景徳鎮窯白磁碗**である。46～48は玉縁口縁、50は直口縁、51は腰折れの浅形で、49は輪花口縁の可能性がある。

52は**緑釉皿**である。内面には型押しにより陽印刻花文を施す。華北晩唐の製品であろう。

53～71は**越州窯系青磁**である。53～66は浙江省産である。**53～59**は**碗**である。57・58は高台内まで全面施釉、59は体外面下半を露胎とする。**60・61**は**小碗**で、いずれも体外面下半以下は露胎である。61は平底で、口縁上面に目痕が残る。**62**は**合子の蓋**である。**63**は天井部に透孔があり、北宋前半頃の**香炉の蓋**であろう。**64**は広口の**四耳壺**で、**65**は**四耳壺**または**双耳壺**。**66**は**水注**の口縁部である。**67～70**は福建省**懐安窯の碗**である。体外面下半は露胎で、釉下には白化粧を施す。69は外底を再度削り、蛇の目高台風に仕上げる。**71**は**蓋**とみられ、天井部内面は露胎となる。外面に2条の沈線を渦巻状に巡らせる。福建産の可能性があるが不明確。**72・73**は福建省**洪塘窯の陶器**で、72は**無釉捏鉢**、73は**壺**で暗緑黄色の釉をかける。**74**は**明代竜泉窯系青磁碗**で、高台内途中まで施釉し、内底に印花文を施す。明らかな混入品である。

75～81は朝鮮半島産の**統一新羅～高麗時代の陶器の壺**または**甕**である。

82～84は**軒丸瓦**である。82・83は鴻臚館式（223型式）か。**85～88**は**軒平瓦**で、85・86・88は663型式、87は662型式である。**89～91**は**丸瓦**である。89は格子目叩き、90・91は平行叩きを施す。

以上の出土遺物は、時期的には国産土器は8C後半～11C初頭、中国産陶磁器は晩唐（8世紀後半～9世紀代）が主体を占めるが北宋早期の白磁・青磁も含む。出土した遺構は、12・49・71・79が馬道排水溝、

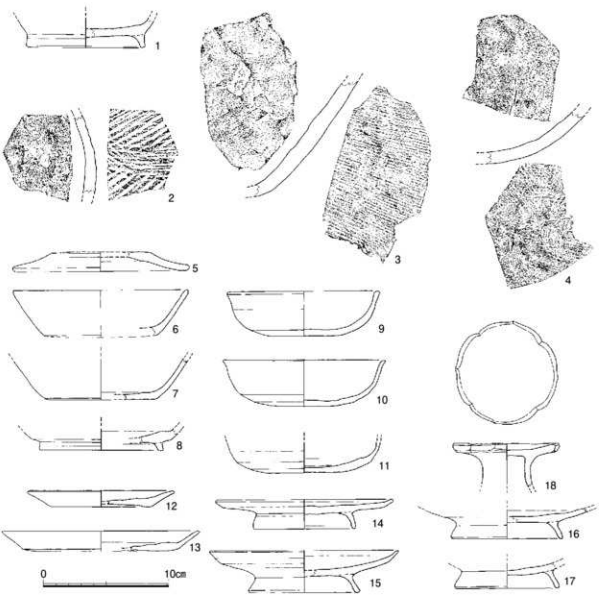


Fig.57　SB32出土遺物実測図1(1/3)

21・41・67・82が雨落ち溝、46・47・83・84・86・87・89・90・91が整地層で、他は全て礎石が抜かれた据付け穴から出土したが、礎石の根固め石まで抜き取ったものが多いことから、抜き取った際に中～近世遺物が混入した可能性がある。また、小片遺物については、多数切り込む近世の小柱穴等からの混入もあると考えられる。

ＳＢ３３０出土遺物　Fig.61・62、PL.20

柱穴や雨落ち溝から遺物が少量出土した。土師器（坏、甕）、須恵器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯・長沙窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器、瓦、近世の土師器、陶磁器がある。

1・2は須恵器蓋である。1は小形広口壺の蓋であろうか。**3・4は須恵器坏身**で、外底はヘラ切り離しのまま未調整。4は低い高台を貼付する。**5は須恵器皿**で、外底はヘラ切り離しのまま未調整である。口径14.2cm、器高1.6cm。

6～23は中国産陶磁器である。**6は邢窯系白磁皿**である。**7～19は越州窯系青磁**。7～16は浙江省産である。**7～15は碗**で、14・15は体外面下半まで施釉し、他は全面に施釉する。**16は双耳壺**である。

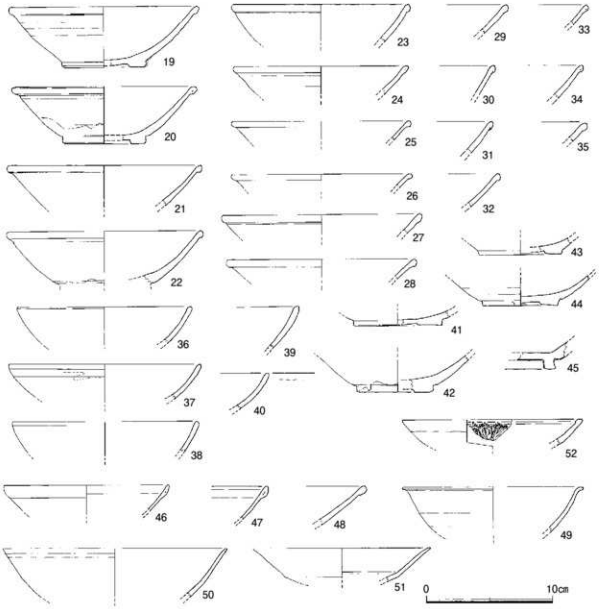


Fig.58　SB32出土遺物実測図2 (1/3)

17～19は福建省**懐安窯産**で、いずれも釉下に白化粧を施す。**17・18**は**碗**、19は**壷**で肩部に褐彩を施す。20は**長沙窯系青磁碗**で、体外面から外底は露胎である。21～23は福建省**洪塘窯**の**無釉陶器**で、21は**壷**、22・23は**捏鉢**である。

24・25は**統一新羅時代**または**高麗時代**の**陶器壷**と思われるが、24は須恵器の可能性もある。

26は**軒丸瓦**で、082型式か。27は鴻臚館式**軒丸瓦**(223a型式)である。28は鴻臚館式**軒平瓦**(635型式)、29は662Ba型式の**軒平瓦**である。30は**熨斗瓦**で、斜格子目叩きを施す。31は**丸瓦**で、細かい斜格子目叩き。32は**平瓦**で、大きめの斜格子目叩きを施す。

以上の出土遺物は、1・2・5・25・28が西側雨落ち溝から、他は全て礎石が抜かれた据付け穴から出土した。近世遺物は家老屋敷の柱穴等からの混入品と考えられる。国産土器・中国産陶磁器は概ね8世紀後半～9世紀前半におさまる。

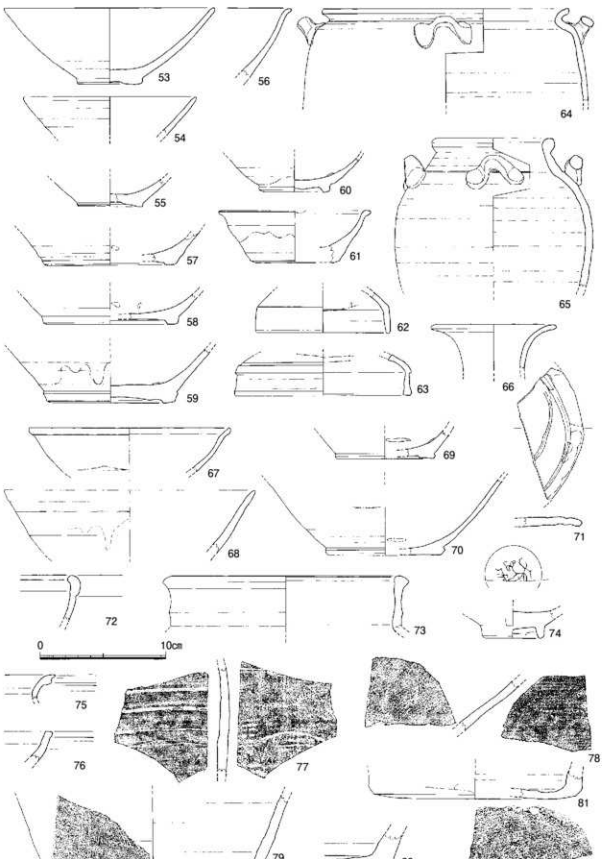


Fig.59　SB32出土遺物実測図3 (1/3)

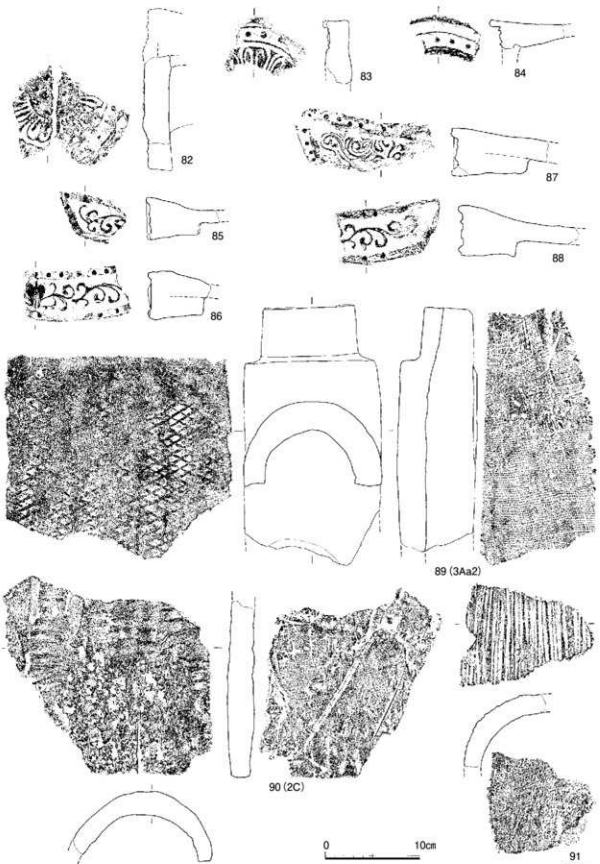


Fig.60　SB32出土遺物実測図4 (1/4)

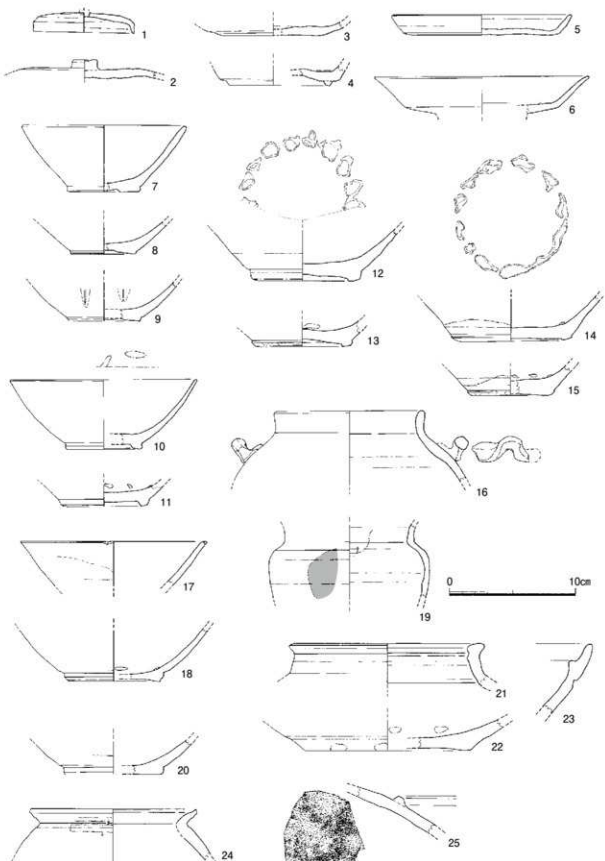


Fig.61　SB330出土遺物実測図1 (1/3)

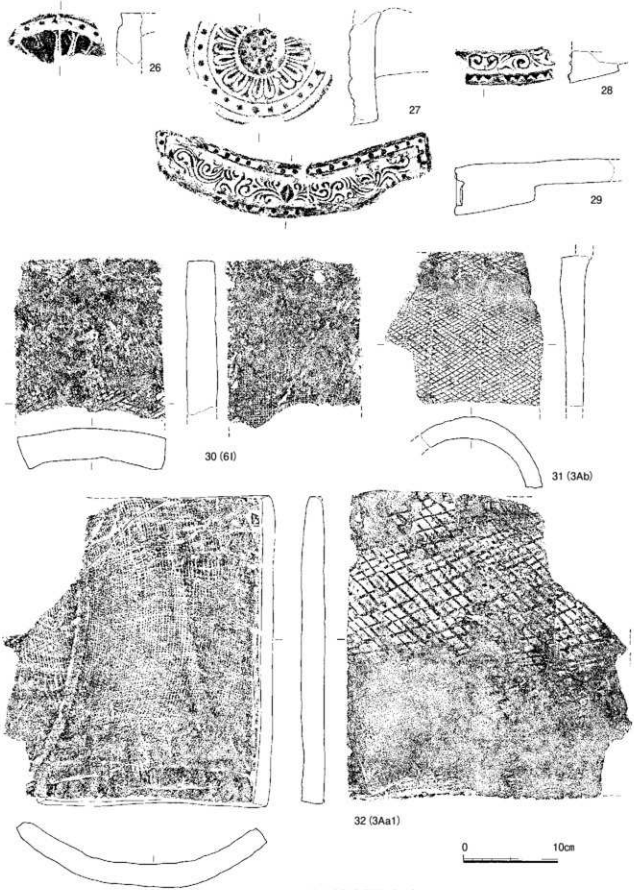


Fig.62　SB330出土遺物実測図2 (1/4)

礎石建物ＳＢ５０　Fig.63～65、PL.12・13

第5・6次調査（8910・9005）で確認した東西棟建物である。SB330の南に接して位置し、SB31とSB330とを連結する。第5調査で検出した遺構は東西に2列に並んだ礎石ないし礎石据付け穴であり、調査区内で7間分を確認した。第6次調査では削平のため遺構の残りが悪く、SB31から数えて8～11間めまでは遺構が認められず、12間めに3列に並んだ礎石据付け穴とみられる遺構の残欠、13間めの3列めにあたる位置に同様の遺構を確認したのみである。

SB50は基壇化粧石が残っていないが、SB31等と同様の基壇構造を持つと考えられる。礎石は3個が現存しており、いずれも花崗岩自然石を使用する。礎石は60㎝×60㎝×30㎝、70㎝×65㎝×26㎝、100㎝×80㎝×20㎝と大きさにばらつきがある。礎石上面レベルは標高9.2ｍ前後で、SB32・330とほぼ同レベルで、SB31より約15㎝低い。礎石据付け穴は土坑や攪乱、削平により失われ、計12基が残る。平面プランが隅丸方形ないし円形を呈し、径1.2～1.45ｍを測る。根固め石は花崗岩・砂岩・玄武岩板石等を使用している。主軸方位は、座標北から88° 30′西偏で、SB31・32・330と正しく直交する。

SB31とSB330に挟まれた北辺部分には雨落ち溝があり、それぞれの建物の雨落ち溝に続くため平面「コ」字形をなす。雨落ち溝は、残りの良いところでは幅約1ｍ、深さ30㎝で、断面はU字形をなす。SB330とSB50との間に溝があったか否かは、土坑群に破壊されており不明である。

この他、SB50に伴うとみられる排水溝が4ヶ所に認められた。西側から説明する。SB31に連結する西端部分を南北に横断する**石組み溝**（第5次調査区）があり、SB31東側雨落ち溝の雨水をSB50の南へ導くために設けられた溝と考えられる。溝の南半部に掘り方と東側石が残るが、北半部は攪乱により破壊されている。南半部の溝は、長さ1.5ｍ、幅40㎝、深さ30㎝。側壁に花崗岩割石を用いており、構造的にはSB32・330の馬道排水溝に類似する。

SB50の北側には建物と平行に伸びる東西溝 **SD270**があり、SB330との連接部より東の部分に確認され、石材が抜かれて構造が不明な西側部分と、暗渠の構造を良く残す東側部分とがある。東側部分では、花崗岩礫を立てて側壁とし、底には瓦を敷き、蓋石として砂岩・花崗岩の板石を被せて暗渠としている。第Ⅱ期布掘り塀の掘り方と完全に重複する位置にある。SB50の基壇を挟んで、この溝の南でも素掘りの東西溝を1条確認しており、長さ6.3ｍ、幅60㎝、深さ15㎝で、断面U字形をなす。ただし礎石列との間が北側溝より広く、近世遺構等による破壊が著しいことから不明確な部分が多い。

SB50の礎石列が削平消失する東端部分に、SB50を南北に横断する溝 **SD235**がある。北半は近世遺構に破壊されており、南半は底面と側壁に花崗岩礫を置くが、礫の大半は抜かれている。長さ4.5ｍが残り、幅50㎝、深さ20㎝を測る。

SB50では、上記したSB31から数えて12間めの礎石据付け穴とその周辺の再調査を行っている。この部分では3基の礎石据付け穴と、その南に南落ち溝とみられる東西溝の一部を確認し、SB50を梁行2間の建物と推定する根拠となっていた。ただし、遺構の残りが不良で、南側南落ち溝と南側柱との間隔が他より広く2ｍある（他は1.5ｍ以内）等の問題があり、再調査を行ったが明確な答えは得られなかった。SB50を複廂とみるか単廂とみるかの問題であるが、SB50の調査時には他の古代官衙同様「鴻臚館南面」の前提のもと、南門の可能性がある基壇状遺構（132頁参照）を確認したことを受けて遺構の検討を行っており、先入観があったことは否めない。後の発掘調査において、第Ⅱ期布掘り塀の存在からみて相似形をなすと考えられる北館のSB50に相当する位置において、梁行2間の東西棟礎石建物（SB1228）を確認している。

ＳＢ５０出土遺物　Fig.66・67

SB50に伴う礎石据付け穴及び雨落ち溝から出土した遺物はコンテナ14箱である。土師器（ヘラ切り

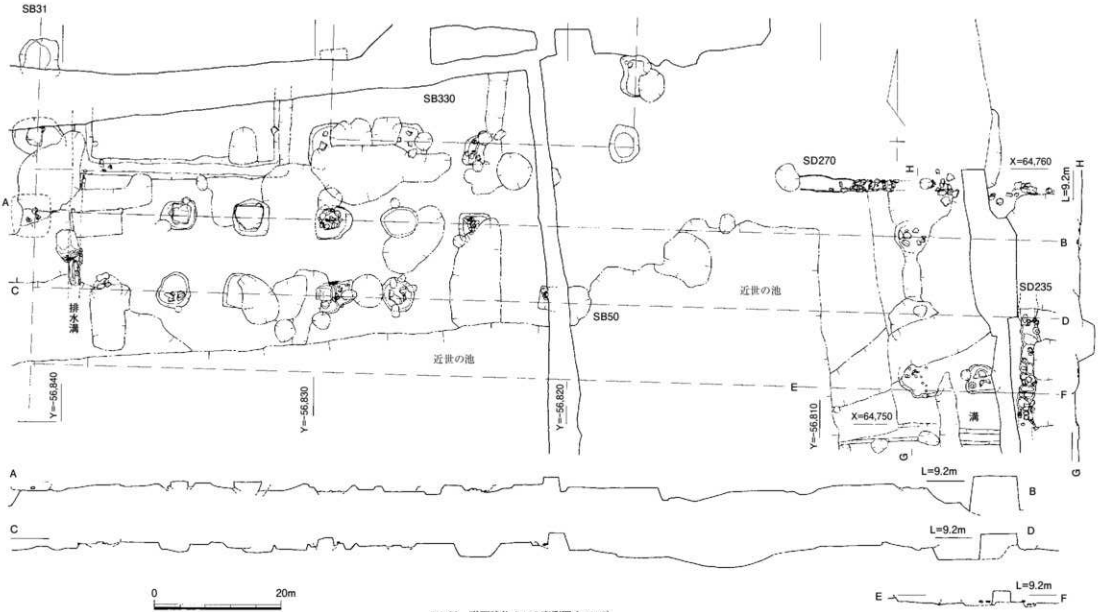


Fig.63　礎石建物 SB50 実測図 (1/150)

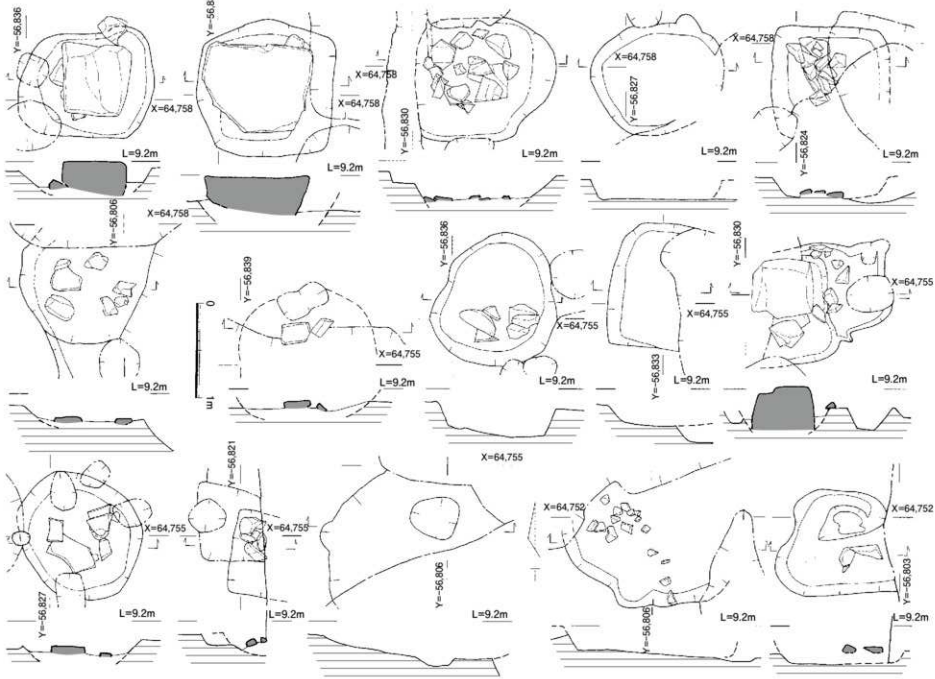


Fig.64　SB50礎石及び礎石掘付け穴実測図1（1/40）

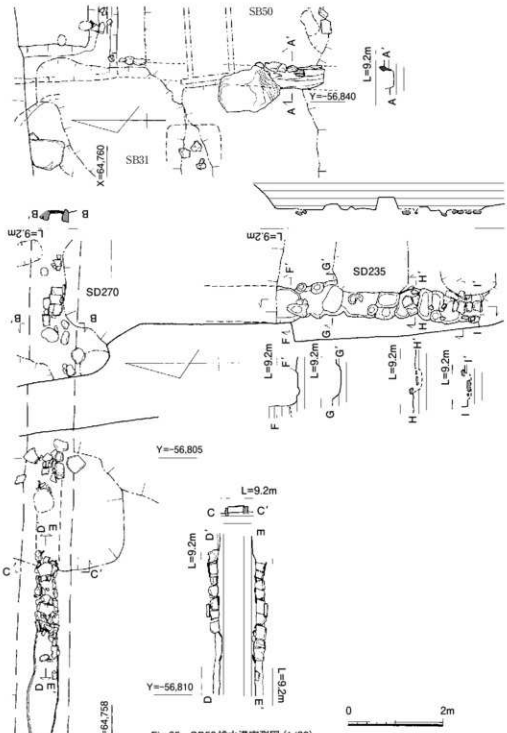


Fig.65　SB50排水溝実測図 (1/80)

坏、甕)、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯・長沙窯系青磁、陶器、宋代青白磁)、朝鮮半島産陶器、瓦等がある。

1～4は須恵器蓋で、天井部外面はヘラ切り離しのまま未調整。**5～11は須恵器坏身**で、外底はヘラ切り離しのまま未調整である。5・8～11は外底のやや内寄りに高台が付く。5は口径13.4cm、器高3.9cm。**12・13は須恵器壷の蓋**であろう。外面天井部に回転ヘラ削りを加える。**14～16は須恵器壷**である。**17・18は須恵器甕**の胴部小片で、外面は平行叩き。

19・20は土師器蓋である。**21～25は土師器坏**で、外底は全てヘラ切りする。21は口径13.2cm、器高3.2cm。22は口径11.0cm。**26は土師器高台付坏**、**27は土師器椀**である。**28は大形の土師器高台付坏**であろう。**29～31は土師器皿**で、29は口径18.6cm、器高2.0cm。30は外底に回転ヘラ削りを加える。**32・33は土師器甕**の口縁部小片である。**34は**土師器の**製塩土器**で、内面に布目痕が残る。外面は器面が剥落する。

35は軒丸瓦で、鴻臚館式(223a型式)。**36・37は軒平瓦**で鴻臚館式(635型式)か。

38～62は中国産陶磁器である。**38は邢窯系白磁、39～41は北宋早期景徳鎮窯白磁碗**である。**42～55は越州窯系青磁**で、42～53は浙江省産である。**42～50は碗**で、45は輪花口縁で体部外面から縦

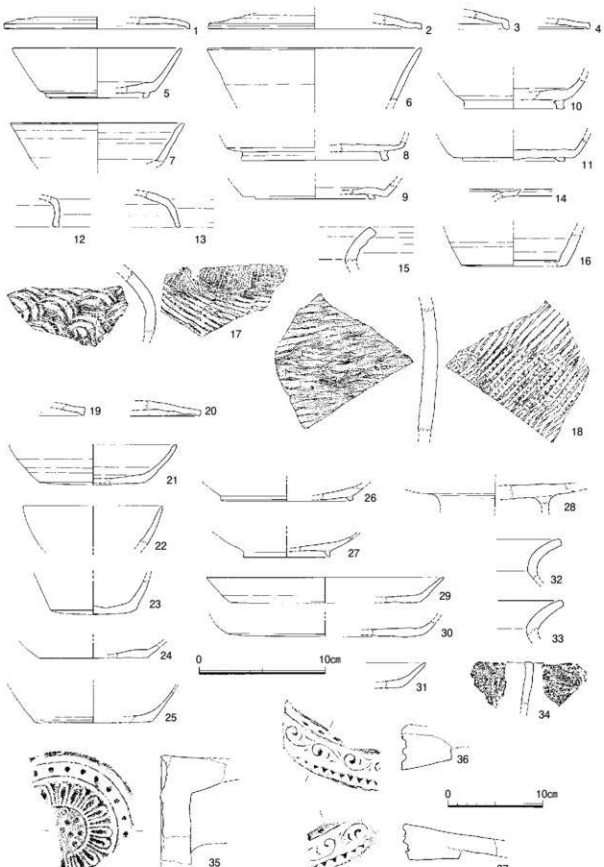


Fig.66　SB50出土遺物実測図1（1～34は1/3、他は1/4）

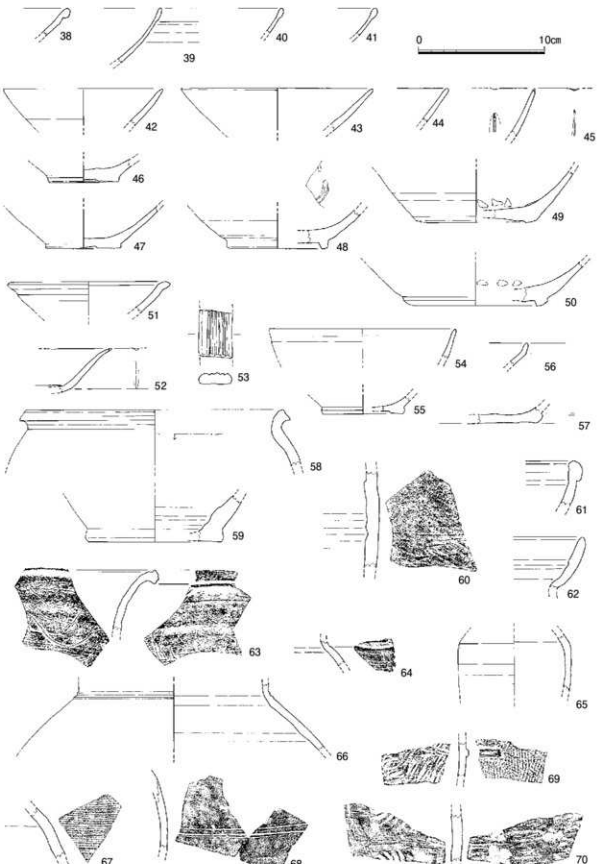


Fig.67　SB50出土遺物実測図2 (1/3)

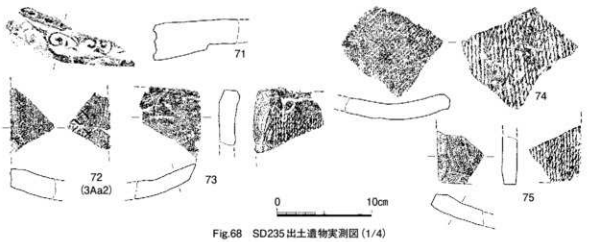


Fig.68　SD235出土遺物実測図 (1/4)

方向のヘラ押しを加える。底部はいずれも全釉である。**51**は**小椀**で、口縁上面に目痕が残る。**52**は**輪花口縁皿**で、体外面に縦方向のヘラ押しを加える。**53**は**水注**の把手片である。**54・55**は福建省**懐安窯**の**碗**で、55は外底を再削りし、蛇の目高台風に仕上げる。**56・57**は**長沙窯系青磁**であろう。小片で不確実だが**56**は**碗**、**57**は**水注**とみられる。**58～62**は福建省**洪塘窯**の**陶器**である。**58～60**は**壷**で、58・60は褐釉を掛ける。**61・62**は**無釉捏鉢**で、62は口縁部が屈曲する鍋状の器形を呈する。

63～70は**統一新羅時代**または**高麗時代陶器**の**壷**、あるいは**甕**であろう。

以上は、39～42・45～48・50・52・55～57が礎石据付け穴から、他は雨落ち溝から出土した。

ＳＤ２３５出土遺物　Fig.68

71は**軒平瓦**で、鴻臚館式（635型式）か。**72～75**は**平瓦**で、72は格子目叩き、73～75は縄目叩きを施す。

SB50の出土遺物は、概ね8世紀後半～9世紀前半の時期に比定しうるが、北宋早期（10世紀後半～11世紀初頭）頃の中国産陶磁器を少量含む。礎石が抜かれた際に混入した可能性がある。

2）その他の遺構

ＳＫ１０７６　Fig.69、PL.13

第17次調査（9910）で確認した。野球場外野席だった部分に位置しており、グランド部分に比べて約1.3ｍ高く、大きな削平を免れている。風化頁岩岩盤に掘りこまれている。礎石建物SB32東側柱筋を北に伸ばした延長線上に位置する。円形プランの土坑で、径0.6ｍ、深さ13cm。断面は浅い皿状を呈する。坑内には礫と瓦が詰め込まれており、形状は礎石据付け穴に似ている。SB32東側柱北端から40ｍ離れており、遺構面は約60cm低い。

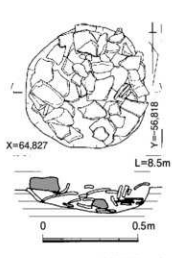


Fig.69　SK1076実測図 (1/20)

ＳＫ１０７６出土遺物　Fig.70

瓦片のみコンテナ2箱が出土した。正格子叩き目の平瓦が1点含まれるが、他は全て縄目叩きである。代表例のみ示す。**1～4**は**平瓦**である。1は正格子叩き目で、他より厚みがある。老司式系か。他は縄目叩きである。出土した瓦からみて、第Ⅱ～Ⅲ期の遺構と考えられる。

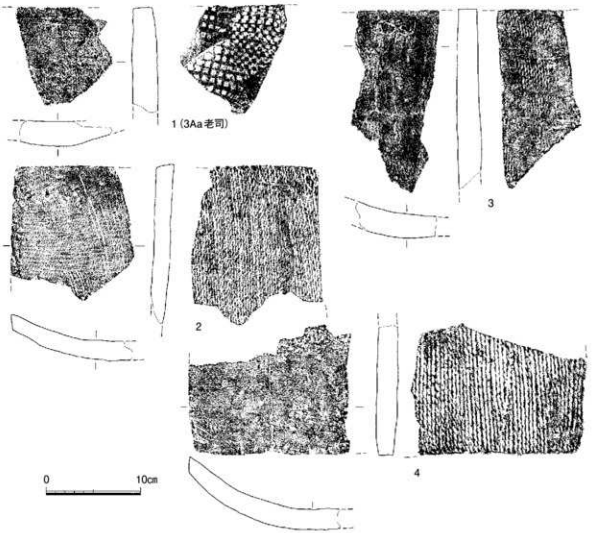


Fig.70　SK1076出土遺物実測図 (1/4)

5．第Ⅳ・Ⅴ期の遺構と出土遺物

1）土坑・溝・柱穴

SK351～355・SD357・SK358　Fig.71、PL.14

南東隅に検出した遺構群で、SK351・352・354・355・357は一連の溝を形成していた可能性が高く、更にSK353・358も近似した位置にあって関連する可能性があるため、まとめて報告する。

SK351は一連の遺構の最北に位置する土坑である。南北に長い楕円形プランで、東西2m、南北3.3m、深さ50cm。壁は弧を描きながら立ち上がり、南辺には狭い段を持つ。**SK352**はSK351の南に0.8m離れて位置する土坑である。南北にやや長い楕円形プランで、東西1.5m、南北2.3m、深さ55cm。壁は弧を描きながら立ち上がる。**SK353**はSK351の東に10cmの間を置いて接する土坑である。南北に長い楕円形プランで、東西1.8m、南北2.4m、深さ60cm。底は弧を描きながら立ち上がる。**SK354**はSK352の南西側に0.7m離れる土坑である。南北と東西に伸びるL字形の不整形プランをなす。二つの土坑の切り合いの可能性がある。東西3m、南北2.3m、深さ40cm。壁は弧を描きながら立ち上がる。**SK355**はSK354の南に1.6m離れる土坑で、他より小さい。南北に長い楕円形プランで、東西0.9m、南北1.6m、深さ30cm。壁は弧を描きながら立ち上がる。**SD357**は南東隅に検出した南北溝で、南側

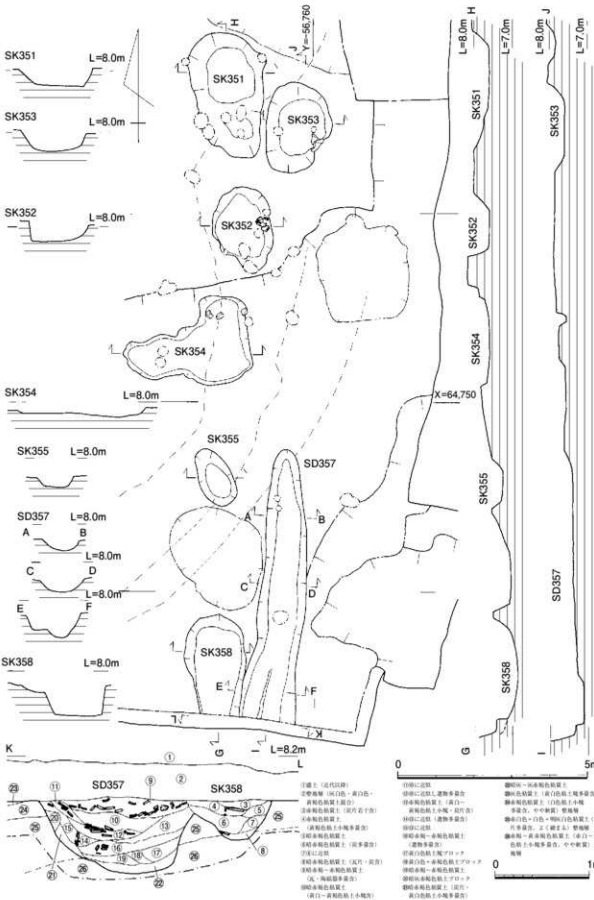


Fig.71　溝 SK351～355・SD357・SK358実測図（土層図は1/40、他は1/100）

は調査区外の福岡城土塁下へと続く。幅1.5m、深さ80cm、長さ7m分を確認した。溝底は南に傾斜し、北側は立ち上がって先細り収束する。横断面形は半円形を呈する。底面南端に段差があり、掘り直した可能性もある。多量の遺物が出土した。**SK358**は調査区南壁際にあり、SD357を切る土坑である。南北に長い楕円形プランで、東西1.6m、南北2.5m、深さ70cm。壁は弧を描きながら立ち上がる。

一連の遺構とすれば、SK351・352・354・355・358のグループ（座標北から約1°東偏）と、SK353・SD357のグループ（同約3°東偏）の2群に分けることができ、切り合いから前者が後出である。

ＳＫ３５１出土遺物　Fig.72～74、PL.20・21

須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、中国産陶磁器（景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、明青花、陶器）、朝鮮半島産陶器、近世陶磁器、瓦等が出土した。

1は**土師器椀**で、高台は細く高く撥状に開く。口径14.8cm、器高5.6cm。**2～30**は**中国産陶磁器**である。**2～14**は北宋早期**景徳鎮窯白磁**である。**2～10・13・14**は**碗**で、外面から縦位のヘラ押しを加え輪花口縁とするものが大半を占める。10の外底には「網」とみられる墨書がある。**11・12**は**皿**である。**15～28**は**越州窯系青磁**。15～26は浙江省産。**15～19**は**碗**。19は北宋早期の製品で、内底に毛彫りにより施文する。外底には目痕が残る。**20**は**稜花口縁皿**。**21～23**は平底の**小碗**で全釉。**24～26**は**水注**で、24は褐釉を施す。**27**は福建省**懐安窯青磁碗**で、外底は再削りにより蛇の目高台風とする。釉下に白化粧を施す。**28**は**壺の蓋**か。天井部の2ヶ所に穿孔し、外面にヘラ彫りの渦巻文を施す。**29**は福建省**洪塘窯無釉陶器捏鉢**。**30**は**明代後半竜泉窯系青磁細蓮弁文碗**。**31**は**土鍋**で両側に把手が付き、煤が付着する。**32**は**土師質擂鉢**、**33**は**備前焼擂鉢**である。**34**は**滑石製の石錘**である。重さ270g。**35・36**は**丸瓦**で格子目叩き。**37**は**平瓦**で「質茂」銘のある複線斜格子目叩き。**38**も**平瓦**で縄目叩き。

少量の中世～近世遺物は混入の可能性があり、概ね第Ⅴ期（10世紀後半～11世紀前半）に収まる。

ＳＫ３５２出土遺物　Fig.75～77

須恵器、土師器、土師質土器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、長沙窯青磁、越州窯系青磁）、朝鮮半島産陶器、近世陶磁器、瓦が出土した。

1～3は**須恵器甕**で、1・2は同一個体か。内面に指押え痕が残る。**4～10**は**中国産陶磁器**である。**4**は**邢窯系白磁碗**で、外面からヘラ押しし輪花口縁とする。**5～7**は北宋早期**景徳鎮窯白磁**で、**5・6**は**碗**、**7**は**皿**である。**8**は福建**懐安窯青磁碗**。**9**は**長沙窯系青磁碗**で、体外面下半から外底は露胎である。**10**は**青磁壷**で、福建産であろう。**11・12**は**備前焼擂鉢**である。**13**は**近世染付碗**である。**14**は**朝鮮王朝緑褐釉陶器瓶**である。**15～17**は**丸瓦**で、15は斜格子、16は複線斜格子、17は「Y」字を刻んだ斜格子目叩きである。**18・19**は**平瓦**で、18は「佐」銘が入る斜格子目、19は細かい斜格子目叩き。

混入遺物とみられる中～近世遺物を除けば、第Ⅴ期（10世紀後半～11世紀前半）におさまる。

ＳＫ３５３出土遺物　Fig.78

須恵器、土師器、中国産陶磁器（越州窯系青磁、景徳鎮窯白磁）、中世～近世土器、瓦が出土した。

1は**須恵器蓋**で、外面回転ヘラ削り。鈕が付く。**2**は北宋早期**景徳鎮窯白磁碗**。**3・4**は浙江省産**越州窯系青磁**で、**3**は**皿**、**4**は北宋早期の**碗**で外面に花文がある。**5・6**は福建**懐安窯**の製品。**5**は**青磁盤口壷**で肩部に縦耳が付き、釉下に白化粧を施す。**6**は**褐釉灯盞**。外底に糸切り痕が残る。**7**は**瓦質土器壷**。**8**は**土錘**。重さ10.6g。**9**は**軒平瓦**。**10**は**丸瓦**で斜格子目叩き、**11**は**平瓦**で縄目叩き。

ＳＫ３５４出土遺物　Fig.79・80

須恵器、土師器、越州窯系青磁、明青花、朝鮮王朝陶磁器、近世陶磁器、瓦が少量出土した。

1は**須恵器甕**である。**2～4**は**中国産陶磁器**で、**2**は**長沙窯系青磁碗**、**3**は**明代青花碗**、**4**は**朝鮮王朝青灰釉陶器碗**で高台内まで施釉し内底に目痕がある。**5～7**は**近世陶磁器**で、**5**は**染付碗**、**6**は**黄釉鉄**

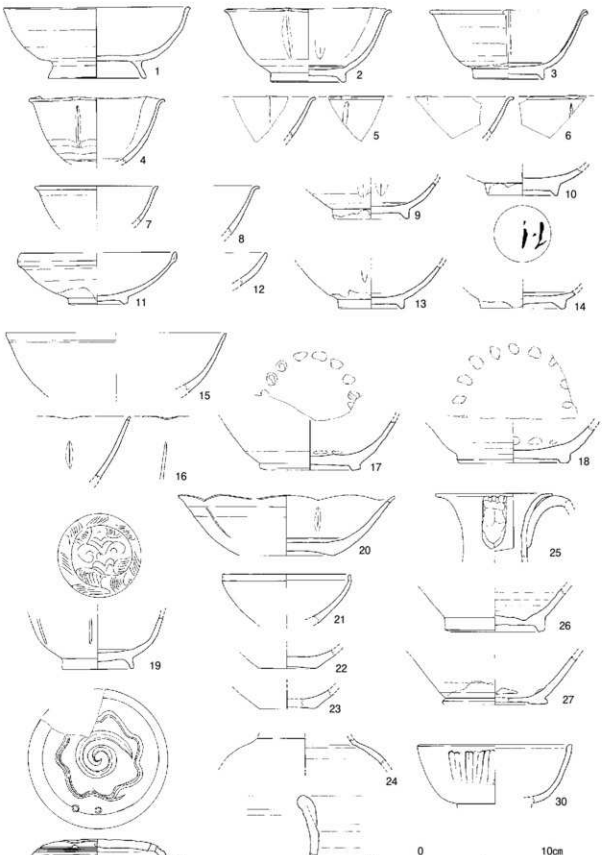


Fig.72　SK351出土遺物実測図1 (1/3)

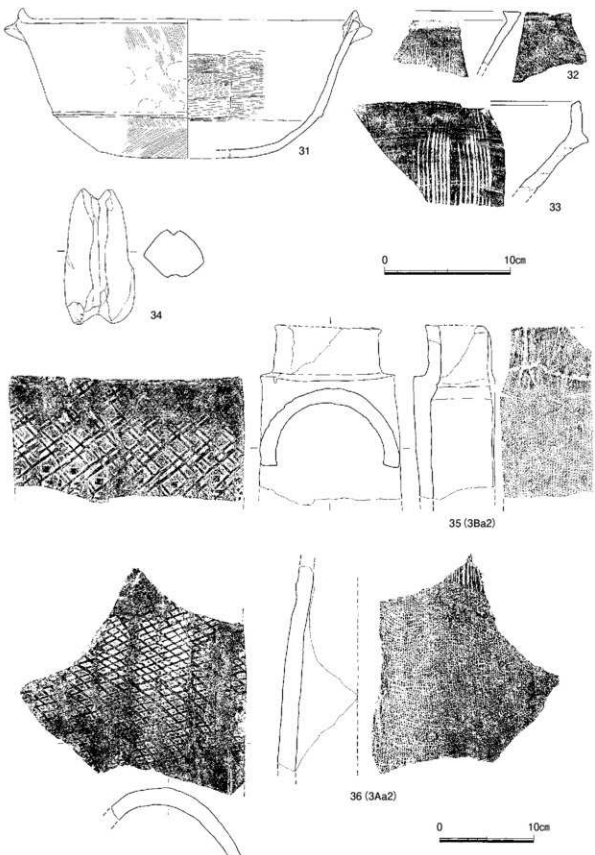
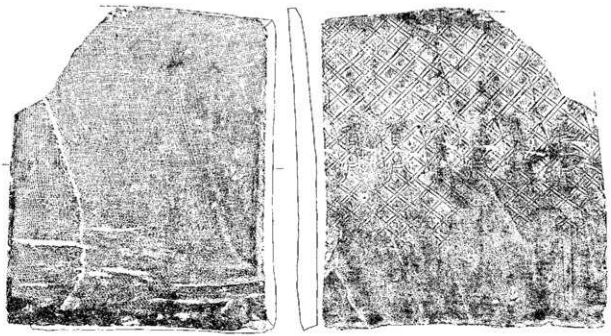
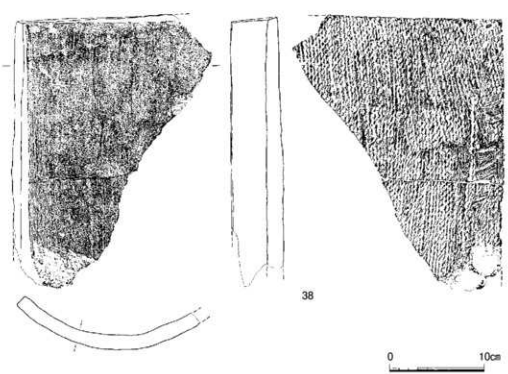


Fig.73　SK351 出土遺物実測図 2 (31～34 は 1/3、他は 1/4)



37 (3Ba2)



38

0 10cm

Fig.74 SK351出土遺物実測図3 (1/4)

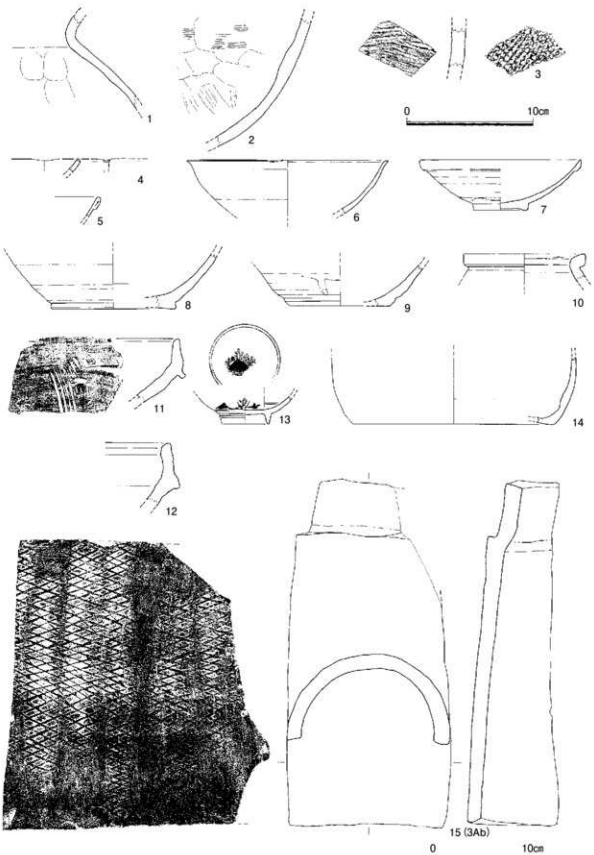


Fig.75　SK352出土遺物実測図1（1～14は1/3、他は1/4）

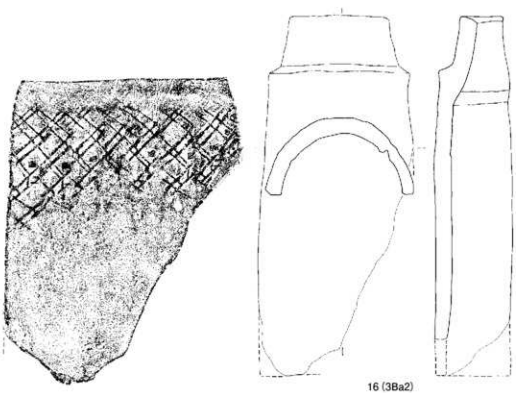


Fig.76　SK352出土遺物実測図2 (1/4)

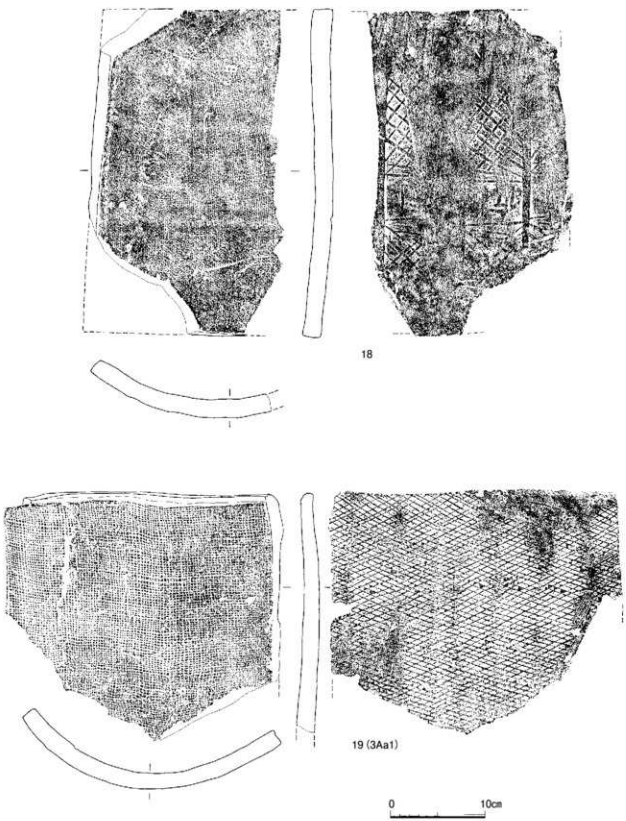


Fig.77　SK352出土遺物実測図3 (1/4)

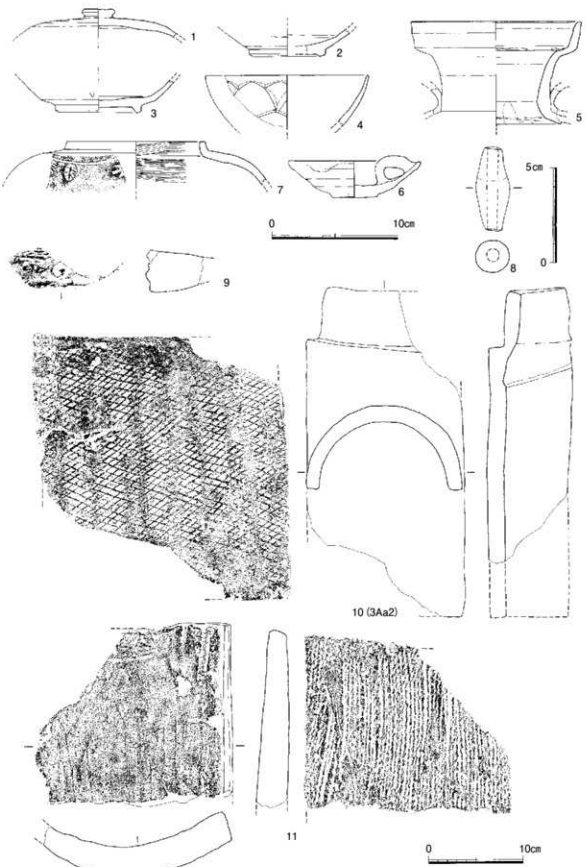
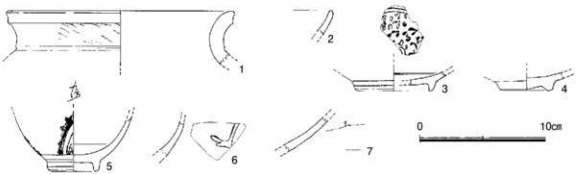
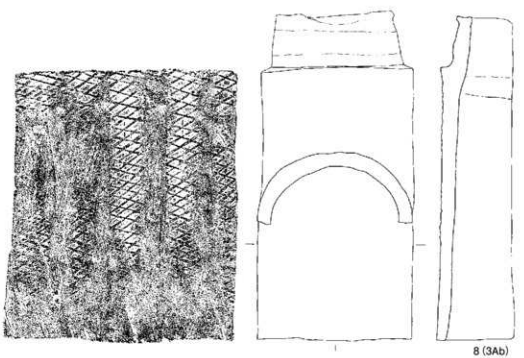


Fig.78　SK353出土遺物実測図（1～7は1/3、8は1/2、他は1/4）





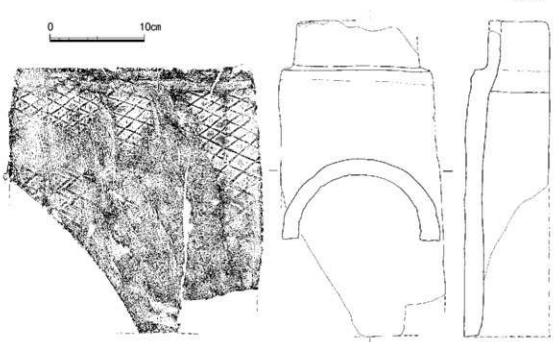


Fig.79　SK354出土遺物実測図1（1～7は1/3、他は1/4）

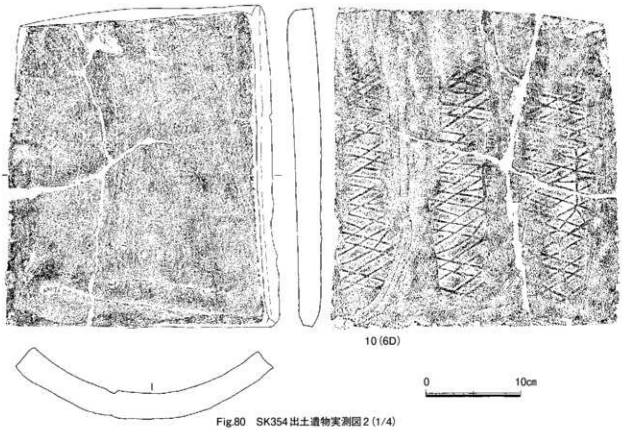


Fig.80　SK354出土遺物実測図2 (1/4)

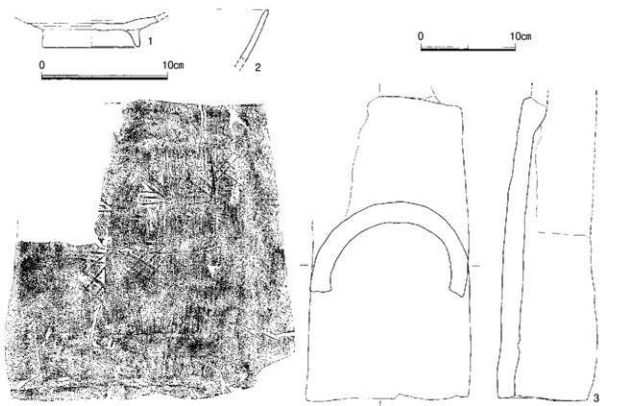
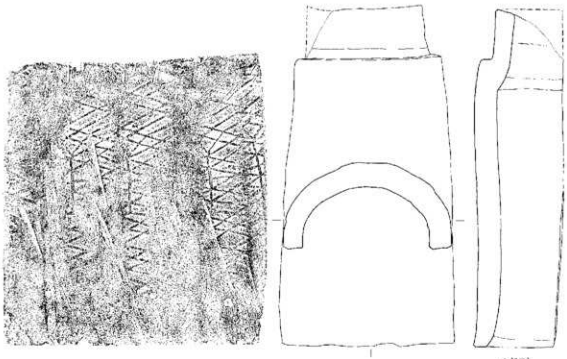


Fig.81　SK355出土遺物実測図1 (1～2は1/3、他は1/4)



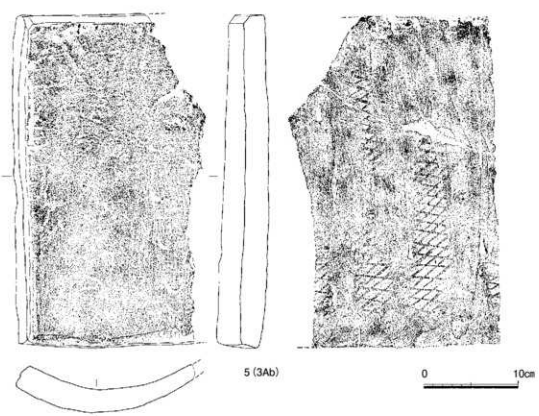


Fig.82　SK355出土遺物実測図2 (1/4)

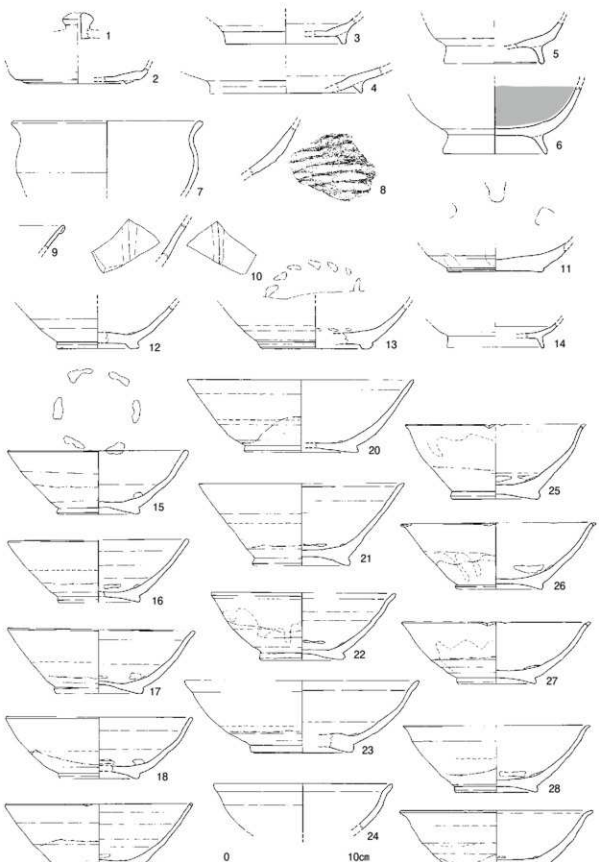


Fig.83　SD357出土遺物実測図1 (1/3)

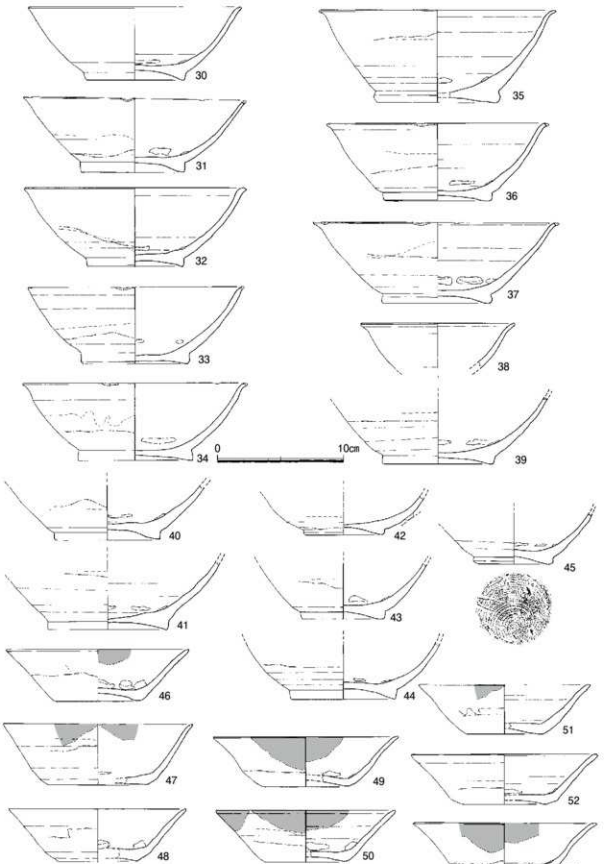


Fig.84　SD357出土遺物実測図2 (1/3)

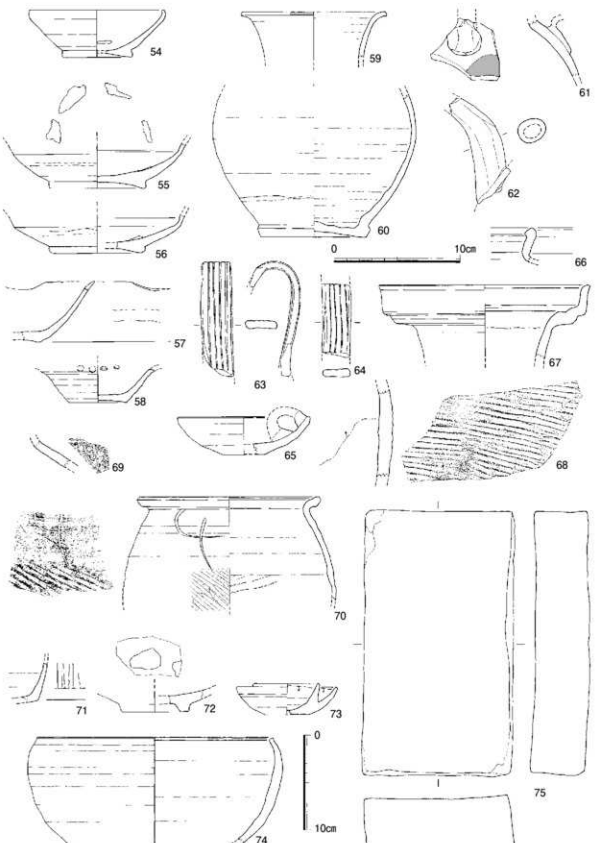


Fig.85　SD357出土遺物実測図3（75は1/4、他は1/3）

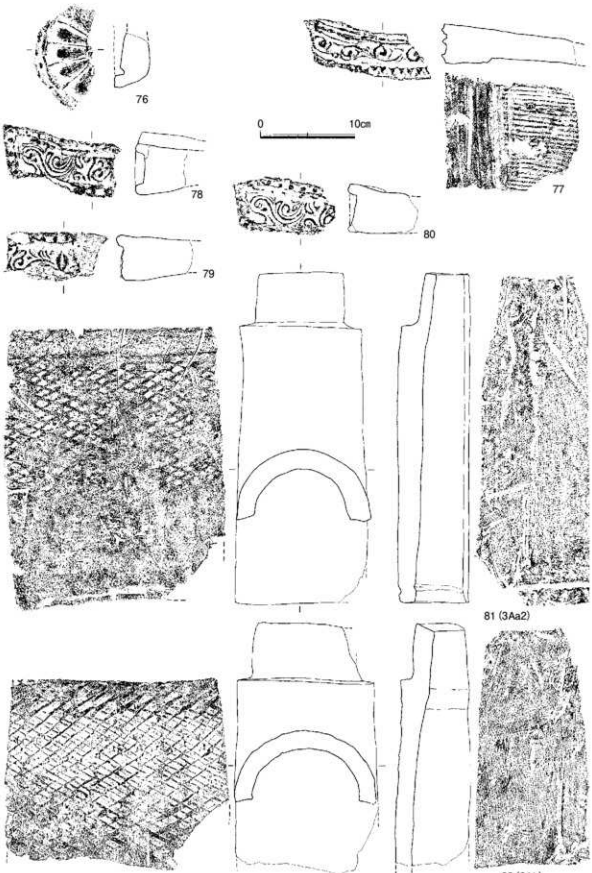
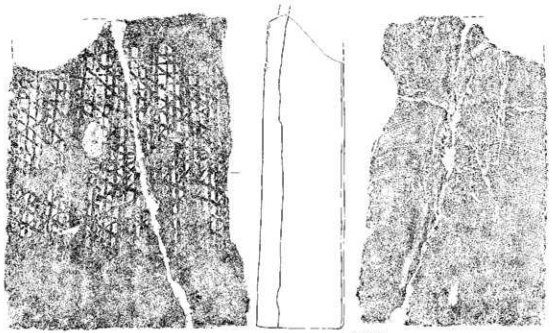


Fig.86　SD357出土遺物実測図4 (1/4)



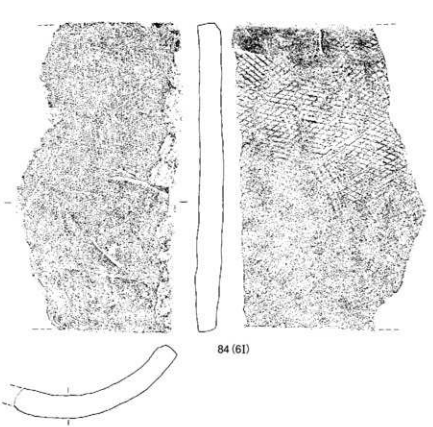


Fig.87　SD357出土遺物実測図5 (1/4)

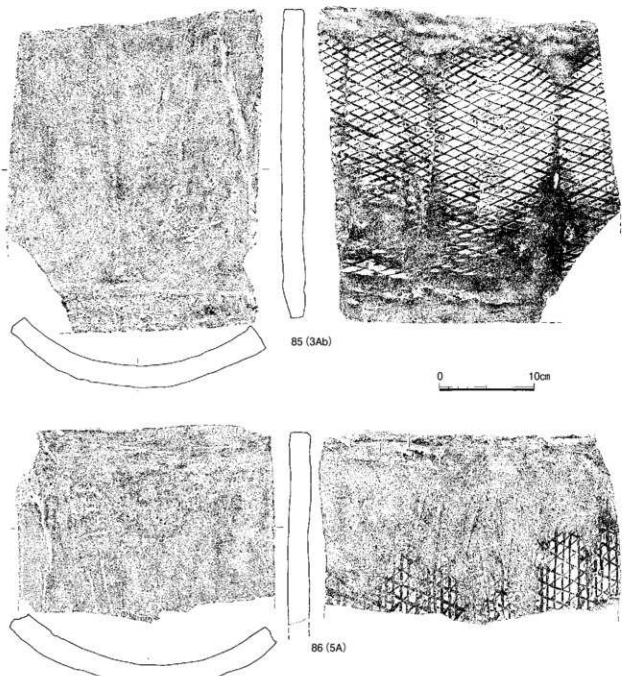


Fig.88　SD357出土遺物実測図6 (1/4)

絵陶器碗、7は**灰釉陶器**である。8・9は丸瓦、10は**平瓦**で、ともに格子目叩きを施す。

二つの遺構が重複し、一つは近世遺構であった可能性がある。

ＳＫ３５５出土遺物　Fig81・82

極く少量の土師器、越州窯系青磁、瓦が出土した。1は**土師器椀**である。2は浙江省産**越州窯系青磁椀**である。3・4は**丸瓦**で、格子目叩き。3は「今行」銘がある。5は**平瓦**で、格子目叩きを施す。

出土遺物が少なく詳細時期不明だが、平安時代の遺構であろう。

ＳＤ３５７出土遺物　Fig83～88、PL.21

須恵器、土師器、中国産陶磁器（邢窯系白磁、越州窯系青磁、青白磁、陶器）、朝鮮半島産陶磁器（新羅

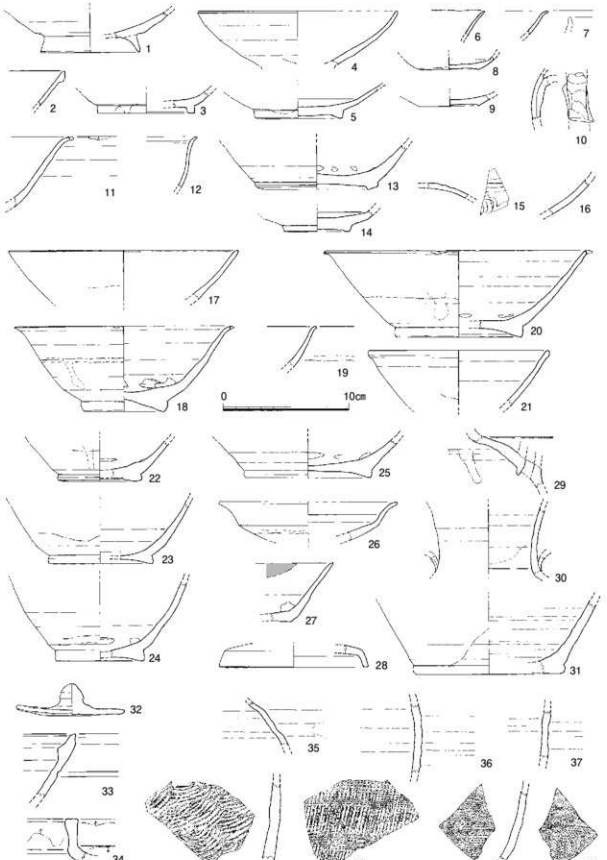


Fig.89　SK358出土遺物実測図1 (1/3)

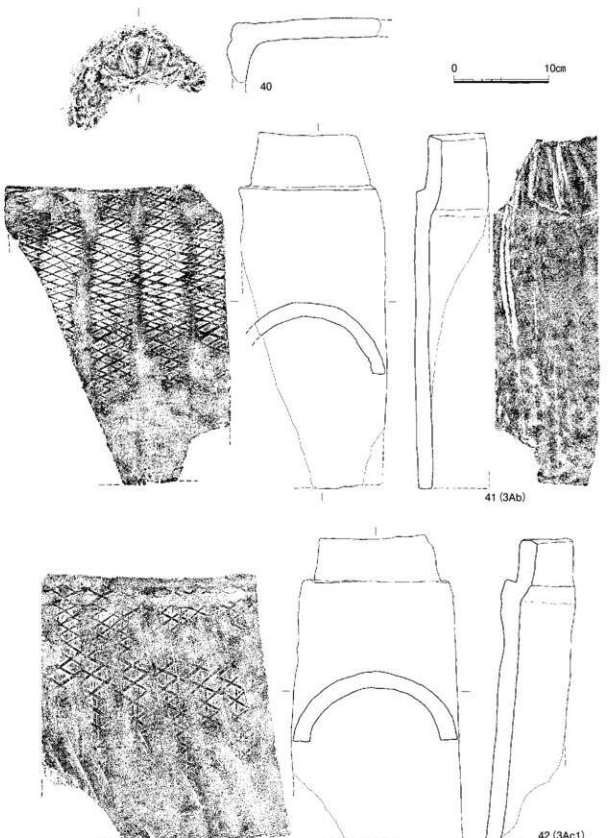


Fig.90　SK358出土遺物実測図2 (1/4)

～高麗陶器、朝鮮王朝白磁)、近世陶磁器・瓦質土器、及び多量の瓦が出土した。

1・2は**須恵器**で、1は**蓋**の鉦で、穿孔がある。2は**高台付坏**。3は**土師器高台付坏**、4・5は**土師器椀**。6は**黒色土器A類椀**。7・8は**土師器甕**で、8は外面に平行叩きを施す。

9～68は**中国産陶磁器**である。9・10は**邢窯系白磁碗**で、10は外面から縦位のヘラ押しを加える。11～64は**越州窯系青磁**。11は広東産と思われる**碗**で、平底で外面は露胎。内底と体部下端に大きな目痕が残る。12～14は浙江省産の**碗**で全釉。14は北宋早期か。15～64は福建省**懐安窯産**で、釉下に白化粧を施す。15～45は**碗**で内底に白土目が残る。45は外底に糸切り痕が残る。46～53は平底の**褐彩坏**で、内底に白土目が残る。54は**小碗**、55・56は**皿**。57は**平底坏**で稜花口縁。浙江省産の模倣品とみられ鴻臚館跡では初例。58は**蓋**で端部の2ヶ所に穿孔し外面露胎。59～64は**褐彩水注**。65は福建省**懐安窯褐釉灯盞**。66～68は福建省**洪塘窯陶器**で、66は**無釉壺**、67は**暗緑褐色釉盤口壺**、68は**暗緑褐色釉甕**。69・70は**統一新羅時代の壺**で、69は肩部に小突帯1条と印花文を施す。70は口縁を短く折返し上面に凹線を巡らす。外面下半を平行叩き、上半にヘラ沈線を入れる。内面に当て具痕が残る。71は南宋代**景徳鎮窯青白磁香炉**。72は**朝鮮王朝白磁碗**。73は**国産灰釉灯盞**、74は**備前焼の無釉鉢**。

75は**素文磚**。76は**軒丸瓦**で082A型式。77は鴻臚館式**軒平瓦**（635型式）で凸面平行叩き。78～80も**軒平瓦**で662型式。81～83は**丸瓦**で斜格子目叩き、84～86は**平瓦**で斜格子目叩き。

出土遺物の主体は、未使用のまま多量に廃棄された9世紀～10世紀初頭頃の越州窯系青磁だが、10世紀前半～11世紀初頭頃の土師器も混在し、2時期の遺構が重複している可能性がある。

ＳＫ３５８出土遺物　Fig89～92、PL21

須恵器、土師器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器、瓦が多量に出土した。

1は**土師器椀**で高台は細く高い。2～34は**中国産陶磁器**で、福建省産**越州窯系青磁**が多数を占める。2・3は**邢窯系白磁碗**で、3は太く低い角高台で外底露胎。4～9は北宋早期**景徳鎮窯白磁**で、4・5は

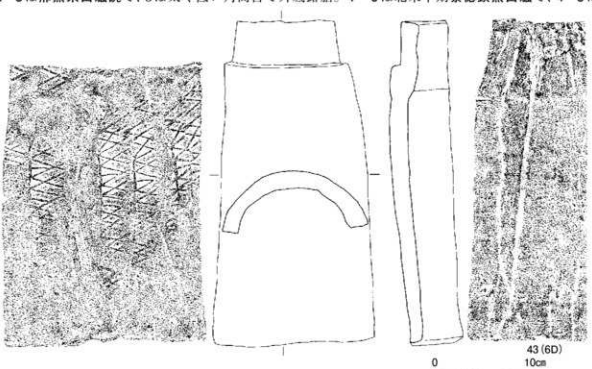


Fig.91　SK358出土遺物実測図3 (1/4)

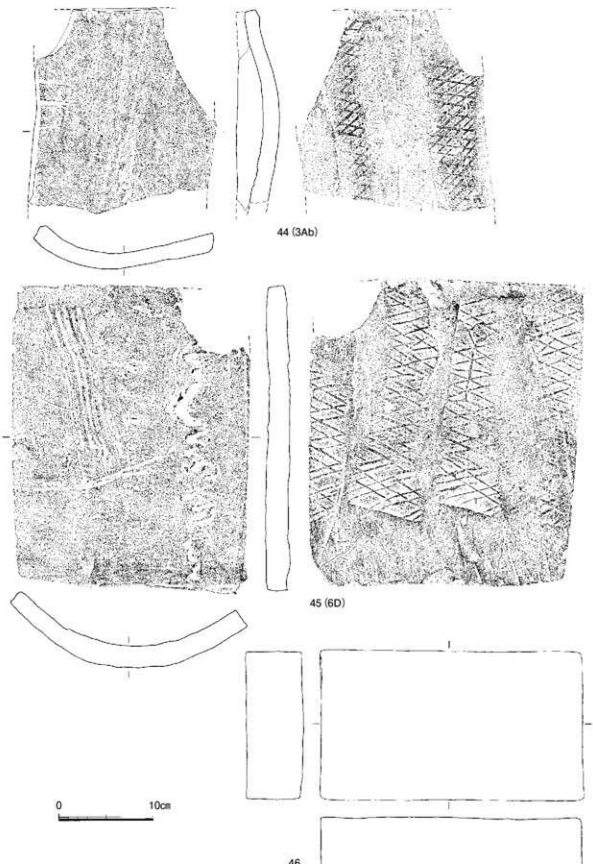


Fig.92　SK358出土遺物実測図4 (1/4)

碗、6～9は皿。10は白磁水注の把手。11～31は越州窯系青磁。11～15は浙江省産で、11～13は碗、14は皿、15は北宋早期の壷又は香炉の蓋で外面施文する。16は長沙窯系青磁碗か。17～31は福建省産で釉下に化粧掛けする。17～25は碗で内底に白土目が残る。26は皿、27は褐彩坏、28は蓋。29～31は水注で、29は一部に褐彩がある。32～34は福建省洪塘窯陶器。32は無釉蓋で鈕が付き、外底中央に糸切り痕が残る。33は無釉捏鉢。34は暗緑褐色釉壷。35～39は統一新羅～高麗時代陶器壷。40は軒丸瓦で082型式。41～43は丸瓦で斜格子目叩き。44・45は平瓦で斜格子目叩き。46は磚で完品。

国産土器が少ないが、中国陶磁器の年代から第Ⅴ期（10世紀後半～11世紀前半）と考えられる。

SD864・866・884、SX895　Fig.93

第13次調査（9620）で福岡城土塁下に確認した遺構群で、SX865→SD866→SD864の順に新しい。SX865は27ページで説明している。

SD864は、南北に伸びる溝で、幅1.8～1.9m、深さ25～32cmで、断面浅皿状をなす。第Ⅴ期。

SD866は、ほぼ南北に伸びる溝状の遺構である。幅0.5～0.7m、深さ20～25cmを測る。断面形は浅皿状で、底面は南へ緩く落ちている。礎石建物SB31東側柱列の延長上に位置する。この溝の西側に一段高い基壇状の高まりがあるが、その性格は不明。底面直上の出土遺物から、10世紀後半以降の第Ⅴ期の遺構と考えられ、SB31に直接伴う溝ではない。

SD884は、近世溝で破壊され、東側壁が僅かに残り、土層断面の観察により溝状になることが知れる程度である。SD864とほぼ平行しており、北へ延長すると礎石建物SB31の西側雨落ち溝に至

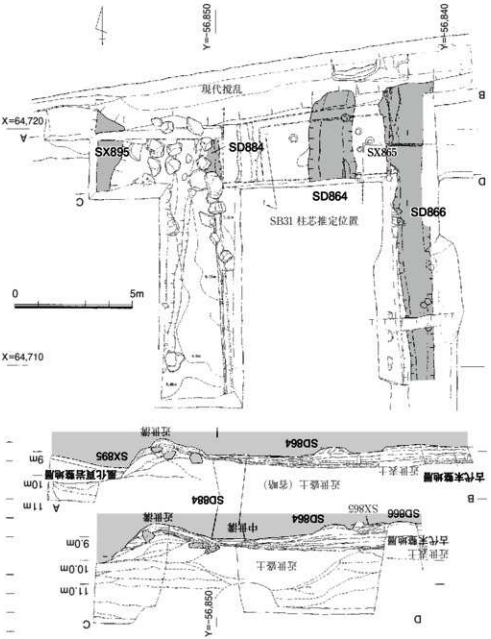


Fig.93　溝 SD864・866・884、一段高い地山 SX895 (1/160)

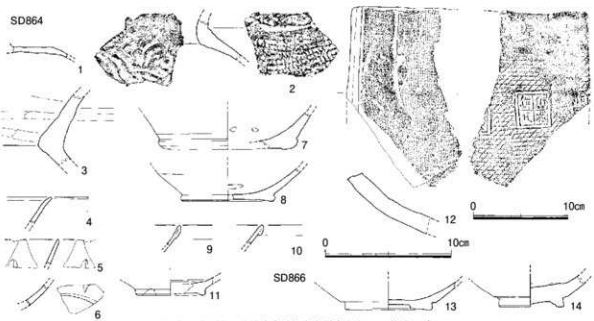


Fig.94　SD864・866出土遺物実測図（12は1/4、他は1/3）

る。ただし、層位からみて10世紀半ば以降の第Ⅴ期の溝と考えられる。遺構に伴う出土遺物はない。

SX895は、上記遺構群の西端に確認した地山面である。標高9.9ｍを測り、礎石建物SB31周辺の遺構面9.1ｍよりも約１ｍ高いため、鴻臚館跡の敷地の西限を示す遺構として注目される。

ＳＤ８６４出土遺物　Fig.94

少量の須恵器、土師器、中国産陶磁器（景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁）とコンテナ２箱の瓦が出土した。

1は須恵器蓋で、天井部ヘラ切りのまま未調整。**2・3は須恵器甕**である。**4～11は中国産陶磁器**である。**4～8は越州窯系青磁**で、4～7は浙江省産の碗。6は北宋早期の製品で外面に施文する。**8**は福建省**懐安窯の碗**である。**9～11**は北宋早期**景徳鎮窯白磁碗**である。**12**は「伊貴作瓦」銘の**平瓦**。『鴻臚館跡8』ではSD864出土と報告したが、遺構を覆う8-2層出土遺物である。10世紀後半～11世紀前半の溝であろう。

ＳＤ８６６出土遺物　Fig.94

13は邢窯系白磁碗。**14は越州窯系青磁碗**。ともに遺構を覆う8-2層出土。

ＳＫ１０４２　Fig.95、PL.14

第17次調査（9910）で確認した。礎石建物SB32の西側柱列を北へ伸ばした延長線上に位置する土坑で、SB32北端の礎石据付け穴との距離は約34ｍ

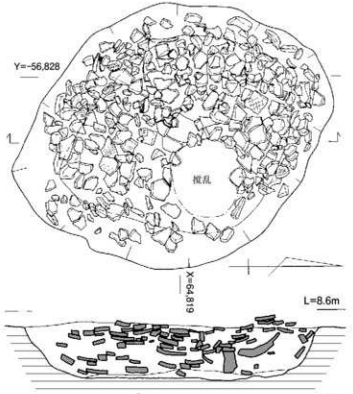


Fig.95　SK1042実測図（1/20）

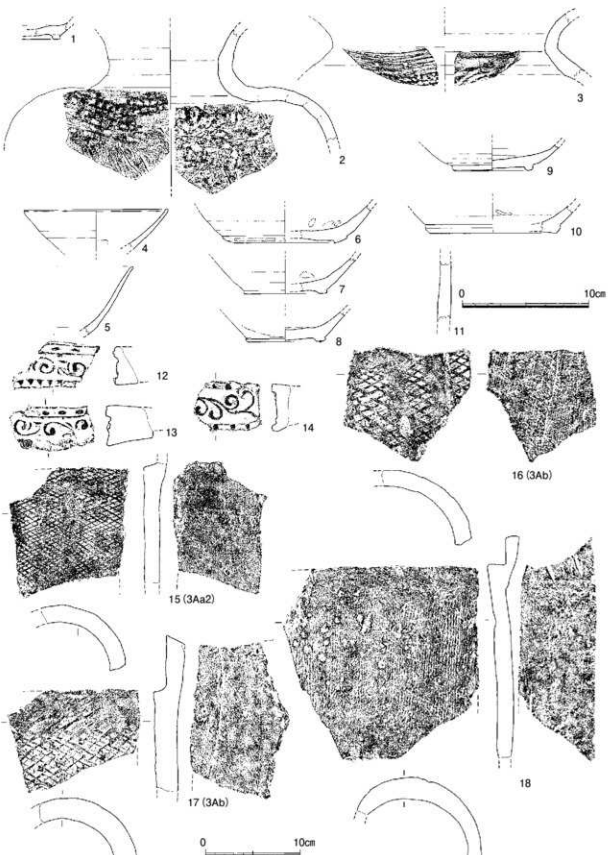


Fig.96　SK1042出土遺物実測図1（1～11は1/3、他は1/4）

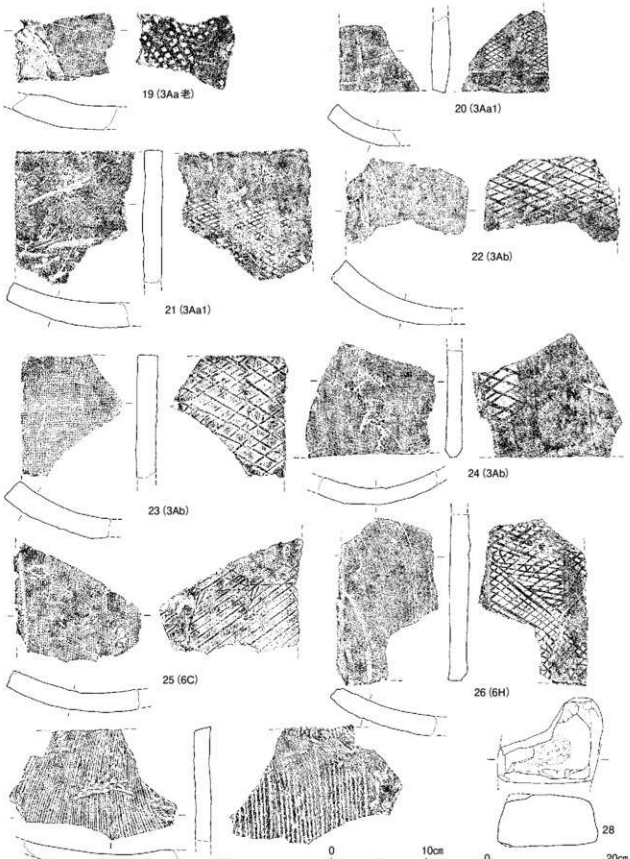


Fig.97　SK1042出土遺物実測図2 (28は1/6、他は1/4)

を測る。平面形は不整な隅丸方形で、径1.75m×1.35m。深さ30cmが残り、岩盤に掘り込まれている。坑内に多量の瓦に混じって礫が詰め込まれており、礎石据付け穴が廃棄土坑に転用された可能性がある。ただし、SK1042の検出面は、SB32北端の遺構面（標高9.0m前後）より約50cm低い。上面に近代の兵舎基礎が重なる。

ＳＫ１０４２出土遺物　Fig.96・97

少量の須恵器、土師器、中国産陶磁器（邢窯系白磁、越州窯系青磁、陶器）の他、コンテナ12箱の瓦が出土した。

1は**須恵器高台付坏**。**2・3**は**須恵器甕**で、外面格子目叩きである。

4～11は**越州窯系青磁**である。4～9は浙江省産で、**4～8**は**碗**、**9**は**皿**である。6・7・9は高台内まで施釉し、8は体外面下半露胎。**10**は福建省**懐安窯**の**碗**。**11**は**壷**で内外面に施釉する。胎土・釉調の様相から広東産の可能性がある。

12・13は**軒平瓦**で、鴻臚館式（635型式）。**14**は**軒平瓦**小片で663型式か。**15～18**は**丸瓦**で、15～17は斜格子目叩き、18は縄目叩きである。**19～27**は**平瓦**で、19は正格子叩き、20～24・26は斜格子目叩き、25は平行叩き、27は縄目叩き。**28**は砥石片。

出土遺物は9世紀～10世紀初頭頃に位置付けられる。第Ⅳ期の土坑で、第Ⅲ期遺構を転用した可能性もある。

ＳＫ１０６９　Fig.98、PL.14

第17次調査（9910）で確認した。旧平和台野球場内の外野席であった部分に位置し、強い削平を免れている。南北に長い隅丸長方形の明確なプランを持つ。南北1.2m、東西1.0m、深さ53cm。風化頁岩岩盤に掘り込まれている。径50cmの柱抜き痕が確認でき、柱穴と考えられる。半切して調査を行い、掘り方底面から礫と瓦が敷き詰められた状態で出土した。柱穴掘り方内は、掘り起こした風化頁岩土を用いて固く突き固めている。周辺にはこれと組になるような柱穴は認められず、北側グランド部分は野球場建設により大きく削平されていることから、北へ展開する建物であった可能性もある。

ＳＫ１０６９出土遺物　Fig.99・100

須恵器、土師器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁）、近世陶磁器、瓦が出土した。

1～4は**須恵器甕**である。**5**は**土師器椀**、**6**は**黒色土器Ｂ類椀**である。**7**は**土師器鉢**か。**8**は**国産緑釉皿**で、外底まで施釉する。

9は**統一新羅時代**の**陶器壷**とみられる残欠である。体外面上位に印花文と思われる痕跡がある。

10～30は**中国産陶磁器**である。**10**は**邢窯系白磁碗**、**11～19**は北宋早期**景徳鎮窯白磁碗**である。**20～28**は**越州窯系青磁**で、**20～23**は浙江省産**碗**、**24～28**は福建省

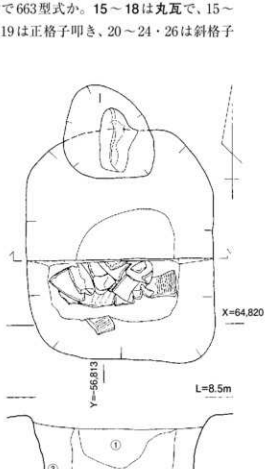


Fig.98　SK1069実測図（1/20）

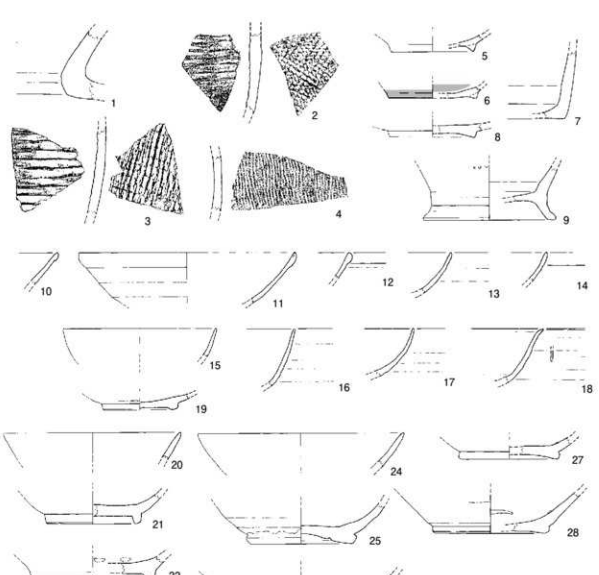


Fig.99　SK1069出土遺物実測図1(1/3)

懐安窯の**碗**で、釉下に白化粧を施す。25は外底を再削りし蛇の目高台風に仕上げる。**29・30**は福建省**洪塘窯**の**無釉陶器鉢**である。

31は**磚**である。**32**は**軒丸瓦**で、鴻臚館式(223a型式)。**33～36**は**丸瓦**で、33は「平井」銘の叩きがある。34は平行叩き、35・36は斜格子目叩きである。**37・38**は**平瓦**で斜格子目叩き、39は斜線の入った斜格子目の叩きである。

中～近世遺物が若干混入しているが、中国陶磁器の年代より10世紀後半～11世紀前半（第Ⅴ期）の柱穴であろう。　（吉武　学・田中　克子）

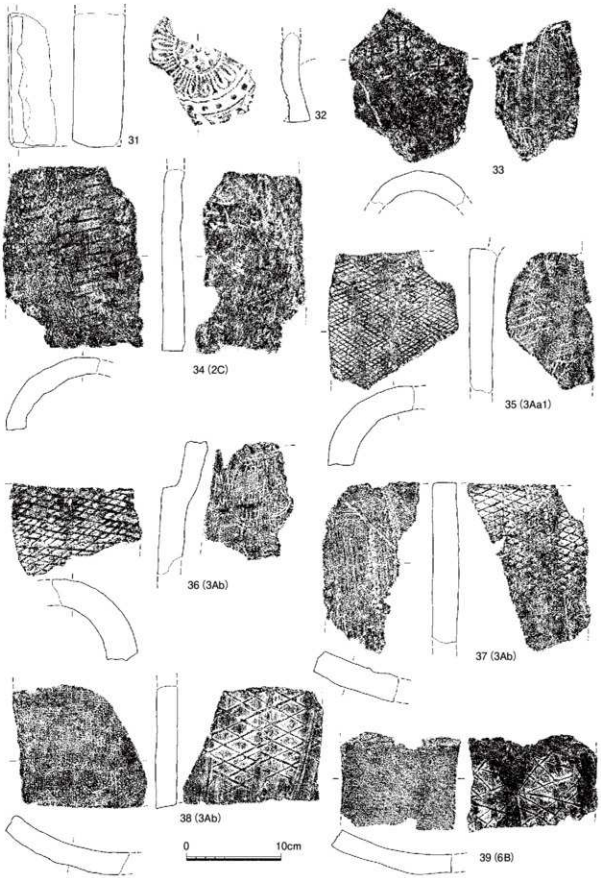


Fig.100　SK1069出土遺物実測図2 (1/4)

2）第Ⅴ期の区画溝

ＳＤ１５０５２　Fig.101・102、PL.15

鴻臚南館の東を画する南北溝である。後述するSD15098（東西溝）とともに南館の北東角を形成する。ただし、SD15052とSD15098とは連結せず、6ｍ弱の陸橋状部分を掘り残している。この陸橋状部分に南館への出入口機能を想定することも可能である。しかし、南館では、Ⅱ期に属する東門が検出さ

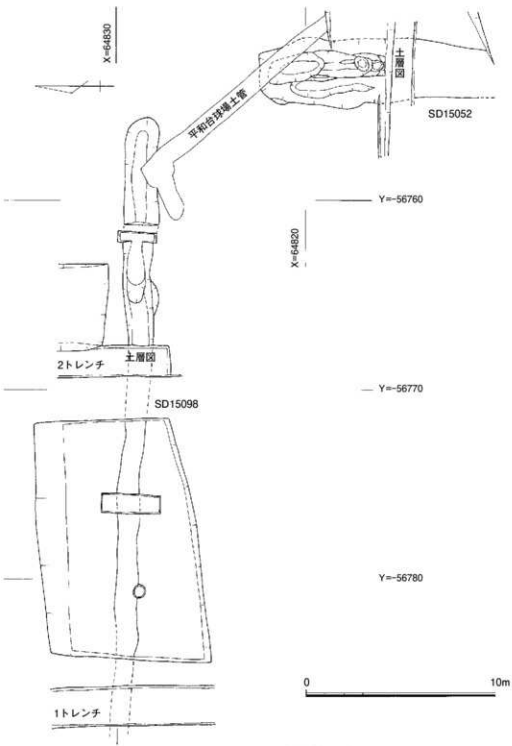


Fig.101　SD15052・15098実測図（1/200）

れていて、基本的に門の位置は後まで踏襲されていたと考えられるため、東館の正面経路は、東門の前面に当たるはずである。とすれば、陸橋状部分に設けられた出入口は、通用口的な性格を持ったということになるが、その是非については後考にゆだねたい。

SD15052は、南から北に13ｍ分を検出したが、南へはさらに続いていく。検出した部分の北側半分について、掘削による精査をおこなった。なお、南側の延長については、20次調査と39次調査第2区の間の未調査部分に想定されるため、これまでの調査では検出されていない。仮に、南館の規模が想定可能なⅡ期・Ⅲ期を参考に南館の東側全体を区画したものとすれば、SD15052の延長は100ｍ前後におよぶことが推測される。

SD15052は、調査した部分で幅340cm、深さ90cmを測る。土層断面の観察では、14層の下面、20層の下面、26層の下面、33層の下面、39層の下面など5回程度の掘り直しがあるようで、複雑な状況を呈している。42層・40層の下位の57～59層は遺構断面の形状としてはSD15052内の埋土と見たほうが違和感はなく、発掘調査時にもSD15052の埋土として掘削したが、土質、層序、層位的なつながりから、SD15052外の整地土層と共通点が多く、遺構外の一連の堆積とみなされる。

精査するに当たっては、層序が複雑であるため、鍵になる層を基準に大まかに分層して掘削し、遺物の取り上げを行なった。また、最下層部分の溝については、SD15052Bとして調査した。SD15052Bは、一見二段掘りした溝の下部の様であるが、土層図に見られるように当初の溝が一定程度埋まった後にその上から掘り込まれたことは明らかである。SD15052およびSD15052Bの底面は凹凸が激しく、区

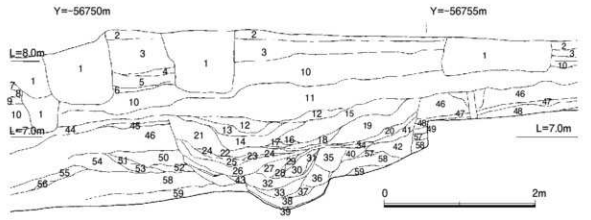


Fig.102　SD15052土層図(1/50)

1　攪乱
2　灰色砂質土
3　暗灰色土
4　白色粘土
5　黄白色粘土
6　灰色粘土
7　赤茶色粘土
8　黄色土
9　暗灰色土
10　暗灰色土
11　暗灰色土
12　濃褐色粘質土、炭粒を多く含む
13　褐色粘質土、炭粒まじり
14　黒褐色土、炭混じり
15　黒褐色土、炭・灰を多く含む、瓦片多い
16　灰赤褐色壌土質土、焼けた土、混じり物なし
17　黒褐色土、炭・灰まじり
18　暗灰色粘質土
19　茶褐色粘質土、風化頁岩小粒土混じり
20　炭・灰
21　黒褐色土、炭混じり
22　灰褐色土
23　暗灰色土
24　灰赤褐色壌土質土、焼けた土、混じり物なし
25　炭
26　黒褐色土、炭混じり、瓦多い
27　灰茶色粘質土、頁岩粒土混じり
28　灰色粘質土
29　明茶色粘質土、頁岩粒土混じり
30　明茶褐色粘質土
31　炭・灰
32　濃灰色粘土
33　茶褐色粘質土
34　褐色粘質土
35　茶色粘質土、瓦混じり
36　赤茶色粘質土、黄色の風化頁岩ブロック多く含む
37　赤茶色粘質土
38　茶色粘質土
39　暗灰色粘質土
40　赤茶色粘質土
41　褐色粘質土
42　暗灰褐色粘質土
43　灰色粘土
44　茶褐色粘質土
45　茶色粘土
46　茶色粘質土、白色の風化頁岩粒土を多く含む
47　褐色粘土
48　赤褐色粘質土
49　茶色粘土
50　濃茶色粘質土
51　茶色粘質土
52　赤茶色粘質土、赤色粒土を含む
53　灰色粘質土、黄色・白色の風化頁岩粒土を含む
54　赤茶色粘質土
55　茶色粘質土
56　灰褐色土
57　赤茶色粘質土、風化頁岩粒土混じり
58　茶色粘質土、白色の風化頁岩ブロック混じり
59　黄色粘質土、風化頁岩粒土を多く含む

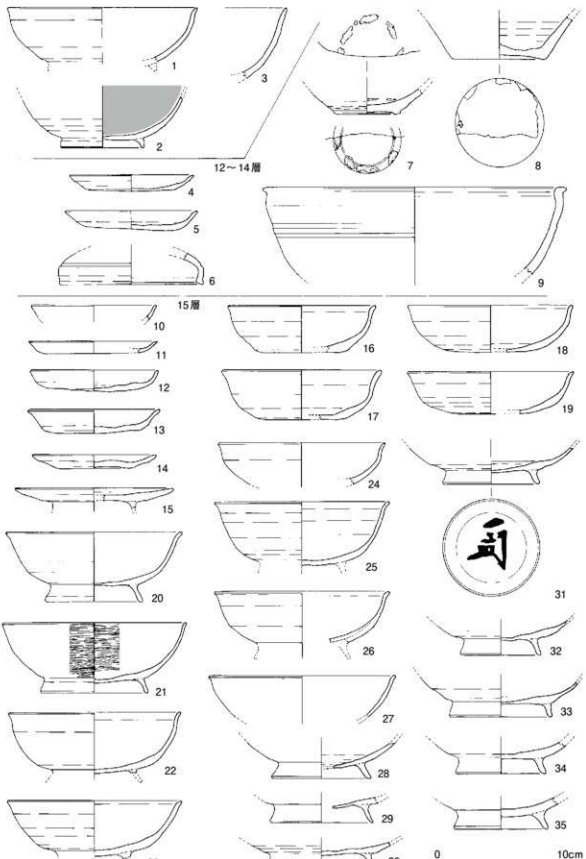


Fig.103　SD15052出土遺物実測図1 (1/3)

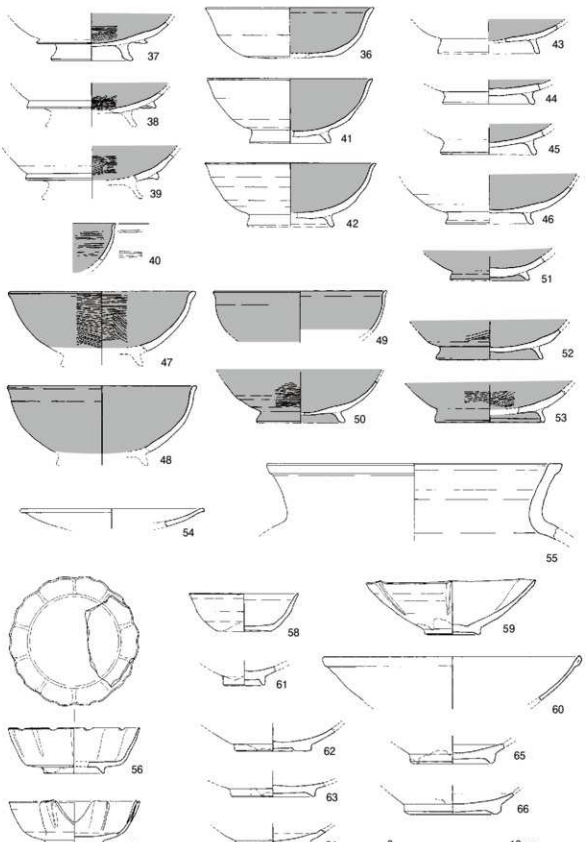


Fig.104　SD15052出土遺物実測図2 (1/3)

画を目的にした溝で排水を意図したものではなかったことが推測できる。

ＳＤ１５０５２出土遺物　Fig.103～113　　調査時に遺物を取り上げた土層ごとに報告する。

1～3は、分層せずに取り上げた遺物である。1は**土師器**碗で、外面は篦磨き、内面はコテ当てで平滑に仕上げる。2は、**黒色土器Ａ類**碗である。外面は横なで調整、内面の器壁は荒れているが研磨されたものと思われる。3は、**灰釉陶器**碗である。釉は内外面に刷毛塗りされる。

12～14層出土遺物（4～9）　4・5は、**土師器**皿である。底部は、回転篦切りされる。6～8は、**越州窯系青磁**である。6は、合子の蓋で、全面に施釉した後、口縁端面を平らに削っている。7は碗である。外底部は露胎で、高台と見込みには目跡が並ぶ。8は、壺の底部である。外縁に沿って目跡が残る。9は**褐釉陶器**の鉢で、緑茶色の釉を施す。

15層出土遺物（10～85・150～161）　10～35は、**土師器**である。10～15は皿、16～19は坏で、

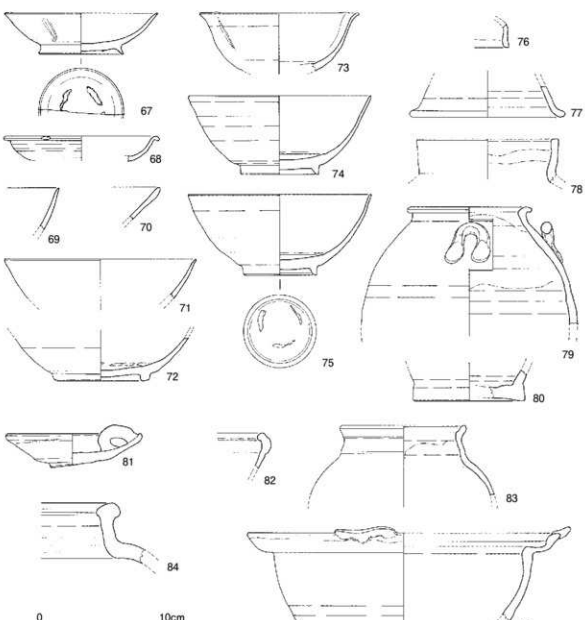


Fig.105　SD15052出土遺物実測図３(1/3)

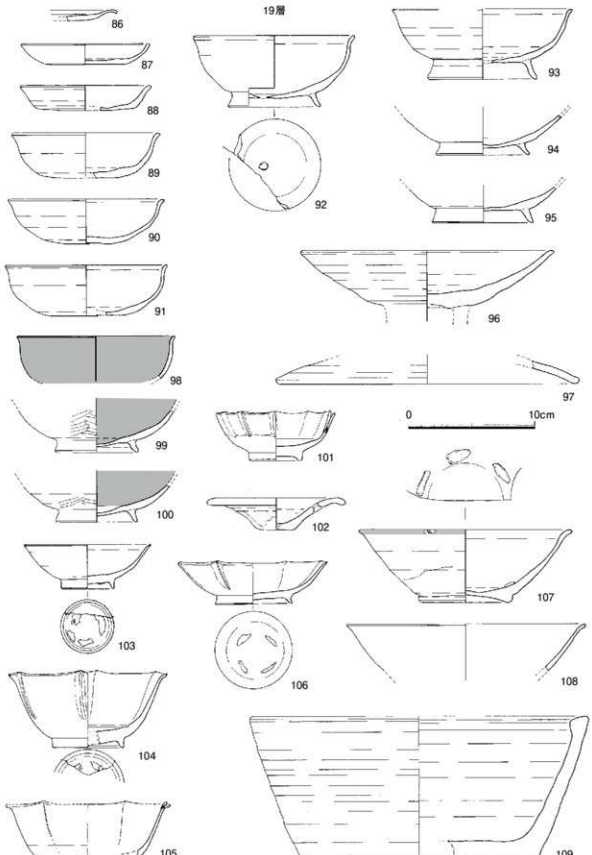


Fig.106　SD15052出土遺物実測図4 (1/3)

15には高台が付く。10～17は内外面とも横なで調整、18～19は、内面を研磨して平滑にする。すべて回転篦切りである。20～35は碗である。20・22・24・25・29・30・31・34は、内外面ともに横なで調整、23・26・27・28・35は内面を篦磨きなどで平滑に仕上げる。21の器表は、密に篦磨きされる。32・33は、器表が磨滅し、調整が確認できない。31の外底部には墨書が見られるが、判読はできない。36～46は**黒色土器A類**で、36は坏、37～39は托上碗、41～46は碗である。41・42は磨滅のため調整不明、他は内面を篦磨きする。なお、40の外面には横なで調整に重ねて、まばらに篦磨きが認められる。47～53は、**黒色土器B類**碗である。内外面とも密に篦磨きを施す。54は**灰釉陶器**の皿である。刷毛塗りで施釉する。55は、**須恵器**の甕である。

56は、**青白磁**の輪花小鉢である。高台から外底部は露胎とする。57～66は、**白磁**である。57は輪花小鉢、58は平底皿、59は全体を六弁に象った輪花皿、60～66は碗である。62は、蛇の目高台に作る。67～80は、**越州窯系青磁**である。67・68は皿、69～75は碗である。67・74・75には、外底部の高台内側に重ね焼きの目跡が残る。76は合子の蓋で、口縁端部を露胎とする。77は、香炉の脚であろう。

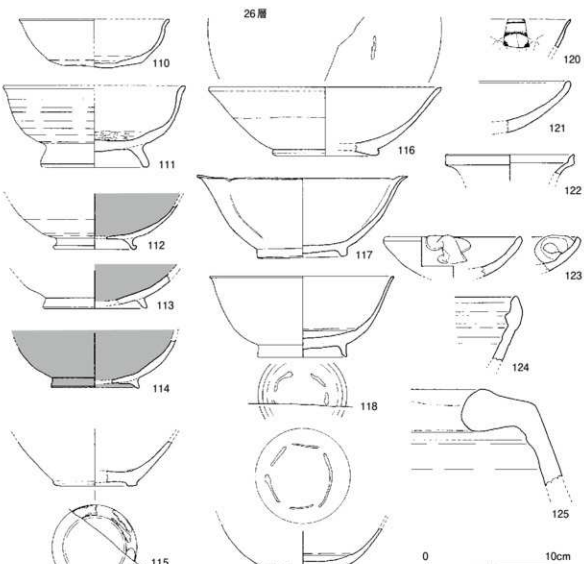


Fig.107　SD15052出土遺物実測図5(1/3)

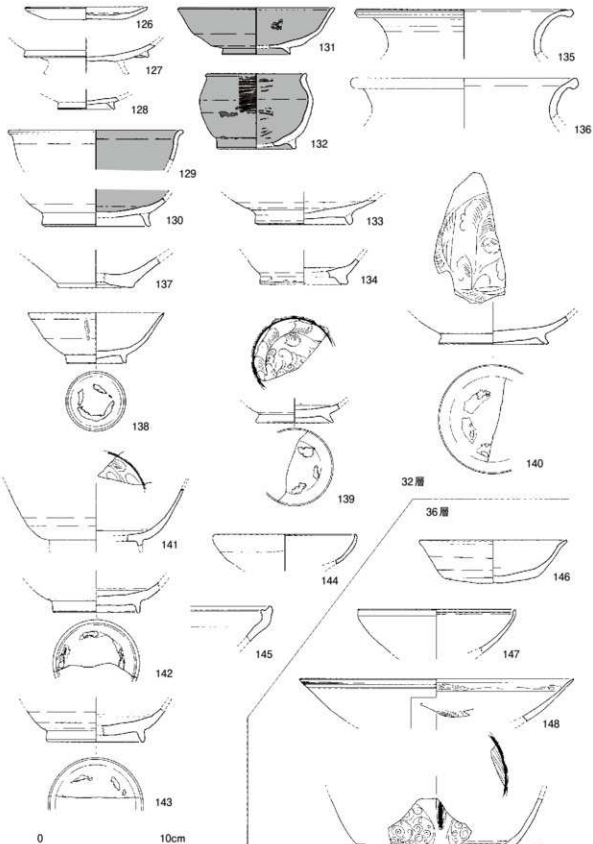


Fig.108　SD15052出土遺物実測図6（1/3）

78～80は、壺である。79には耳が貼り付けられるが、遺存部位が小さく、耳の個数は不明。81～85は**陶器**である。81は褐釉陶器の灯明皿で、口縁外面から内面にかけて緑褐色の不透明釉を漬け掛けする。底部は、回転糸切りである。82は無釉陶器の鉢である。胎土は粗いが焼き締まる。83は褐釉陶器の瓶、84は甕である。85は褐釉陶器の鍋型の鉢で、口縁から内面に緑褐釉を施す。扁平な耳がつき、おそらく双耳になると思われる。

150～161は、**瓦**である。150は鬼瓦の外縁の破片である。151～153は軒丸瓦、154～156は軒平瓦である。157～161は、平瓦である。158～160は、記号文様を叩打する。161には、叩き目の上から細沈線で、弧を描いて立ち上がる茎とその先端に頭を垂れる花弁のような文様が刻まれており、草花文を描いたものと思われる。ただし、平瓦の凸面に描かれているため、屋根に葺けば下面となって隠れてしまうし、細線であるため、離れればほとんど認識できない。瓦工人の手遊びであろう。

19層出土遺物（86～109・162～165）　86～97は**土師器**で、86～88は皿、89～91は坏、92～95は碗、96・97は灯火器である。92の底部には、底からの穿孔がみられる。96の内面には、部分的に煤が付着する。98は**黒色土器B類**碗、99・100は**黒色土器A類**碗で、内外面を密に篦磨きする。

101は、**白磁**の輪花小鉢である。102～108は、**越州窯系青磁**である。102は蓋、106は皿、103～105、107・108は碗である。103・104・106は高台内側に目跡が残る。109は**無釉陶器**のこね鉢である。内底部は、つるつるに磨滅している。

162～165は、**平瓦**である。163は「佐」の左字、164・165は「賀茂」の叩打文字を持つ。

20層～36層出土遺物（166～169）　166には記号風の叩打痕が見られる。167～169は、「賀茂」の叩打瓦である。

26層の出土遺物（110～125・170）　110・111は、**土師器**である。111は、内外面を横なで調整、見込みを指削りする。112・113は**黒色土器A類**碗、114は**黒色土器B類**碗である。内外面とも密に篦磨きする。

115～122は、**越州窯系青磁**である。120は、外面に片切り彫りで花弁を描く。123～125は、**陶器**である。123は、褐釉陶器の灯明皿である。口縁部から内面にかけて施釉する。124は、**無釉陶器**のこね鉢である。125は褐釉陶器の甕で、口縁端部の内側を除いて施釉する。

170は、鴻臚館式の**軒平瓦**である。

32層出土遺物（126～145・171～177）　126～128は、**土師器**である。126は皿で、底部は回転篦切りする。127は托上碗で、内面を篦磨きする。129・130は**黒色土器A類**碗で、外面は横なで調整、内面は密に篦磨きする。131・132は、**黒色土器B類**である。131は碗で、内外面を密に篦磨きする。132は小型壺である。内外面は密に篦磨きする。外面には点々と煤が付着する。133・134は**灰釉陶器**である。体部に緑灰色の釉を漬け掛けする。134は壺の底部で、高台から内側を露胎とする。135・136は、**新羅陶器**である。胎土はきわめて精良で小豆色を呈するが、器表面は濃青灰色で須恵質に焼成される。137～144は、**越州窯系青磁**である。137は、全面施釉の蛇の目高台碗である。139～141の見込みには、毛彫りで草花文が描かれる。145は、**無釉陶器**のこね鉢である。

171～177は**瓦**である。171～173は軒瓦、174～177は平瓦である。174の凸面は、板状工具で強く表面を掻いた上から、軽く平行叩きがなされている。175も、両面ともに板状工具で強く掻いており、叩き痕跡は認められない。

36層の出土遺物（146～149・178～184）　146は**土師器**坏、147～149は**越州窯系青磁**である。148は碗で、内面の口縁部直下に文様帯をめぐらし、体部内面には草花文を描く。149は鉢であろう。輪花状に分割した体部の外面と見込みに毛彫り文様を施す。

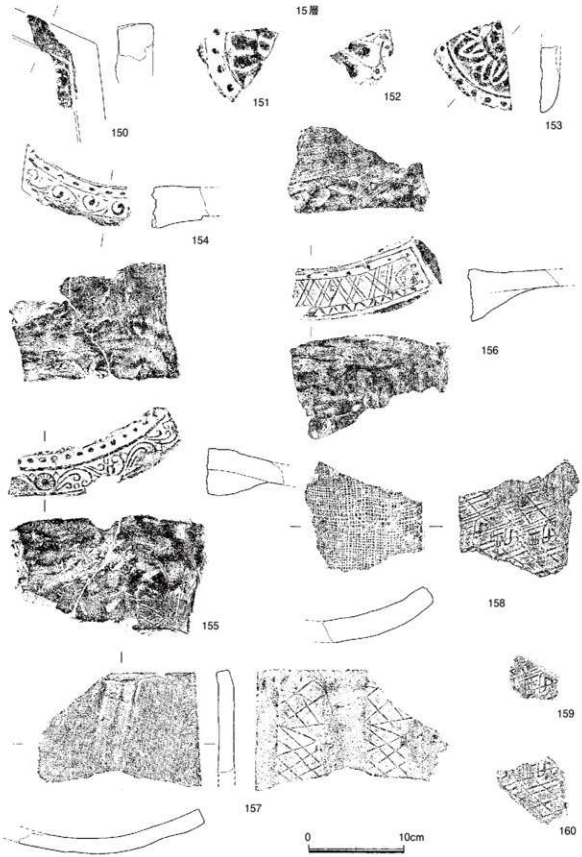


Fig.109　SD15052出土遺物実測図7（1/4）

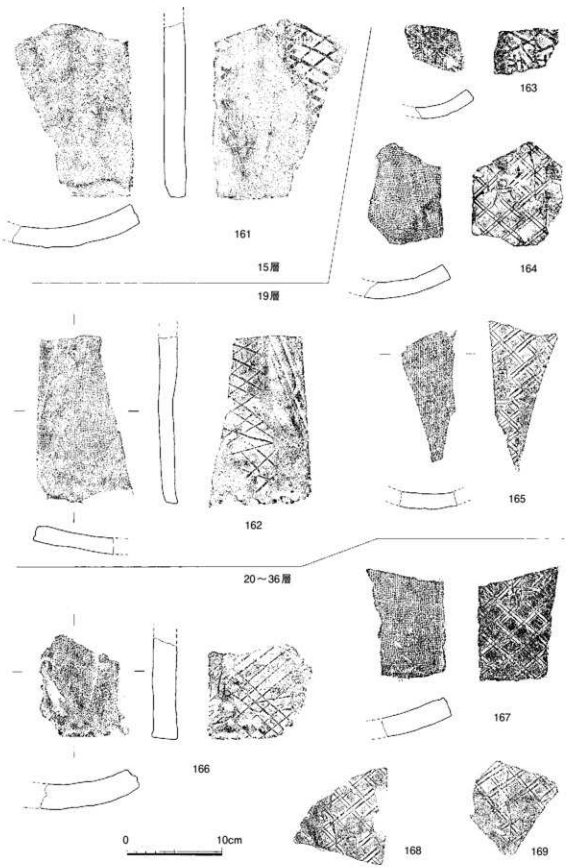


Fig.110　SD15052出土遺物実測図8 (1/4)

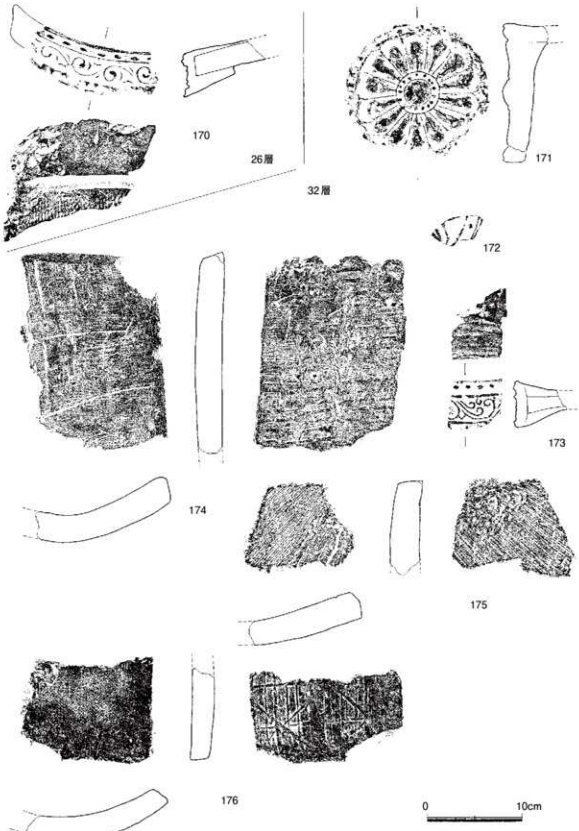


Fig.111　SD15052出土遺物実測図9(1/4)

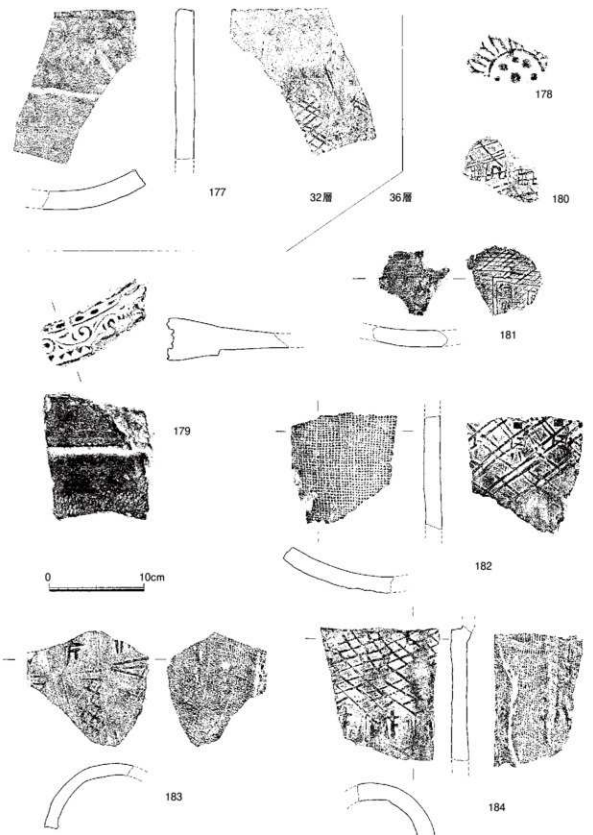


Fig.112　SD15052出土遺物実測図10 (1/4)

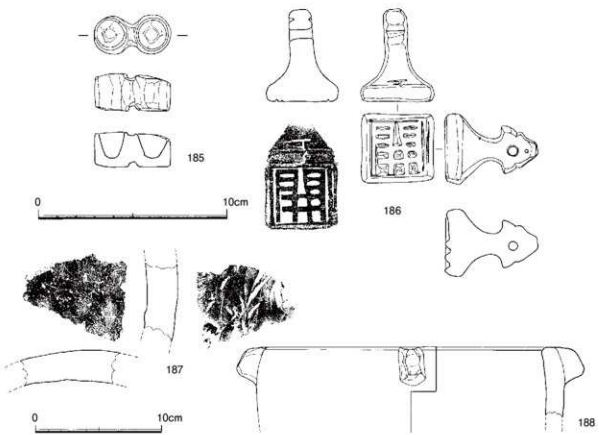


Fig.113　SD15052出土遺物実測図11（185・186は1/2、187・188は1/3）

178～184は、**瓦**である。**178**は軒丸瓦、**179**は鴻臚館式軒平瓦である。**181**は、複線で四角く囲んだ中を田字型に4区分し、「伊貴作瓦」の4文字を配する叩打文字痕跡を持つ。**182**は「賀」、**183・184**は「佐」の叩打文字がみられる。

185～188は、**滑石製品**である。**185**は臼型を二個連結した形状を取るが、用途不明。**186**は26層から出土した**石印**である。下面は3．6～3．7cmの正方形で、その中3．3cm四方を印面とし「開」の一字を刻み出す。紐は莟紐で、鍋印の形態を忠実に模している。また、一側面には、印面の天地を示すため、「上」の刻字がある。石材は滑石であるが、比較的硬質で、滑石特有のズルズルとした柔らかさは感じられない。**187**は、石鍋片である。破面を削って整えようとした形跡はないが、本来煤けていた筈の外面はきれいに削り落とされており、転用される前の未製品と考えられる。**188**は、縦耳の石鍋である。内外面の削りは丁寧で、平滑に整えられる。口縁端部以下の外面には、べったりと煤が付着している。

以上、遺物の取り上げに即して出土層位ごとに報告したが、各層の出土遺物で顕著な様相の差異は認められず、上層から下層まで時期差はほとんどないものと考えられる。数回にわたる掘りなおしも、すべて鴻臚館第Ⅴ期の幅の中におさまるものと見て大過ないだろう。

ＳＤ１５０９８　Fig.101・114、PL.15・16

鴻臚南館の北を画する東西溝である。鴻臚北館と南館とを隔てる東西堀（＝谷）の肩に掘られたもので、35m分を調査した。**Fig.114**の40～49層は鴻臚南館の造成にともなう盛土整地層であるが、51～57層は斜堆積層であり、谷の傾斜に沿って堆積したことがうかがわれる。盛土整地層は、おそらく鴻臚館第Ⅱ期の布掘り遺構に先行する造成土層であり、第Ⅱ期の縁辺部がそのまま第Ⅴ期まで継承され

て、区画溝であるＳＤ15098が掘られたものと考えられる。

なお、床面まで掘削して調査したのは2トレンチ東側部分であり、1トレンチと2トレンチの間は平面確認にとどめ、遺物の取り上げもおこなわなかった。ＳＤ15098は、調査した範囲で、幅95～175cm、探さ75～140cmをはかる。3回程度の掘り直しが想定できる。

ＳＤ15098は、西に行くと次第に幅を減じ浅くなっていく。少なくとも、1トレンチの西側まで続くものと思われるが、平成11年度調査では検出していない。ただし、平成11年度調査区西端近くの、Ｘ＝64833m付近で、谷を埋めた造成土において段落ちを検出しており、ＳＤ15098の延長に当たる可能性がある。そうであるとすれば、ＳＤ15098は、90ｍ以上にわたって南館の北辺を区画していたことになる。

ＳＤ１５０９８出土遺物　Fig.115～118　出土遺物は、主として13層と埋土下位において出土したが、遺物の様相としては差異がなく、層位によって時期差は認められなかったので、器種別に報告する。

1は、**土師器**の坏である。体部は磨滅して、調整痕が残らない。底部は回転箆切りする。**2**は**緑釉陶器**の碗である。横なで調整に、深緑色～暗緑色の釉が薄くかかる。胎土は淡褐色で精良、焼成はあまく土師質となる。周防産緑釉陶器であろう。

3～**19**は、**越州窯系青磁**である。**3**～**13**は、碗である。**3**は、蛇の目高台で、全面に施釉した後、蛇の目部分の釉を削り取って露胎とする。釉調にムラはなく、精製品である。**4**～**9**は、高台畳付きに目跡が付くタイプ、**10**～**13**は、高台の内側に目跡がめぐるタイプである。**4**～**8**・**10**～**13**は全面施釉の精製品、**9**は体部下位から高台を露胎とする粗製品である。**12**は口縁内面に、毛彫りの文様帯をめぐらせる。**13**は、外面に片切り彫りと毛彫りで花文を描く。全面施釉の優品で、高台内側に目跡がめぐる。**14**は托であろう。鍔を欠くが、遺存部位の角度から類推して、鍔は大きくラッパ状に開くものと思われる。**15**は灯明皿の坏部分と思われる。煤や油煙の付着等は見られず、使用した痕跡は認められない。外面は脚台の辺りから露胎となる。**16**は、合子の蓋である。全面施釉した後、口縁端部を平坦に削って露胎とする。**17**は、香炉である。全面に施釉した後、蓋受け部の釉を削り取って露胎としている。脚部ではなく、体部の底に目跡がめぐる。**18**・**19**は壺である。**18**には取っ手が付くが、折損している。**19**の高台端面には、目跡が認められる。

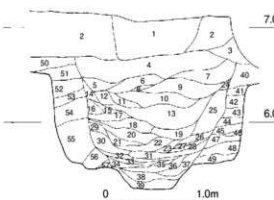


Fig.114　SD15098土層図（1/40）

1　攪乱
2　暗灰褐色土
3　褐色土
4　茶褐色土
5　暗褐色土、粘土ブロック多い
6　暗褐色土
7　赤茶色土
8　茶色粘土
9　黄灰色土
10　赤茶色粘質土
11　暗褐色土
12　褐色土
13　暗灰褐色土、瓦片を多く含む
14　暗褐色土
15　茶褐色土
16　灰褐色土
17　茶灰色土
18　暗褐色土
19　赤褐色土、風化頁岩ブロックを多く含む
20　暗褐色土
21　褐色土、炭多く含む
22　茶褐色土、風化頁岩ブロックを多く含む
23　茶色粘質土、風化頁岩ブロックまじり
24　灰色土
25　灰茶色土
26　茶褐色土
27　茶色土
28　赤茶色土
29　暗褐色土
30　暗褐色土、炭粒多く含む
31　明茶色土
32　褐色粘質土
33　暗灰色粘質土
34　茶褐色粘質土
35　暗褐色土、炭粒まじり
36　茶褐色土
37　黄茶色土
38　茶色粘質土
39　灰茶色土
40　褐色土
41　茶色土
42　黄茶色土
43　黄褐色土
44　黄灰色土
45　黄茶色土
46　茶色粘土
47　黄茶色土
48　黄灰色土
49　黄灰色土
50　茶色土
51　褐色土
52　灰褐色土
53　褐色土
54　灰黄色土、風化頁岩ブロックを多く含む
55　茶色土、大きい目の風化頁岩ブロックを多く含む
56　赤茶色土
57　黄灰色土

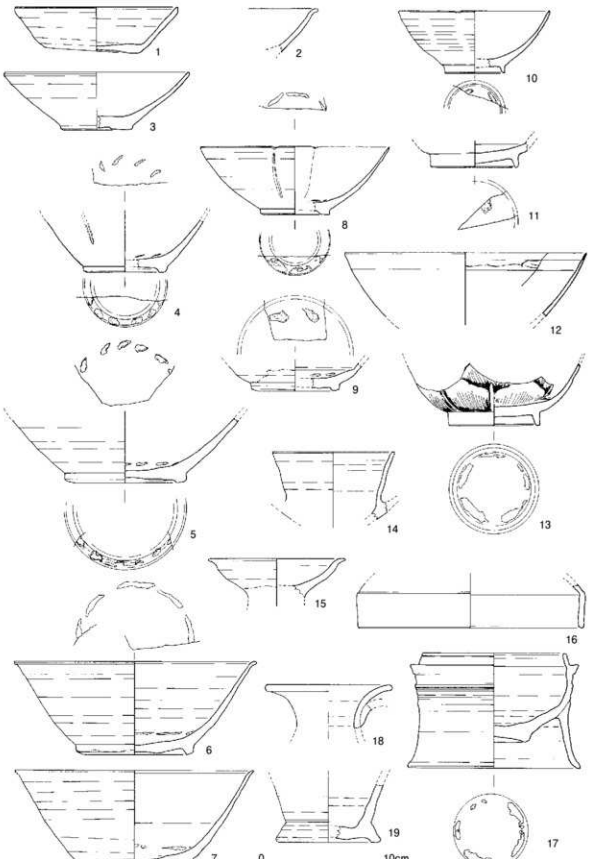


Fig.115　SD15098出土遺物実測図1 (1/3)

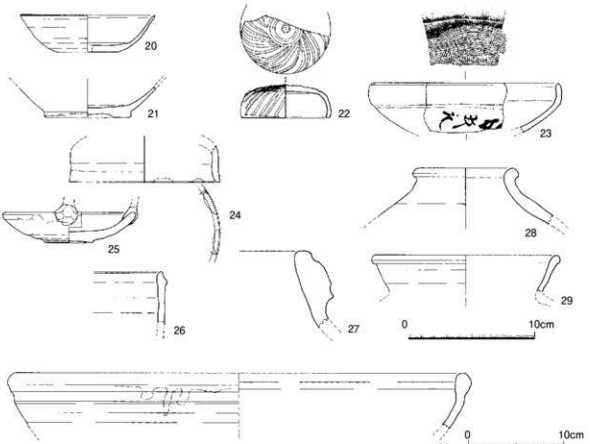


Fig.116　SD15098出土遺物実測図2（30は1/4、他は1/3）

20～22は**白磁**である。20は、平底皿で、底部は露胎となる。21は、蛇の目高台の碗である。畳付から内側は、露胎となる。22は合子の蓋で、渦状に凹線を刻む。

23～30は**陶器**である。23は卸皿で、薄い茶褐色のきめ細かい胎土に、内面全体から口縁部外面にかけてベージュ色の化粧土を掛け、口縁部のみ緑褐釉を漬け掛けする。内面には7本単位の櫛状工具で、卸目を刻む。外面の露胎部分には墨書が見られるが、判読できない。24は合子の蓋で、黄味を帯びた褐色釉をかける。25は、灯明皿である。口縁部を挟み込んで、取っ手様に粘土が貼り付けられているが、灯心挟みであろう。口縁部から内面に緑褐色の釉を施す。26は鉢である。緑褐色の釉を施釉する。口縁は直立し、筒型を呈すると考えられる。27は、無釉陶器の甕である。胎土は粗いが、焼き締まって硬い。28は瓶、29は壺である。28には灰緑色の、29にはオリーブ色の釉が薄くかかる。30は鉢である。口縁上端を境にして、外面は露胎、内面には褐釉を施す。口径49.6cmに復元される大型の鉢である。

31～43は**瓦**である。31はのし瓦である。両小口を箆で切りそろえ、幅9.5cmの長方形に整える。一端を欠いており、長さは不明である。内外面ともに、板状工具で強く斜めに掻かれている。32～38は平瓦である。37・38は「賀茂」の叩打文字瓦である。39・40には、「賀」の左字がみとめられる。41～43は、丸瓦である。41・42は、陰文の格子叩きで、「平井」の叩打文字を持つ丸瓦の破片と思われる。43には丸瓦の背の脇側に文字風の線刻があるが、判読不能である。

以上の出土遺物から、11世紀前半の溝であり、前述したSD15052と同時に存在したことは明らかである。　（大庭　康時）

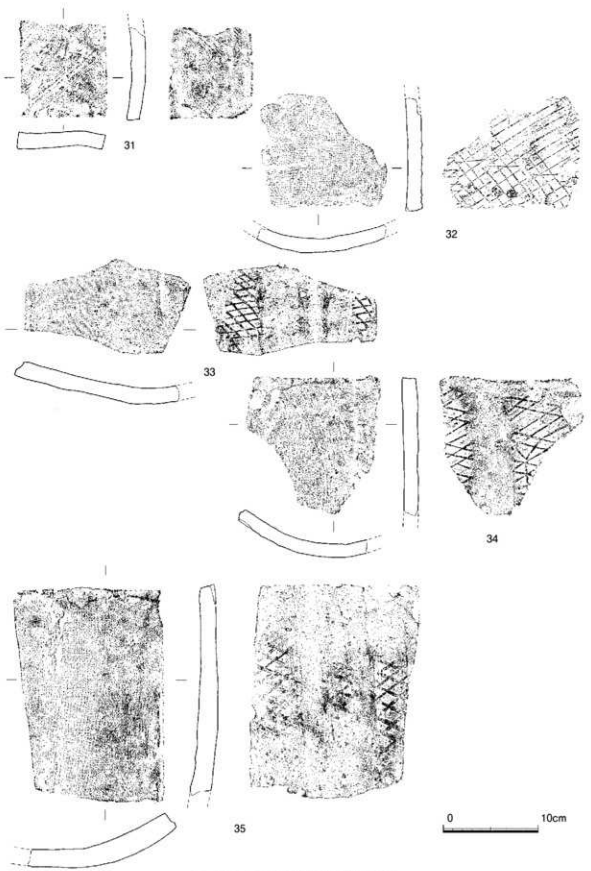


Fig.117　SD15098出土遺物実測図3 (1/4)

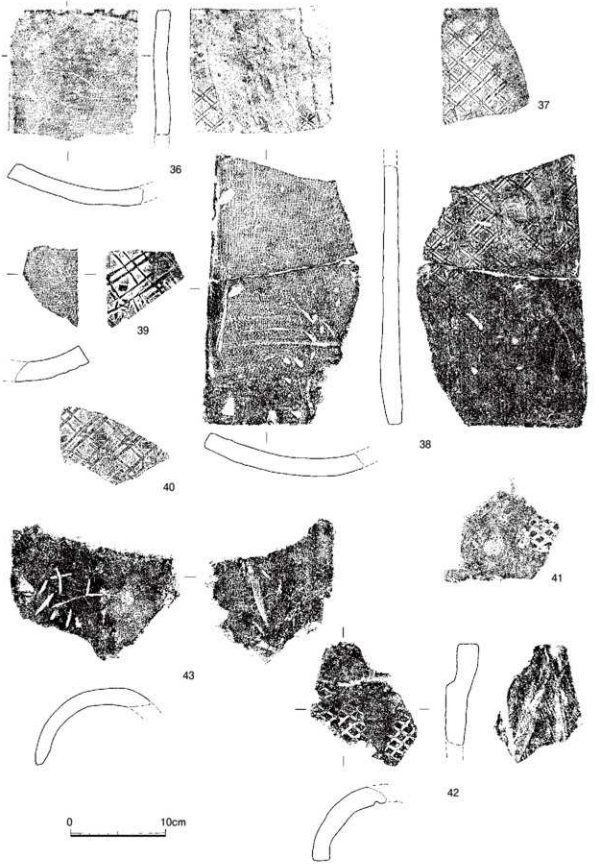


Fig.118　SD15098出土遺物実測図4 (1/4)

6．詳細時期不明の古代遺構と出土遺物

1）道路状遺構

ＳＦ２７２　Fig.119、PL.17

道路状の遺構で、両側に平瓦を半裁したものを立て並べている。幅1.7ｍ。長さ6.5ｍを確認した。幅20㎝深さ15㎝以上の掘り方の内側に瓦を立てる。東西両側は削平消滅している。時期比定が困難で、他の建物との関連が不明であるが、主軸方位は第Ⅱ・Ⅲ期建物と等しい。

SF272の出土遺物はない。瓦は埋め戻して保存している。

2）建物・柱列・柱穴

SB1070を除き、断片的な建物・柱列、単独の柱穴等の遺構である。なお第５次調査区（8910）の西端で検出し既報告でSA311としている柱列は、攪乱坑（近代以降の欄か）であることを明記しておく。

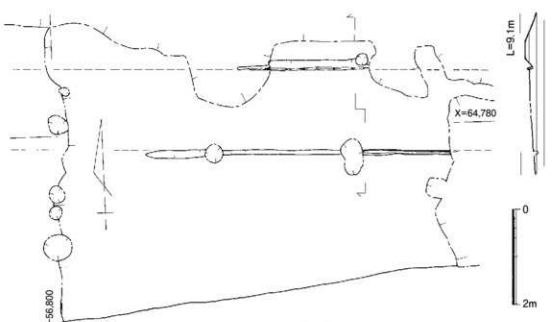


Fig.119　SF272実測図（1/80）

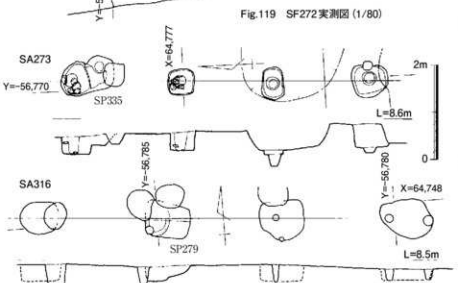


Fig.120　SA273・316実測図（1/80）

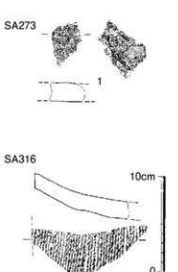


Fig.121　SA273・316出土遺物実測図（1/4）

ＳＡ２７３　Fig.120

第9次調査区（9236）の東端に検出した。4本の柱穴が並ぶ。柱間は北から233、196、203㎝で、全長635㎝。柱穴掘り方は隅丸方形を基調とし、径40～80㎝、深さ35～60㎝。主軸方位は座標北から3°東偏する。時期や他の建物との関係は不明である。

ＳＡ２７３出土遺物　Fig.121

柱穴SP335から単純格子目叩き（格子3A-b1）の平瓦等が少量出土したのみである。**1**は**平瓦**で、斜格子目叩きの格子の中に「×」が入る。出土遺物が少なく詳細時期不明だが、古代の遺構であろう。

ＳＡ３１６　Fig.120

第6次調査区（9005）の南半に検出した柱列で、4本の柱で構成される。全長は7.8m で、柱間の平均は2.6m。柱穴は不整な隅丸方形ないし楕円形プランをなし、径70～110㎝。柱穴の一つを半截しており、深さ30㎝。主軸方位は座標北から86°西を向く。詳細時期や他の建物との関係は不明である。

ＳＡ３１６出土遺物　Fig.121

土師器1点と瓦の小片が少量出土した。**2**は**平瓦**で縄目叩き。SP279出土。

詳細時期不明だが、古代の遺構であろう。

ＳＰ８２４・８２８・８２９　Fig.122

第11次調査区（9420）で検出した礎石掘付け穴とみられる遺構である。版築状の整地層の分布範囲内に位置し、この東隣に道路状遺構 SF272がある。整地層の層序はSB324の項（14頁）で説明しており、SB324と同様、当遺構も地山面に掘り込まれている。

全形が分かる柱穴はないが、掘り方は隅丸方形プランをなすとみられ、径1.4m前後、深さ15㎝程度である。SP824の底面にはＢ５サイズほどの三角形板石が円形に配置されて残る。

ＳＰ８２４・８２８・８２９出土遺物　Fig.123

越州窯系青磁、近世の瓦質土器、陶磁器が少量出土した。**1**は**越州窯系青磁碗**で、福建省懐安窯の製品。**2・3**は近世の**染付碗**である。**4・5**は**丸瓦**。**6～10**は**平瓦**で、6～8は斜格子目叩き、9・10は縄目叩きを施す。4・6・7・9は SP824、1～3・5・8・10はSP829から出土した。

調査区壁近くで遺構を検出しており、遺物の混入があったとみられる。

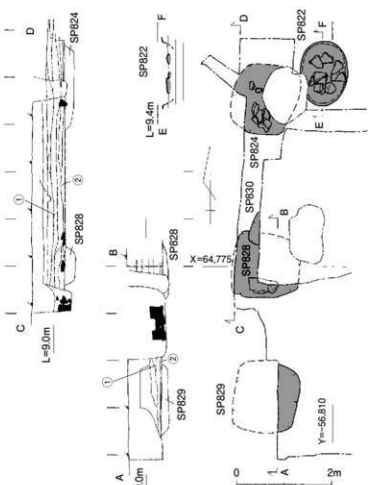


Fig.122　建物遺構 SP822･824･828･829･830実測図（1/80）

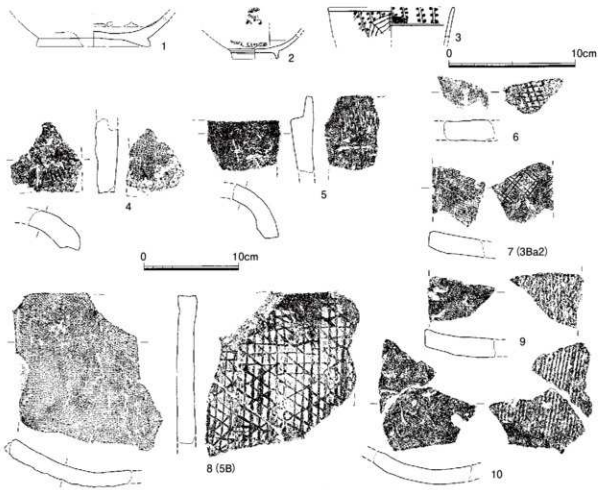


Fig.123　SP824・829出土遺物実測図（1～3は1/3、他は1/4）

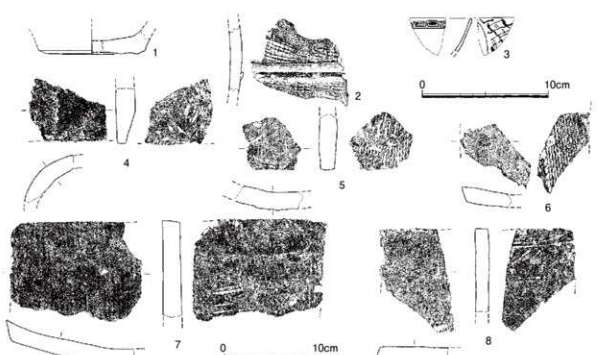


Fig.124　SP822・830出土遺物実測図（1～3は1/3、他は1/4）

ＳＰ８２２・８３０　Fig.122

SP822は上記 SP824・828・829を覆う風化頁岩土整地層上面で検出した。1ｍ×1.3ｍの楕円形の掘り方にＡ４サイズほどの三角形の板石が円形に配置され、礎石据付け掘り方であると理解される。深さは15㎝以上残り、礎石は残らない。埋土は頁岩風化土である。**SP830**は整地層下の赤褐色粘質土上面で検出した遺構で、SP828を切る。隅丸方形を呈し深さ5～10㎝ほどが残る。一部の検出に留まる。

ＳＰ８２２・８３０出土遺物　Fig.124

1は浙江省産**越州窯系青磁碗**。2は**高麗陶器甕**で外面に小さな突帯が巡る。3は**近世染付碗**。4は**丸瓦**。5～8は**平瓦**で、5・6は縄目叩き。7・8はナデ調整。1～5・7がSP822、6・8がSP830出土。

調査区壁近くで遺構を検出しており、遺物の混入があったとみられる。

ＳＢ１０７０　Fig.125、PL.17

第17次調査（9910）で風化頁岩岩盤上に検出した。北側は野球場建設時に破壊されている。東西に長い掘立柱建物で、桁行３間、梁行２間。北東角の柱穴一つを失い、いま一つは削平段差壁面に痕跡を残す。他の柱穴も残りが極めて悪く、15～数㎝の深さであり、強い削平を受けている。桁行柱間は東から182、140、164㎝、梁行柱間は北から166、187㎝。柱穴プランは楕円～隅丸方形で径60～90㎝。柱痕跡は認められない。主軸方位は座標北から10°東偏する。

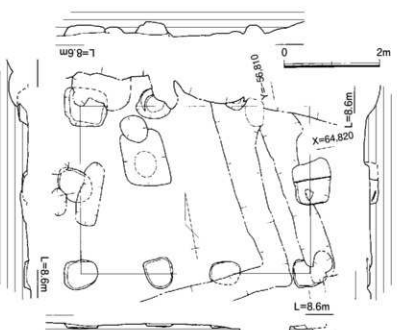


Fig.125　掘立柱建物 SB1070実測図（1/80）

Fig.126　SB1070出土遺物実測図（1/3）

ＳＢ１０７０出土遺物　Fig.126

東辺の中央の柱穴から須恵器片が１点出土したのみである。**1**は**須恵器甕**で、外面に平行叩き、内面に当て具痕が残る。遺構の時期は不明である。

ＳＫ１０３４　Fig.127、PL.17

SB1070と同様、旧平和台野球場内の外野席にあたる部分で検出した。風化頁岩岩盤に掘り込まれている。北側は野球場建設時に削平されている。円形プランで径75×90㎝、深さ20㎝。断面皿状を呈する。底面に径約25㎝の柱穴状の浅い掘り込みがある。掘り込みの底面には平らな礫と瓦片が敷かれており、礎板と思われる。周辺遺構との関連は不明である。

ＳＫ１０３４出土遺物　Fig.128

須恵器、土師器、近世陶磁器、瓦が少量出土した。**1**は**土師器坏**。**2**は近世**刷毛手陶器瓶**である。**3**は**丸瓦**で格子目叩き。**4**は**平瓦**で縄目叩きを施す。

近世遺物は破壊時の混入であろう。遺構の詳細時期は不明である。

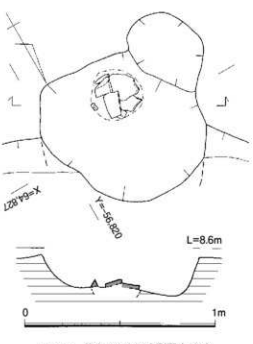


Fig.127　柱穴 SK1034実測図 (1/20)

ＳＫ１０７１　Fig.129、PL.17

SK1034と同じく、野球場建設による消滅を免れた遺構である。やや東西に長い隅丸方形プランで、東西0.9ｍ、南北0.8ｍ、深さ25㎝。風化頁岩岩盤を一段掘り込み、底面中央部を皿状に浅く窪ませる。遺構検出面で径20㎝の柱抜き痕が確認されたが、掘り下げた結果は、抜き痕の下から完形の磚が出土した。磚の周囲には瓦片が散在する。SK1075と組みになる遺構であろう。

ＳＫ１０７１出土遺物　Fig.130

瓦のみが出土した。**1**は**素文磚**で、完品である。**2**は**平瓦**で縄目叩きを施す。

土器が出土していないため詳細時期は不明だが、奈良時代の遺構の可能性がある。

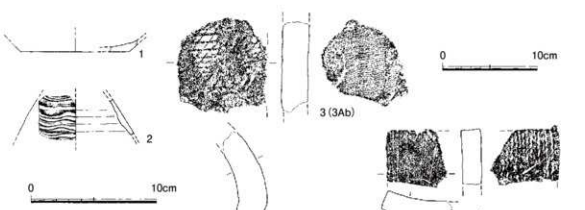


Fig.128　SK1034出土遺物実測図 (1・2は1/3、他は1/4)

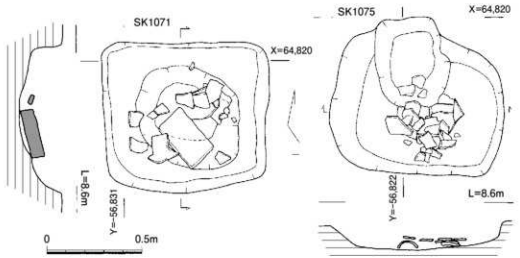
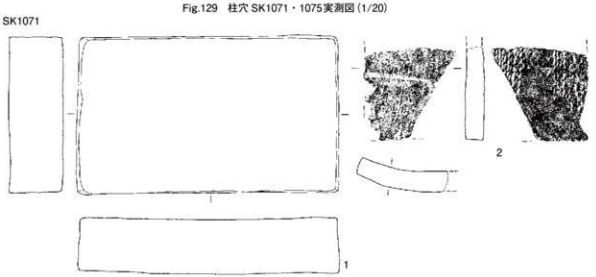


Fig.129　柱穴 SK1071・1075実測図 (1/20)



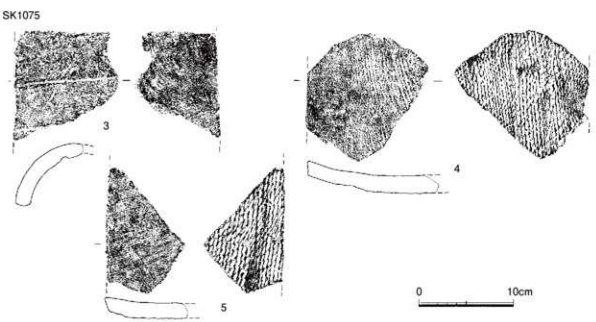


Fig.130　SK1071・1075出土遺物実測図 (1/4)

ＳＫ１０７５　Fig.129、PL.18

SK1071と同じく、野球場建設による消滅を免れている。東西に長い隅丸長方形プランで、東西0.9ｍ、南北0.7ｍ、深さ15㎝。断面皿状を呈し、底面に礫と瓦を平坦に敷いている。風化頁岩岩盤に掘り込まれており、後世のピットにより一部破壊を受ける。

掘り方形状と方位・規模が類似するSK1071とSK1075を結んだラインは、第Ⅱ期布掘り塀や第Ⅲ期礎石建物群と方位が等しく、これらの建物群を構成する遺構の一つと見て間違いないものと考えられる。南側の礎石建物群の北端とは約33ｍ離れており、遺構面の標高は約50㎝下がっている。

ＳＫ１０７５出土遺物　Fig.130

少量の瓦のみが出土した。**3**は**丸瓦**でナデ調整する。**4・5**は**平瓦**で縄目叩きを施す。

土器が出土していないため、遺構の詳細時期は不明だが、平安時代には下らない可能性がある。

ＳＫ１０７９　Fig.131、PL.18

SK1075と同じ風化頁岩の遺構面上にある。軍隊建物建設時の整地と考えられる整地土の下面で検出した土坑で、北側を大きく破壊されている。現況で東西2.0ｍ、南北0.9ｍ以上。深さ20㎝の皿状の土坑の底面に、径70㎝、深さ50㎝の円形プランの柱穴を掘っている。柱穴の最上面には多量の瓦が堆積する。柱穴の覆土は風化頁岩掘削土で、瓦を少量含む茶褐色粘土が混じる。

ＳＫ１０７９出土遺物　Fig.132

ごく少量の須恵器、土師器の他、コンテナ2箱分の瓦が出土した。

1は**土師器椀**である。**2・3**は**須恵器甕**で、2は外面平行叩き、3は外面格子目叩きである。

4は**丸瓦**で格子目叩き。**5～11**は**平瓦**で、5～10は格子目叩き、11は縄目叩きを施す。

平安期の遺構とみられるが、詳細時期は不明である。

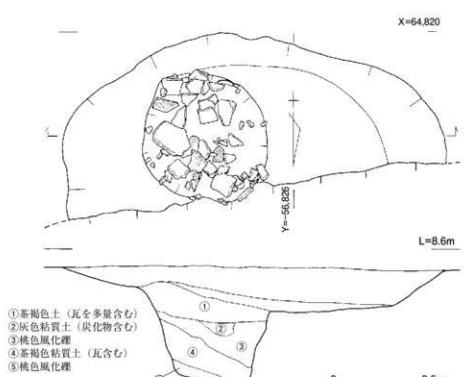


Fig.131　土坑 SK1079実測図（1/20）

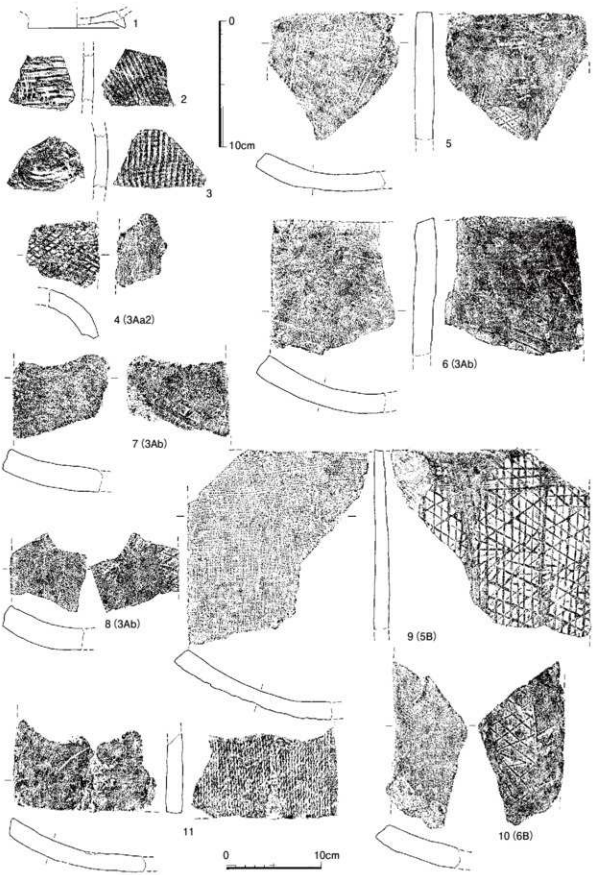


Fig.132　SK1079出土遺物実測図 (1～3は1/3、他は1/4)

3）基壇的役割の斜面

ＳＸ１０３７（＝ＳＢ１１） Fig.133

第３次調査（8747）で検出したSB11と同一の遺構である。風化頁岩の地山を削り出した基壇状の遺構であるが、削平が著しく、後世の攪乱が多数ある。段落ち部分は東西に直線的に伸びており、段の北側は斜面となり、ここには軒よりずり落ちたような状態で瓦が約３ｍの幅で堆積している。段落ち下の最も深い部分は、基壇とみられる面より約50㎝深く、断面Ｕ字形の溝状をなしており、基壇に伴う雨落ち溝と考えられる。江戸時代の建物、及び陸軍兵舎と重複しており、断面図では③層までが江戸時代の整地層とみられ、④・⑤層が溝状をなす部分で、炭混じりの暗褐色粘質土と多量の古代瓦が堆積している。⑥層より以下は風化頁岩ほぐし土を主体とする古代の整地層と考えられる。遺物は鴻臚館跡に関連する瓦がほとんどを占めるが、直上には福岡城築城時の盛土が被る。よって瓦の堆積自体は中世末の段階のものであろう。

第Ⅲ期礎石建物SB50を、第Ⅱ期中軸線で折り返すと、ちょうどSX1037の内側（南側）に納まる位置に来ることからみて、第Ⅲ以降の建物基壇とみて間違いないものと考えられる。

ＳＸ１０３７出土遺物 Fig.134

須恵器、土師器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器）、近世陶磁器、多量の瓦が出土した。SB11出土遺物については本報告済み（『鴻臚館跡Ⅰ』）であり、イスラム陶器なども出土している。

1は須恵器小壺である。**2～4は須恵器甕**。3は外面格子目叩き、内面には平行文と円弧文の当て具痕。4は外面平行叩き、内面も平行当て具痕が残る。**5は黒色土器Ａ類椀**である。

6～11は越州窯系青磁である。6・7は浙江省産の碗で、いずれも外面は露胎とする。**8～11は福建省懐安窯**の製品で、**8は碗、9は盤口壺、10・11は耳付壺**である。**12**は北宋早期**景徳鎮窯白磁碗**で、外面に陽刻蓮弁文を施す。

13・14は近世陶磁器で、**13は染付碗、14は青灰色釉陶器土瓶**である。

15～17は軒平瓦で鴻臚館式（635型式）。**18**は近世の**巴文軒丸瓦、19も近世瓦**で凸面に文字を押印する。

福岡城築城の造成土が直上に被ることから、遺構自体は中世末まで地表に露出していたものと考えられる。近世遺物は陸軍兵舎建設などに伴う混入品である。

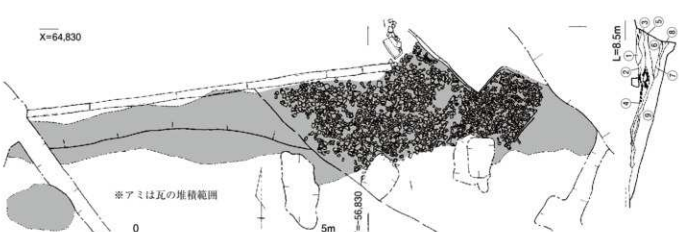


Fig.133　基壇的役割の斜面 SX1037（＝ SB11）実測図（1/100）

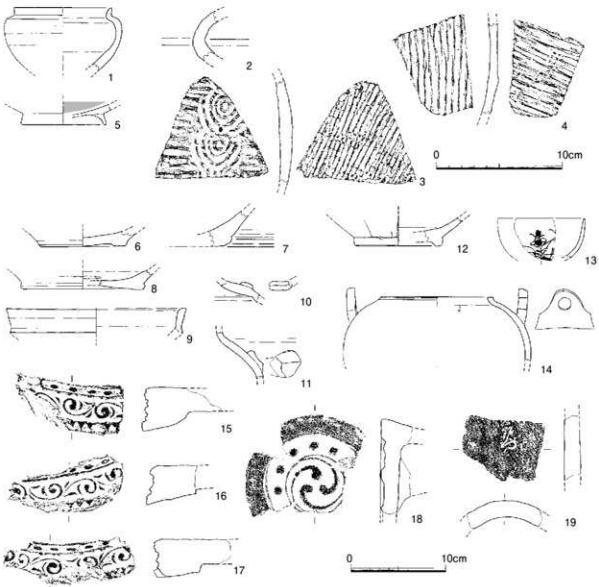


Fig.134　SX1037出土遺物実測図（1～14は1/3、他は1/4）

4）推定南門地区の遺構と出土遺物　Fig.135、PL.18

公園整備に伴う福岡城跡第11次調査において、鴻臚館跡第Ⅰ期調査地区南側の土塁下に鴻臚館時代の包含層がプライマリーな状態で存在していることを確認したため、土塁樹木の間に最大範囲の調査区を設けた結果、基壇状の高まりと、それに伴う雨落ち溝状の遺構 **SD65**を検出したもの（南東調査区）。福岡城土塁の頂部から南斜面に相当する。基壇状高まりの南東部コーナー部にあたっており、検出した範囲は南北２m、東西８mである。基壇状高まりの端は崩壊して緩やかな斜面をなしている。高まりに沿って溝 SD65が掘られており、南北溝は幅50cm、深さ約20cmで断面U字形をなす。東西部分は幅60cm、深さ10cm、断面形はU字形をなしている。長さ2.5mが残存しており、延長部分は江戸時代の地滑りにより失われている。基壇状遺構の南側に検出した石積みは、この地滑りの修復工事に際して造られたと推定される。雨落ち溝の合流点では僅かにコーナーを作り、溝は更に東に伸びていく。仮に基壇状遺構が建物基壇であった場合には、この溝は建物南側外面の雨落ち溝となると考えられる。

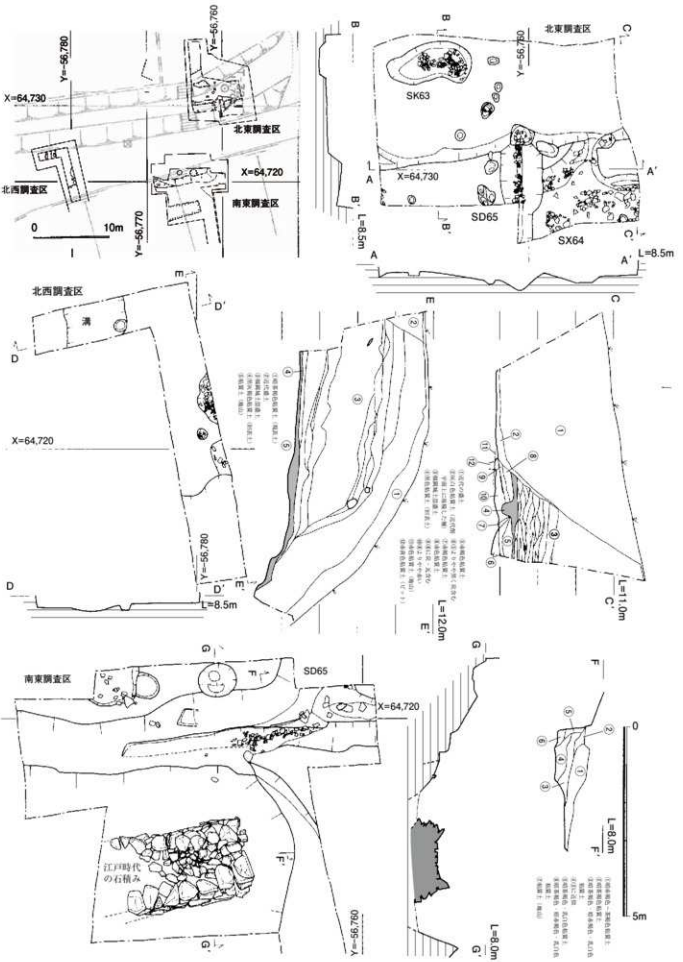


Fig.135　推定南門地区遺構実測図 (配置図は 1/500、他は 1/100)

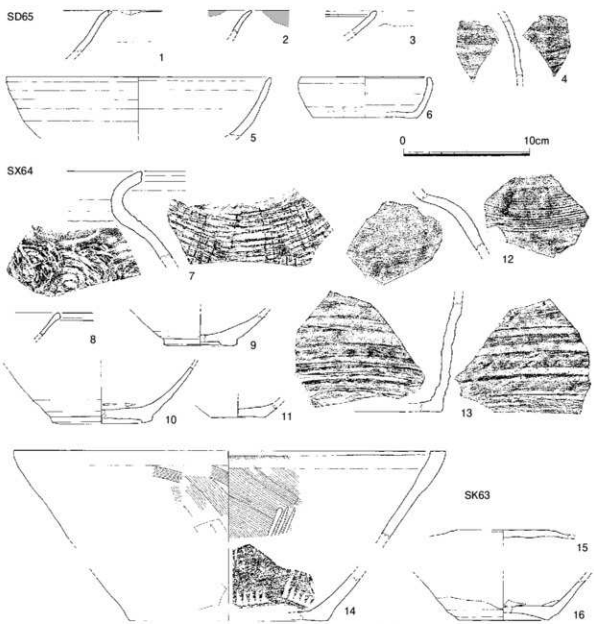


Fig.136　推定南門地区出土遺物実測図 (1/3)

次に、基壇状遺構の南北幅を知るために、北東側に調査区を設定した（北東調査区）。土塁の北斜面にあたり、兵舎弾薬庫と拳闘場造成による破壊が著しい。土塁下において、長さ３m、幅1.1 m、深さ40cmの南北方向の溝 **SD65**、及びこれと直交する長さ2.2 m、幅0.9 m、深さ20cmの土坑 **SK63**を確認した。溝の北端及び土坑周辺は、削平により一段低い。次に、東西幅を知るために北西側にＬ字形に調査区を設けた（北西調査区）。南側に段落ちを確認し、西側で幅1.3 m、深さ10cmの溝を確認した。

以上の３ヶ所の調査区により、段落ち、溝、土坑等の検出遺構から東西21 m、南北12.4 mの基壇状の遺構を想定したが、土塁樹木のため肝心な部分に調査区を設定することができず、明確さを欠いている。また、包含層や盛土から古墳時代の銅鏡片、銅鏃などが出土したが、今回報告からは省く。

ＳＤ６５出土遺物　Fig.136

越州窯系青磁、朝鮮半島産陶器、土師質・瓦質土器が少量出土した。**１～３は越州窯系青磁**である。**１・２は福建懐安窯産**で、**１は碗**、**２は褐彩坏**。**３は長沙窯の皿**とみられ、外面下半露胎。**４は高麗陶器壷**。５・６は中～近世の遺物で、**５は土師質浅形鉢**、**６は瓦質小形鉢**である。

ＳＸ６４出土遺物　Fig.136

SX64は北東調査区**SD65**の東側に検出した不整形の窪みである。須恵器、中国産陶磁器（越州窯系青磁・邢窯系白磁）、朝鮮半島産陶器、瓦質土器等が少量出土した。**7**は**須恵器甕**で外面格子叩き。**8**・**9**は**邢窯系白磁碗**。**10**・**11**は浙江省産**越州窯系青磁**で、**10**は**碗**、**11**は**平底小形碗**で、いずれも全釉である。**12**・**13**は**統一新羅～高麗時代陶器壷**と思われるが、12は須恵器の可能性もある。**14**は**瓦質擂鉢**2片で、接合しないが同一個体であろう。

14の中・近世擂鉢を除けば、概ね9～10世紀前半位までに収まる。

ＳＫ６３出土遺物　Fig.136

須恵器、土師器、越州窯系青磁がごく少量出土した。**15**は**須恵器坏蓋**で、天井部外面は回転ヘラ削りを施す。**16**は福建省**懐安窯青磁坏**である。

中国産陶磁は概ね9～10世紀にあたるが、遺物が少なく不確実である。　（吉武・田中）

第四章　おわりに

以上述べてきた南館部分の建物関係遺構についてまとめ、鴻臚館の建物復元案について検討する。情報量が少ない第Ⅰ期、塀内にまとまった建物が全く認められない第Ⅱ期については今後の検討課題とし、まずは第Ⅲ期を対象として復元を試みる。なお、北館については現在も発掘調査が継続中であることから現時点での所見を簡単に述べ、詳細については北館の報告書作成時に検討する。

1）鴻臚館跡の建物関係遺構の概要　Fig. 5

鴻臚館（筑紫館）の築造前には東に伸びる2つの丘陵があり、これを削平造成して平坦な台地を造り、南北に2つの施設を設けた。丘陵間の谷を活かして東に開口する東西方向の堀とし、南北を隔てるとともに、谷の東西に土橋・木橋・陸橋などを設けて連絡路とした。南北の台地上には、それぞれ柱列（欄）や布掘り塀、建物群があり、東門やトイレなどが設けられた。台地は周辺低地から3～4ｍ程度高く、台地下の低地部には外郭施設である築地塀が巡らされた可能性がある。

2）建物関係遺構の時期区分　Tab. 6

遺構・遺物の検討の結果、鴻臚館跡南館部分検出の建物遺構の時期区分については、Tab.6を追認するものとなった。建物関係遺構は第Ⅰ～Ⅲ期で確認しており、第Ⅳ・Ⅴ期については区画溝の一部を確認したが、明確な建物遺構は確認できない。ただしこの時期に比定される瓦が多数出土することから瓦葺建物が存続したことは間違いない。また、概ね11世紀代とみられる瓦が谷の北斜面に多く出土する状況から、鴻臚館末期には建物が北館に集約された可能性が指摘されている。

3）各時期の建物遺構

第Ⅰ期（7世紀後半～8世紀初頭頃）　Fig. 5・8

古墳群のあった東に伸びる2つの丘陵を造成して平坦な台地とする。南側に比べて北側の台地は南北幅が狭い。台地間の谷を挟んで南北に建物が配置されるが、南北で建物の主軸が異なる。第Ⅰ期整地土に瓦が含まれており、第Ⅰ期にも瓦葺建物が存在したと推定される。

南館部分では、東半部で「L」字形に配置された建物4棟と、その内側の1棟の建物を確認したが、西半は第Ⅲ期建物保存のため未調査である。建物柱穴から遺物が出土せず、建物方位が第Ⅱ期以降と異なるため最も古く位置付けている。ちなみに、梁行2間の南北棟（SB322・323）の切れる部分を中心と推定し、東西棟（SB320・321）を梁行2間と想定すれば、「コ」字形ないし「ロ」字形の建物配置を復元す

ることが可能である。

北館は、掘立柱列を長方形に巡らせた区画と、区画内に配された掘立柱建物1棟からなる。柱列の東辺に門と見られる柱間が開く部分がある。柱穴出土遺物は皆無である。柱列と平行する土留め石垣(高1.6m)が谷の北斜面に築かれており、石垣内から7世紀半ば頃の須恵器が出土することから第Ⅰ期を7世紀後半造営と推定している。その後、石垣は谷側へ積み直され、敷地の拡張が行われている。

第Ⅰ期の建物は南館・北館ともに柱穴の残りが悪く、特に南館では基底部のみの残存か、または完全に消失しているものもある。第Ⅱ期柱穴の残りが比較的良いことから、第Ⅰ～Ⅱ期間に1m以上の大きな削平が行われ、土砂を周辺に押し出して敷地の拡張を行ったと考えられる。

第Ⅱ期(8世紀前半～中頃) Fig. 5・12

谷を挟んで南北に同規模・同方向の布掘り塀を配置し、塀の東辺に門、南西区画外にトイレを設ける。谷は整形して北斜面に高さ4.2mの石垣を築き(第Ⅱ期以前に築造の可能性がある)、東側に土橋を架けている。谷頭には二つの池を設けるが、ひとつは第Ⅱ期のうちに埋没している。

南館では、布掘り塀1、東門1、掘込地業1、トイレ3の遺構を確認した。これらは主軸方位が等しく、出土遺物からも同時期の遺構と推定される。トイレ遺構出土遺物から時期比定しており、布掘り塀と地下地業からも鴻臚館式軒丸瓦が出土している。地下地業(SK140)は対照位置(北西隅)に確認できず、北館にも確認できないため、性格不明である。また、約43m離れた台地南端に幅3.5mの布掘り状遺構(SX865)があり、形状・方位・出土遺物から第Ⅱ期に比定している。

布掘り塀内部では第Ⅱ期建物遺構が確認できないことから、掘立柱式ではなく礎石式であったと想定している。整地層下の礎石据付け穴(SP824・828・829)やSB32・330馬道石組排水溝の下層の瓦を立てた排水溝など、二時期以上の建物が重なっている状況が窺え、これらの下層遺構が第Ⅱ期に合致する可能性がある。

北館は、谷を挟んで南館の北に約43m離れる。現在までに、布掘り塀1、東門1、トイレ2の遺構を確認している。布掘り塀に切られる整地層から8世紀前半～中頃の須恵器が出土し、布掘り柱抜き穴から白磁(8世紀半ば以降)が出土、またトイレ遺構から8世紀中頃の土器が出土するなど、南館より遅れて建て替えられた可能性がある。北館東門の東側の約1m低い平坦地には南北棟の掘立柱建物がある。

第Ⅲ期(8世紀後半～9世紀前半) Fig. 5・44

谷はさらに埋められて幅が狭くなり、木橋が架けられる。建物主軸は第Ⅱ期を踏襲しており、主軸を変えずに建物の拡張を行ったと考えられる。

南館は、礎石建物3(南北棟2、東西棟1)のほか、梵鐘鋳造遺構1などを確認した。雨落ち溝等から8世紀後半～9世紀前半の遺物が出土し、9世紀後半の土坑が建物に重複し、礎石抜き穴から陶磁器が出土するなど、9世紀中頃には廃絶したと推定される。推定南門については9世紀頃の基壇状の遺構を検出したが、調査範囲が限定されて狭く、明確さを欠く。

北館は、礎石建物1(東西棟)を確認し、布掘り塀との重複から早くて8世紀後半の造営で、9世紀後半には建物に重複して土坑を掘る。北館では、この建物以外にも礎石や礎石据付け穴とみられる遺構が散見され、北側崖下には礎石の一括廃棄が行われている。

時期不詳の建物関係遺構

上記の他、所属時期が明らかにできなかった建物関係遺構として、柱列、掘立柱建物、通路状遺構、礎石据付穴、瓦敷通路、基壇状の斜面、一段高い地山などがある。

4)第Ⅲ期建物の復元 Fig.137・138

第Ⅲ期建物は削平により大半が失われている状況であり、復元にはかなりの推定を交えざるを得な

い。これまでの調査により、第Ⅱ期建物と第Ⅲ期建物の基準線が等しく、建物の建て替えに際して基準線の変更がなかったことが明らかとなった。よって、中軸線についても変更がなかった（東門が踏襲された）と仮定し、第Ⅱ期中軸線を用いて南館第Ⅲ期建物遺構 SB31・32・330・50を北へ折り返し、不足する部分を北館第Ⅲ期建物（SB1228）で補って復元図を作成した（Fig.137）。南館の南西隅には礎石列が更に南へ伸びる部分があるが、第Ⅱ期トイレ遺構が第Ⅲ期にも引き継がれた（地下式ではないトイレ）と考えて建物を想定した。さらにSB32の東側で確認した断片的な建物関係遺構（基壇状の整地層・道路状遺構 SF272・礎石据付け穴 SP822等）についても、梁行3間の建物を大胆に想定した。

北館についても同様に復元した。北館では第Ⅱ期トイレ遺構は建物内部に収まる位置にある。

以上により作成した復元案を遺構配置図と重ね合わせて検討を行った結果（Fig.138）、①南館の北辺が基壇的役割の斜面 SX1037のちょうど内側に納まる、②礎石据付け穴とみられる SK1076等、建物の柱位置に合致する遺構がある、③建物以外の第Ⅲ期遺構（梵鐘鋳造遺構 SK15027等）も建物と重複しない、④原位置を保っていない動いた礎石が推定線の近くに位置する等、復元案を支持する要素が認められる。ただし、合致しない遺構もいくつかある。

北館については、礎石建物 SB1228と第Ⅱ期中軸線との距離が南館より短く、ひとまわり小さい規模と推定される。復元案を遺構配置図に重ねてみると、①北辺がちょうど崖際に納まり、崖下にまとめて投棄された状況で出土した礎石がこの建物に伴うと考えることができる、②西辺が整地を受けていない自然谷を利用した池 SG1115の内側に納まる、③単独の礎石や礎石据付け穴が建物に合致する位置にあるなど、復元案を支持する遺構が認められる。

これまで「推定南門」としてきた基壇状の遺構については、調査範囲が狭く遺構が不確実であることに加え、現在までの調査の蓄積においても、この遺構以外に「鴻臚館南面」を支持する要素が皆無であることなどの課題がある。この遺構については、第Ⅱ期の布掘り状遺構 SX865が第Ⅲ期に造り替えられたものである可能性を考えておきたい。

5）中世遺構のあり方からみた鴻臚館の痕跡　Fig.139

鴻臚館廃絶から福岡城築城までの間の遺構としては、南館部分で道1・地下式土壙5・梵鐘鋳造遺構1・鍛冶炉1・井戸1を、北館部分で池群・溝群・井戸1・斜面の段5・登坂道2を確認した。板碑や懸仏などの出土遺物の傾向から15世紀を中心とする小規模の寺院が営まれたと推定しており、16世紀代の斜面を段造成した集落遺構も確認している。未報告ではあるが、鴻臚館第Ⅲ期建物復元案の検証のため、これらの中世遺構分布図と復元案を重ね、鴻臚館廃絶後の痕跡が探れないか検討した。

南館部分については、中世の道（SD30・244）が、東門中央→通路状遺構 SF272→礎石建物 SB32・330間の馬道→礎石建物 SB31の柱間が開く部分（通路）に沿うように南に湾曲しながら西へ伸びており、鴻臚館の動線の一部の痕跡と考えられる。また、東側斜面下にはこの道に続く中世の道路が存在したと考えられる。北館部分については、中世溝（SD1244・1268）が鴻臚館の礎石を避けて掘られており、他の中世遺構も礎石や基壇を避けて設けられた可能性がある。15世紀の池群（SK14340等）の西側のラインが揃っている点などは、建物基壇の痕跡を示すと考えることもできる。

以上のような点について、復元案を支持する状況証拠として示すことができる。

6）成果と今後の課題

以上の復元案が正しければ、現在確認している鴻臚館の建物は第Ⅰ～Ⅲ期を通して東に正門があったことになり、中世遺構の分布からみて終末期まで「鴻臚館東面」の状況が継続したと考えられる。今後は報告書作成作業を進めながら、土坑等の他の遺構や北館建物遺構について詳しく検討し、異なる復元案を示すことができないか等を含めて検討を行っていく。　（吉武）

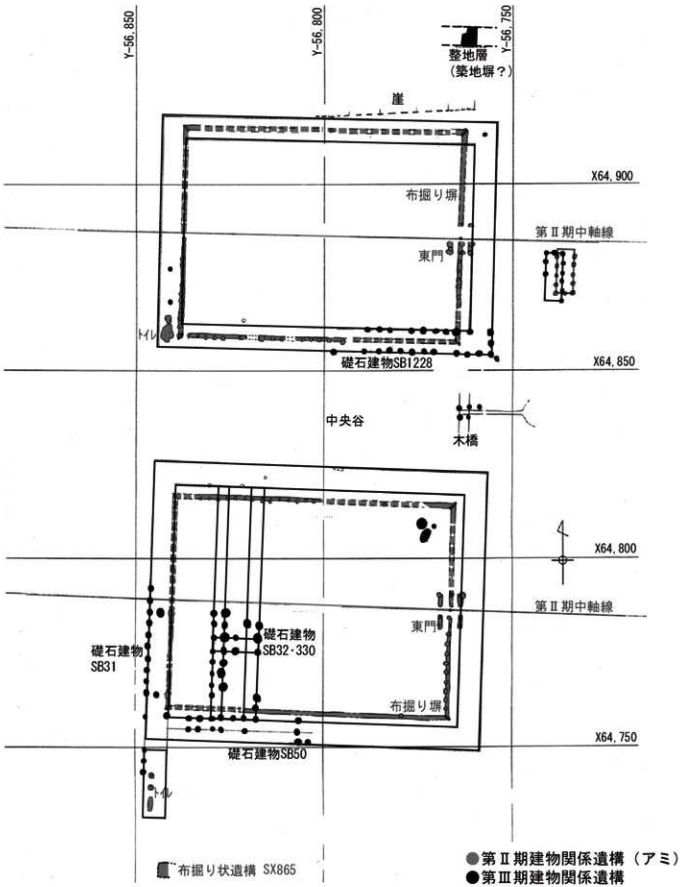


Fig.137 第Ⅱ期布掘り塀の中軸線から折り返した第Ⅱ期建物(1/1,000)

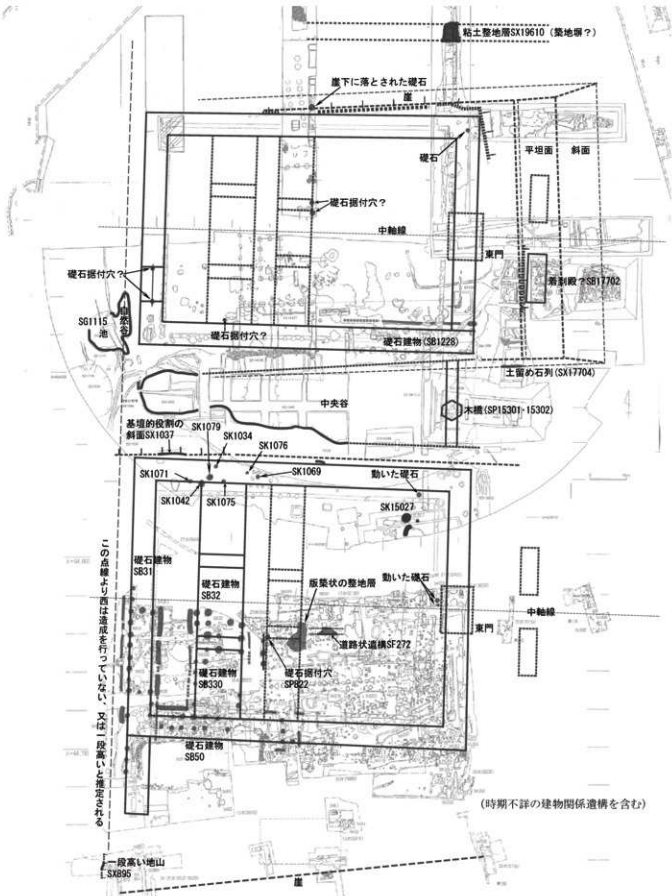


Fig.138　第Ⅱ期建物復元案(1/1,000)

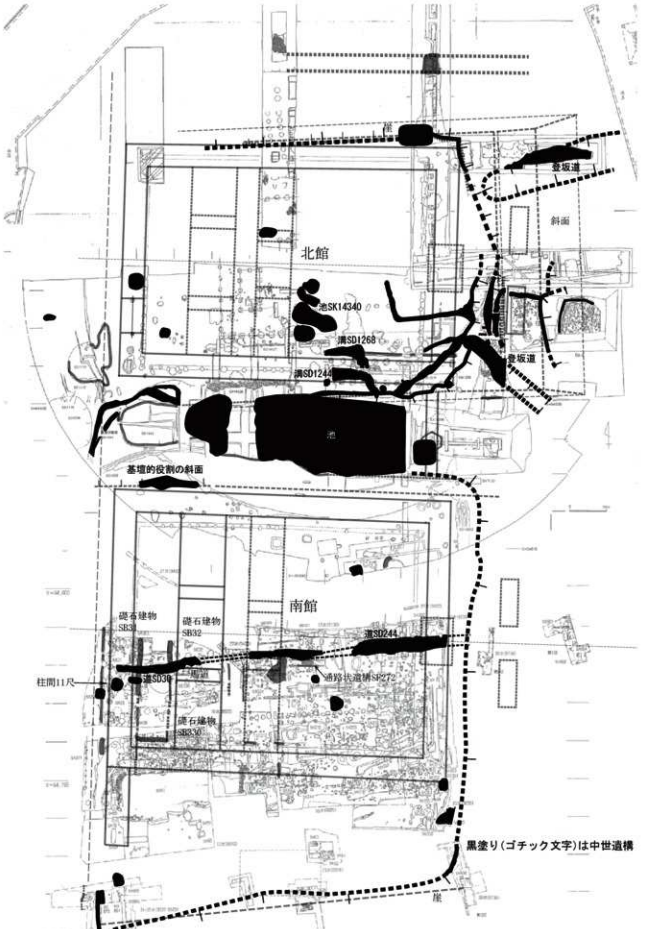
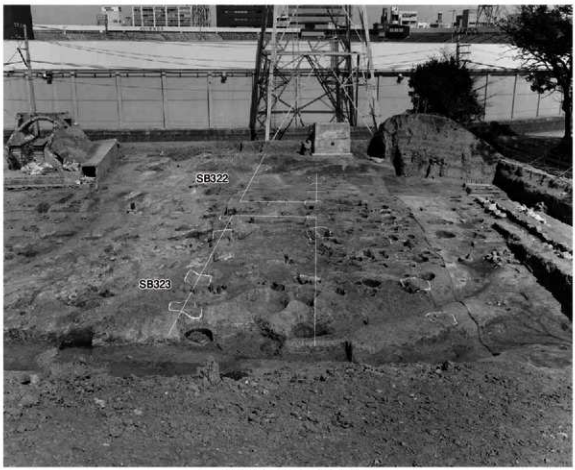


Fig.139　第Ⅱ期建物復元案と中世遺構配置図 (1/1,000)

図　版
(PLATES)

昭和26年の第1次調査（南西から）



1．掘立柱建物 SB322・323（南から）

2．建物 SB324、SP824・828・829 ほか（南から）

1．布掘り塀 SA150・301・302（上が北）

2．布掘り塀 SA150（西から）

1．布掘り堀 SA301土層断面 B-B'
（南から）

2．布掘り堀 SA301土層断面 C-C'
（西から）

3．布掘り堀 SA150土層断面 C-C'
（西から）

1．布掘り堀 SA1059（西から）

2．布掘り堀 SA15012（南西から）

1．SA1059柱穴０土層断面（東から）

2．SA1059柱穴５土層断面（東から）

3．SA1059柱穴６土層断面（東から）

4．SA1059柱穴８土層断面（東から）

5．SA1059柱穴11土層断面（東から）

6．SA1059柱穴12土層断面（東から）

1．東門 SB300（上方が北）

2．東門 SB300（南から）

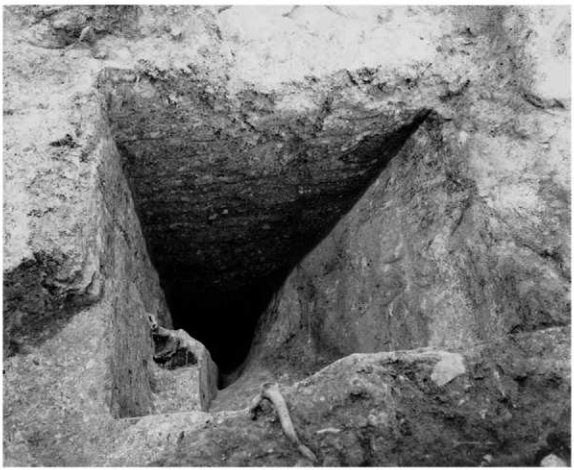
1．東門 SB300
（東から）

2．SB300の柱穴
SP702・703断面
（東から）

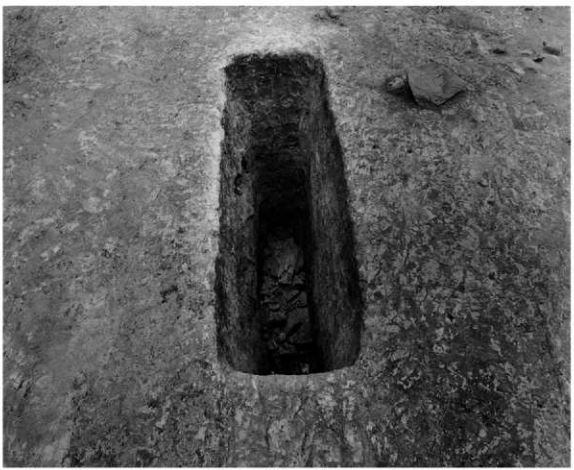
3．SB300の柱穴
SP704・705断面
（西から）

1．布掘り状遺構 SX865検出状況（東から）

2．布掘り状遺構 SX865（南東から）



1．地下地業 SK140土層断面（南から）



2．トイレ遺構 SK57（南から）

1．SK57遺物出土状況

2．SK57遺物出土状況

3．トイレ遺構 SK69
（南から）

1．礎石建物 SB31・32・330（西から）

2．SB31 西側雨落ち溝検出状況（北から）

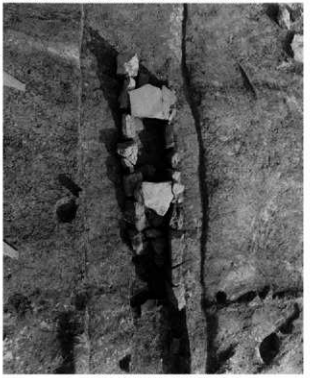
1．礎石建物 SB50（南から）

2．SB50 礎石群（南から）

1．SB31 西側雨落ち溝南端部（南から）

2．SB330 西側と SB50 北側の雨落ち溝の角（南東から）

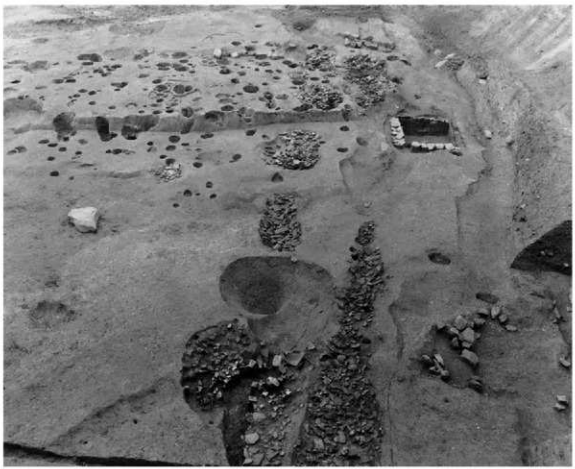
3．SB31・50・330 と続く雨落ち溝（西から）



4．SB50 暗渠排水溝 SD270（西から）

5．SB50 暗渠排水溝 SD270（西から）

6．SK1076（北から）



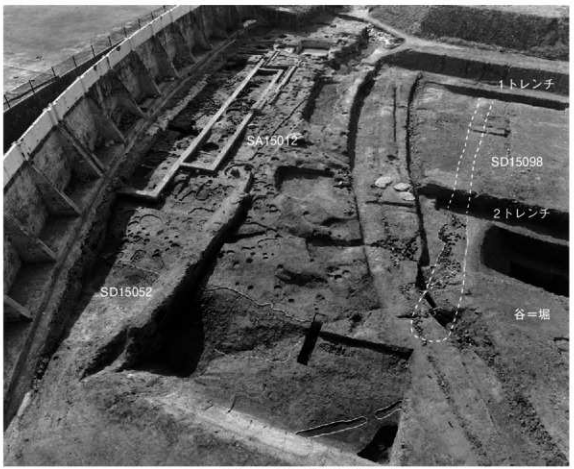
1．土坑 SK351～356・358、溝 SD357（南から）

2．SK352 遺物出土状況（南から）

3．SD357 南壁土層（北から）

4．SK1042（西から）

5．土坑 SK1069（南東から）



1．SD15052・SD15098分布状況（北東から）

2．SD15052（南から）

3．SD15052土層断面（北から）

1．SD15098東端（東から）
（右は谷斜面）

2．SD15098 1トレンチ－2トレンチ間（東から）

3．SD15098土層断面（東から）

4．SD15098瓦片出土状況（西から）

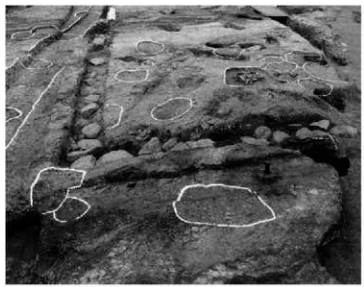
5．SD15098土層断面2トレンチ（西から）

6．SD15098 1トレンチ－2トレンチ間土層断面（西から）

1．道路状遺構 SF272（東から）

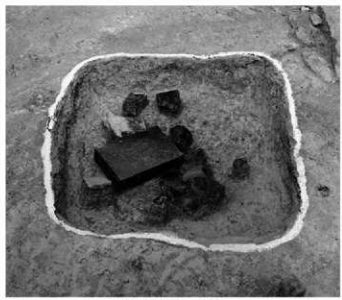
2．SF272の瓦（北から）

3．柱列 SA316（西から）



4．掘立柱建物 SB1070（東から）

5．SK1034（北から）



6．SK1071（東から）

1．SK1075（北から）

2．SK1079（北から）

3．推定南門南東調査区（南から）

4．推定南門南東調査区（西から）

5．推定南門北東調査区（北から）

6．推定南門北東調査区（東から）

Fig.29-3 (SK57)

Fig.30-17 (SK57)

Fig.42-5 (SK70)

Fig.29-11 (SK57)

Fig.29-12 (SK57)

Fig.30-18 (SK57)

Fig.42-6 (SK70)

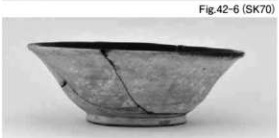


Fig.42-9 (SK70)

SK57・70出土遺物 (縮尺不同)

Fig.49-77 (SB31)

Fig.58-19 (SB32)

Fig.58-20 (SB32)

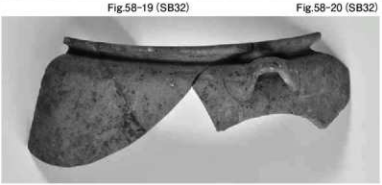


Fig.59-64 (SB32)

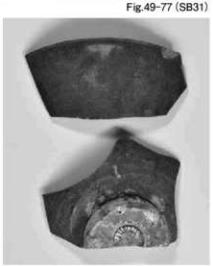


Fig.59-53 (SB32)

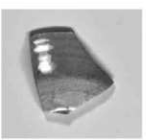


Fig.61-6 (SB330)

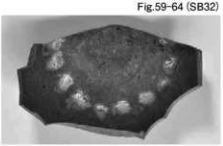


Fig.61-12 (SB330)

Fig.59-65 (SB32)

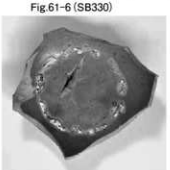


Fig.61-14 (SB330)

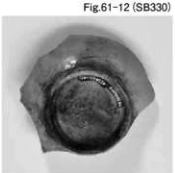


Fig.72-10 (SK351)

Fig.72-11 (SK351)

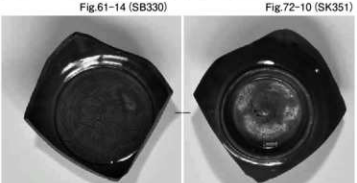


Fig.72-19 (SK351)

SB31・32・330・SK351出土遺物（縮尺不同）

Fig.72-20 (SK351)

Fig.83-6 (SD357)

Fig.83-22 (SD357)

Fig.84-34 (SD357)

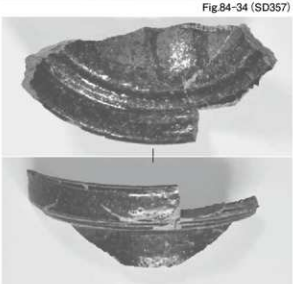


Fig.85-67 (SD357)

Fig.72-28 (SK351)

Fig.83-15 (SD357)

Fig.83-26 (SD357)

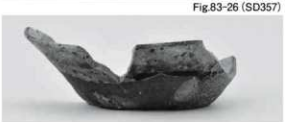


Fig.84-46 (SD357)

Fig.84-49 (SD357)

Fig.89-32 (SK358)

SK351・SD357・SK358出土遺物（縮尺不同）

Fig.33-37

Fig.33-38

Fig.33-39

Fig.33-40

Fig.33-41

Fig.33-42

Fig.33-43

Fig.33-44

Fig.33-45

Fig.33-46

Fig.33-58

Fig.33-47

Fig.33-48

Fig.33-51

Fig.33-54

Fig.33-53

Fig.33-56

Fig.33-57

Fig.37-137

Fig.37-136

SK57出土木製品（縮尺不同）

Fig.103-31

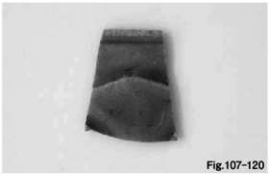


Fig.107-120

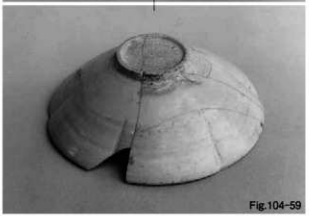


Fig.104-59

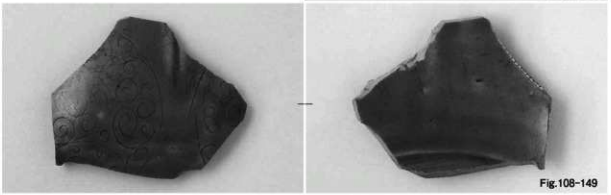


Fig.108-149

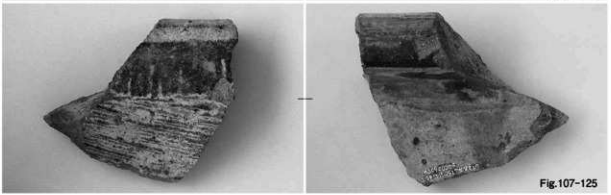


Fig.107-125

SD15052出土遺物①（縮尺不同）

Fig.113-186

Fig.113-188

SD15052出土遺物②（縮尺不同）

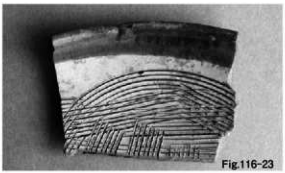


Fig.116-23

Fig.115-13

Fig.116-25

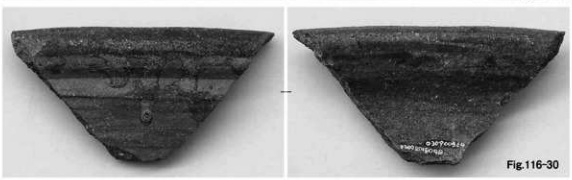


Fig.116-30

SD15098出土遺物（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	しせき　こうろかんあと
書　　名	史跡 鴻臚館跡
副 書 名	－南館部分の調査(1)－
巻　　次	鴻臚館跡 19
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1175集
編 著 者 名	吉武　学／大庭康時／田中克子
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8－1　　電話番号　092-711-4783
発行年月日	2012年3月16日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しせきこうろかんあと・ 史跡鴻臚館跡・ しせきふくおかじょうあと 史跡福岡城跡	ふくおかしちゅうおうく 福岡市中央区 じょうない 城内1－1	40134	0192	33° 35′ 12″	130° 23′ 11″	1988.7.27～1988.12.10 1989.4.20～1989.12.7 1990.4.9～1991.1.31 1991.5.1～9192.3.31 1992.9.10～1993.3.31 1994.6.6～1994.7.31 1995.11.1～1996.3.29 1996.7.4～1996.12.4 1997.8.18～1998.1.31 1999.4.22～2000.3.15 2003.5.6～2004.3.31	856 1,200 1,300 1,000 430 50 300 450 204 3,500 2,425 (計11,715)	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡鴻臚館跡・ 史跡福岡城跡	集落 官衙	古墳時代 ～現代	掘立柱建物 布掘り掘立柱建物 礎石建物 溝 トイレ遺構 土　坑 柱　穴	須恵器 土師器 中国陶磁器 朝鮮陶磁器 瓦 木製品 石製品	古代の客館である 鴻臚館(筑紫館)跡 の遺構

史跡 鴻臚館跡
鴻臚館跡 19
－南館部分の調査(1)－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1175集
2012年（平成24年）3月16日
発　行　福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1
印　刷　祥文社印刷株式会社
〒812-0016 福岡市博多区博多駅南4丁目15-17